
ロード&ナイト

COM

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロード&ナイト

【Nコード】

N9284U

【作者名】

COM

【あらすじ】

ゲーム好きの高校生、藍澤^{あいざわ} 和輝^{かずき}の元にある日、一つのダンボールが届く。

そのダンボールに書かれていたタイトルは《ロード&ナイト》。彼はすぐにそのダンボールの中身であるゲームを手に取り、早速プレイするが、なんとゲームの主人公が喋りかけてきた。そんな不思議なゲームキャラ、ザックと藍澤和輝が織り成す

RPG風ファンタジーアドベンチャー。

ロード&ナイト プロローグ

～ロード&ナイト～

まえおき

みんなはゲームをしたことがあるだろうか。

俺はその中でもRPGというジャンルが好きだ。

剣と剣が交じり合い火花を散らす、聞いたことも無いような魔法を唱える、

この世界の何処にも居ないような魔物や、獣とも人とも違う姿をした亜人の類、

魔王と命懸けで戦う勇者：つまり、ファンタジーの世界がこの上なく好きだ。

そして、今まさに魔王に斬りかかろうとしている俺を、

「藍澤！！貴様この大事な時期に教室でうたた寝か！」

という声とともにもう一人の魔王に叩き起こされた。

俺の名前は藍澤^{あいざわ} 和輝^{かずき}、18、要するに受験生だ。

趣味はゲーム、特技もゲーム、成績は中の上ほどで運動もできる、が部活には

入っていない。その理由はただ一つ。ゲームをする時間が減るからだ。

もちろん授業に対するやる気は殆ど無いが、テストの点だけは良いという状況

が続いていた。そんなことをしていれば、先生にただやる気の無い奴だと呼ばれ

てしまい、目を付けられてしまった。うちのクラスの担任はこれでもかと言う

ほどの熱血教師。短髪で、一度見たら脳裏から離れないような濃い顔、さらに、
年中ポロシャツ、短パンと見てるだけで気温が上がりそうな服装……
まあ嫌いで
はないが、出来るくせに何も努力しない。と俺のことを気に掛けて
いるようだ
が、こつちとしてはいい迷惑だ。起きると目の前には担任の暑苦しい顔……本当
に最高の目覚めだよ。そして、かぶせる様に
「藍澤、お前今のままなら進みたい大学の試験落ちるぞ！」
と言われたので。

「特に無いっすよ。」

と答えると二発目の出席簿アタックを貰った。もうおなじみの光景で周りのク

ラスメイトもクスクス笑っている。放課後、後ろから

「和輝、お前また寝てたのか。」

と笑いながら真志が声をかけてきた。真志は俺のクラスメイトで親友。もう、

俺には切っても切れない存在だ。

「ちげーよ、大冒険だ。」

と冗談を返すと。

「魔王様の降臨で即終了ってか。」

と乗ってくれた。

「本当に普通、出席簿で殴るか？しかも二回、一回は角だぜ？頭割れるって。」

と頭を擦りながら言ったら真志のやつも

「さすがにあれはまずいと思うぜ？」

と普通の返答。酷いもんだ、そこは愚痴なんだから乗れよと言いたかったがや

っぱりやめた。実際、正論だ。授業中に寝てるほうが悪いが、睡魔

のやつには

勝てない。

もし、もしもだ、この世界が剣で、魔法で、魔物や魔人、亜人そう
いったもの

であふれたファンタジーの世界ならどれほど良いことだろう。何度
と無く願っ

ていた…いつも…だが、現実には甘くは無い。そんなことでおとぎ話
の世界が広

がったら世界は混沌そのものだ。

それでも…もし、それでも違う世界が在るのなら…

そう思いながら俺は、刻一刻と暗くなるいつも通い慣れた道を、家
をめざして

とぼとぼと帰っていった。

俺は今でも忘れたことがない。その日から巻き起こる存在しないは
ずの物語が、

俺を知らない世界へといざなったことを。決して…

ロード&ナイト 第一章

「ロード&ナイト」

第1章 名前を入力してください――

「ただいまー。」

といっても家に帰り着くのは自分が最初の1人。もちろん返事はないが帰り着い

たら言わないとなんかすつきりしないのでとりあえずいつも言っている。家は

何処にでもありそうな住宅街の一軒家、父親が長年の夢だった3年前にローン

を組んで立てた。詳しくは聞いたことは無いが、父親の台詞からするとそんな

家を買うほど結構な重鎮になっているらしい。母親は専業主婦。ちようどこ

のぐらいの時間は夕食の買出しに行っているため留守になる。兄弟は弟が1人、

名前は拓也。俺と違い真面目で勉強熱心でいつも学校が終わるとそのまま塾に

行き、終わってから帰ってくるので帰宅は9時ぐらいだ。そしてしんと静まり返

った家に最初の1人、つまり自分が戻ってきたわけだ。とりあえず、荷物を置く

ため二階の自分の部屋をめざす。がインターホンの音で呼び止められてしまっ

た。

『こんな時間に誰だ?』

と思いながらも玄関の扉を開けるとそこには少し大きめの荷物を

持った宅配

業者がいた。そして、その男は

「藍澤 和輝さんのお宅で間違いないでしょうか？」

と尋ねてきたので、

「ああ、はい。」

と間の抜けた返事をしてしまった。別に宅配業者が来ることは珍しくない。む

しろ当たり前のことだが、その若干若いバイトと思われる男性は、間違いなく

藍澤「和輝」といった。俺はそのことにびっくりしていた。親宛ではなく、自分

宛の宅急便であるということに。そのままその男性は

「ここにサインを頂いてもいいでしょうか？」

と続けてきた。結局、自分は言われるままサインをし、男性はサインを貰った

のを確認するとその荷物を俺に渡して

「では、失礼します。」

と言い、事務的に挨拶をし帰っていった。あまりにも急な事だったのですこし

ポカンとしていたが、その自分宛の荷物が気になったので送り手の名前を真つ

先に確認した。なぜなら、ひとつだけ心当たりがあるからだ。

そして、送り手の名前を確認した俺は狂喜乱舞した。

《? パワー & ブレイン》

なぜなら、この会社はゲーム好きなら誰しもが知っている超有名ゲーム会社で、

この会社は市場には出さないネット販売オンリーのソフトを売っている。ゲー

ム好きの中でも、相当のマニアなら知っている激レアソフトが俺の元に届いた
ことになる。ちなみに、販売するソフトは、ジャンルのみを明かしてタイトル
を絶対に教えない。そうやって新作が出たのをこの会社のファンにしか知らせ
ないようにしている。しかし、なんでなんだろうな…まあ、いいか。
俺はその学生カバンより一回り大きい箱とカバンを持ち上げ、早足で階段を駆
け上がり、2階の自分の部屋に飛び込むなりカバンを投げ捨て。その段ボール
箱に手をかけていた。まだ開けてすらいないのに期待と興奮で鼓動が速くなり、
手が汗ばんでいた。ガムテープを乱雑に剥がし、いそいそと蓋を開けるとそこ
にはまさに俺が期待していた物が堂々と収納されていた。
《ロード&ナイト》と書かれた説明書らしきものが一番最初に目に飛び込んで
きた。もう興奮で今にも心臓が破裂しそうだった。中に入っているものを取り
出すと、分厚い説明書、マイク付きのヘッドフォンらしきものが一つ、三色ケ
ーブル、ACアダプター、そしてゲーム機本体が出てきた。
本体？たしかソフトのはずなのに…
そして、肝心のゲームソフトが入って無かった。とりあえず、組み立ててテレ
ビに繋いだが、そこでもう一つ気が付く。コントローラーも無い。それどころ
か本体のほうはコントローラーを差し込む端子が無い。困ったことにゲームを

始める前にどうしたら良いか、分からなくなってしまった。いつもなら説明書

など見ないでゲームを始める俺だが、今回ばかりはそうもいかなかった。渋々

説明書に目を通したが、やはり説明書というものはどうしても面倒だ。活字が

まるで兵隊のようにビシッと整列したページの群れ。赤字で書かれたどうでも

いい注意事項。そして、ただの説明書でさえ読む気が失せるのに、この説明書

ときたら辞典といい勝負が出来るのではないか、というほどやたらと分厚い。

ここまでくると、さすがに必ず説明書を読んでからプレイする真面目なプレイ

ヤーでも投げ捨てそうだ。しかし、これを読まなければゲームを起動すること

すら出来ない。まさに生き地獄だが、俺は絶対この説明書の全てに眼を通した

りはしない。理由はただ一つ、面倒だからだ。すぐさま目次を開き、必要な情

報のページだけを読んでいった。するとその説明書の操作方法のところには、

こう書いてあった。

「このゲームは脳波を付属のアイカムでキャッチし、ゲームに反映させるという

最新技術を用いています。その為、全ての操作は脳波によって行います。」

と書かれていた。

『脳波か…なんかテレビで話題になってたな。』と思い出す。

本来はゲームのためではなく、体が不自由な人ための技術らしいが、

パワー＆

ブレインがそれをゲームに起用していた事に驚いた、と同時に感心した。このコントローラーならそういった人や、今まで操作が難しくてゲームというものを触らなかつた人も取っ付きやすいだろう。とまあ、そのことは置いて。操作方法がせつかく分かったのにプレイしないのはもったいない。とりあえずゲームを起動し、ニューゲームと頭の中で想像していると、画面のカーソルがニューゲームを選択し、決定してくれた。思っていた程苦もなく動かせたので安心した。すると画面が進み、とある画面が映し出された。

「名前を入力してください」

どうやら名前入力画面のようだ。早速、名前を入力しようと思ったがその必要は無かった。なぜなら、最初から入力されている主人公の名前は「ザック」だった。

だからだ。何故、名前を変えなかったのか。それは、俺はゲームの中の主人公の名前を変えられる場合、必ずザックにしていたからだ。理由は、クラスで

「あいざわくん」と呼ばれた時、ふと「あいざわくん」の「わ」の音が聞こえず、「ざつくん」と聞こえた時にザックという言葉の響きが気に入り、俺が前

プレイしてたゲームの主人公の勇者の名前をザックとしたことが始

まりだった。

自分の中でザックという存在はヒーローであり、同時に、自分が出
来ないこと

を代わりしてくれるような、そんな理想の存在だった。そのため、
元々入っ

ていた主人公の名をそのまま使わせてもらうことにした。その主人
公の元の名

前が、ザックというだけでとても親近感が沸いた。

そして、頭の中で決定と念じ、オープニングの画面へと進んだが、

俺はオープ

ニングも基本的には見ないため、スキップすることにした。理由は
同じ、面倒

だからだ。

早送りで、一気に物語の初めへ、最初のやり取りも飛ばしながら映
像だけを見

て、判断しようとしていたが、予想以上にやり取りが早く、内容は
ほとんど理

解できていなかった。ある程度すると、主人公と思しき青年が、

「ザック」それでは行つて来ます。」

といい、村人たちから見送られていた。その中の老人が

「村長」必ず魔王を倒してくるのじゃ。ただし、無理はせんよう
に。」

とザックに語りかけていた。

ちよつと失敗したかもしれない。最初のやり取りでもう、何故勇者
に選ばれた

かの説明があつたようで、既にザックは勇者として今まさに旅立
つとしてい

た。

そして、彼はこちらに振り返るところこちらを見て、

「ザック」それじゃあ、よろしくな！」

と喋りかけてきたのである。俺は、いったい何が起きたのか状況を飲み込めず

に、ただポカンと画面のそいつを見つめていた。喋りかけてきた……のか？

「「ザック」おーい。どうしたんだよ。早く行こうぜ！」

いや、そんなはずは無い。気のせいだ。

俺は、まだ状況が理解できていない。というより、理解したくなかった。が、

そいつは俺のそんな思いを無視して、もう一度喋りかけてきた。

「「ザック」なに？ずつと見つめて。俺、顔なんか付いてる？」

こいつしかも俺のこと見えてるのか……

理解したくないが、これが新技術のたまものなのだろう。そのテレビ画面に映

るザックは色々とゲームの常識を無視しているが、俺はそう思い込むことにし

た。ザックには俺のことが見えており、さらに、俺に向かって喋りかけてきて

いる。とりあえず、

「い、いや……別に……。」と答えた。まだ動揺しているのがばれたのか、そい

つは、

「「ザック」何びつくりしてんの？もしかして説明書読んでないの？」

ギクツとした。というか何故、説明書を読んでいないことがばれたんだ？

「「ザック」あ、図星か。駄目だろ、ちゃんと読まないと。」

さらにゲームの主人公に駄目だしまで……ゲームをやってて初めて悲しくなった。

もちろん、違う意味で。

「「ザック」とりあえず読んどけよ。後々面倒になる前にさ。」

「ああ、わかったよ。」何故、ゲーム内のキャラから指示されてるんだ？普通、逆じゃないのか？とは思いつつも、もう一度説明書を読み返すことにした。するとそこには、

《このゲーム内のキャラクターは、あなたという存在のことに気が付いていま

す。あなたはこのゲームの主人公の君主となり、主人公である騎士^{ロード}を導いてください。》と書かれていた。

なるほど、だから何の躊躇も無く、この主人公は喋りかけてきたのか。

そのまま、ほかのページも読んでいく途中、そこで俺はある項目の違和感に気づく。

注意事項

1. ゲームをする時は、画面から離れてプレイしましょう。
2. 1時間に1回、15分ほどの休憩を挟みましょう。
3. 本ゲームをプレイする際、絶対にクリアするまでアイカムを外さないこと。

アイカムを絶対外すな？ということだ？注意事項に書かれているくらいだか

ら、なにか意味はあるのだろう。が、そんなことはできない。RPGというゲーム

は、クリアするまでに結構な時間がかかる。要するに、この注意書きのとおり

にすると、普通の生活をアイカムを付けたまま行えと遠回しに言っているよう

なもんだ。それを何故、注意書きに書いたのか…外してはいけない理由でもあ

るのか？と、色々考えていたら

「「ザック」おい。まだかよ」。待ちくたびれたぜ」。

という声に遮られた。なので

「あ、ああ悪い。待たせたな。」

と答え、すぐにゲームを再開することにした。もう少し、ザックを待たせてでも、その注意書きの意味を考えるべき

だった。そうすれば、あんなことにはならなかったはずなのに…

ロード&ナイト 第二章

「ロード&ナイト」

第2章 勇者クラウドが現れた！

「「ザック」とりあえず理解した？」

「ああ。とりあえずな。」

本当にとりあえずである。急かされたせいでちよこっとしか理解していない。

こいつは説明書を読ませたいのかそうでないのかよく分からん。

「「ザック」それじゃあ、目的地に向かって出発進行。」

目的地？俺は目的地が何処なのか知らないんだが……あつ。もしか、それもオ

ーピングで…

「「ザック」どうしたんだよ。一本道だろ？何迷って…」

そこでザックの言葉がとまる。

「「ザック」お前、まさかオーピングも…」

「そうだよ！オーピングも飛ばしたよ！」

「「ザック」はあゝ、何やってんだか。」

どうして、ここまでこいつは勘が鋭いんだ？完全に俺の行動パターンを読んで

いる。
「「ザック」あのなあ、説明書までは分かる。でも、さすがにオーピングぐら

いは見るよ。めっちゃ大事なことに。」

とため息をつきながら、画面のそいつが俺を呆れた目で見ながら言っている。

なんで俺はゲームしながらこんな惨めな思いをしなくちゃいけないんだ？ゲ-

ムのキャラから呆れられるって、どんな拷問なんだよ。

「仕方ないだろ。面倒だったんだから。」と言い訳をしてみた。が「ザック」そこで見てないから、今面倒な目にあってるだろ？」

と言われる。くっ…悲しいことに、非の打ち所の無い正論だ。

「はいはい、すいませんでした。」

と平謝りをする

「「ザック」仕方ない。説明しながら進もう。」

と返してきた。

何故だろう。こいつの方が俺より大人に見える…泣きてえ

「「ザック」とりあえず、今俺たちがいるのが「カマシゴ村」という場所、今現

時点の目的地は、この「ユウキ・ユウシ島」唯一の港町の、「クフオカ王国」なんだ。」

「港？船に乗るのか？」

と俺が聞くと、再度、呆れた顔で

「「ザック」最終目的地は、最北端にある「ホウカイ島」。その島には、魔王城

があつて、魔王はそこにいる。最終目的は、その魔王を倒すこと。そして、今

自分たちがいるのが南端のユウキ・ユウシ島なんだ。」

よくありがちなマップ構成だ。魔王を倒すため旅をする勇者は、だいたい魔王

城の真反対の位置にあることが多い。なぜなら、その旅の途中で仲間と出会っ

たり、技を身に付けたり、さまざまな敵と戦って心身ともにどんどん強くなっ

ていくからだ。

「要するに、この島を出てもっと大きな大陸に行くって事だな。」と聞いた。すると

「「ザック」なんだ。物分り良いじゃん。これからはちゃんとオーブニングとか、

途中のムービーも見ながら進んでくれよ。」

と言われてしまった。

が、褒められたので少し嬉しい。ん？ちょっと待て。何で俺は、ゲームキャラ

に褒められて、浮かれてんだ？それに気づいて少し複雑な気持ちになっただ。

「「ザック」たしか、ここからクフォカ王国までは一本道で、そんなに強い敵も

出なかったはずだから…」

「途中の村で、武器や防具、アイテムを揃えながら進んで行きやあいいんだよな。」

「「ザック」その通り！」

意外といい相性だったりする。そりやそうか、一応、俺の分身みたいなもんだからな。

「「ザック」それじゃ、クフォカ王国に向けて…」

「出発だ！」

そして、やっと俺たちの旅が始まった。

ザックの言ったとおり、道は一本道。これといって目を引くようなものも無い。

『最初は、弱い敵でも倒して…』

と思っていたが、そこであることが気になった。敵はどうやって出現するのか。

ゲーム画面の世界はまるで、実際に自分が山を歩き回っているような感覚にな

るほど、リアルな草原や林が広がっていた。故に気になる。茂みから飛び出し

てくるのか？それとも歩き回っているのか。とわくわくしていたが、実際はそ

んな可愛らしいものじゃなかった。

突然、目の前の何も無いところに別の次元に繋がっていきそうな大きな穴がぽつ

かりと開き、そこから敵が飛び出してきた。

「ちょー！！なんだこれ！！」

と、俺が驚いているとザックは冷静に

「「ザック」おっ！冒険始まって初めての敵だ。」

と喜んでいる。

まてまてまてまて…何故、こいつはそんなに冷静なんだ？俺は心臓が破裂つき

そうなくらいびっくりしたのに。

「「ザック」なんだあラビか。まあ、当たり前だけだな。」

その穴から出てきたのは、手乗りサイズぐらいのウサギらしき生物だった。

何でがっかりしてるんだ？俺が言っていることのほうがおかしいのか？

「「ザック」さあ、倒そうぜ！」

「いやいやいやいや…ちょっとまて！色々とまて！なんでさらっとこのラビだ

っけ？こいつが空間裂いて出てきたこと受け入れてんだよ！！」

とりあえず聞いてみた。俺の疑問は間違っていないはずだ。ところが「「ザック」えっ！敵ってこうやって登場するものなんじゃないの？」

ああ…忘れてたよ…これ、そついやただのRPGだったね…

どうやら本当に俺が言っていることのほうがおかしかったようだ。ザックがあま

りにも自然に話しかけてきたもんだから、これがゲームだということとを忘れて

いたよ…

「あー…うん…倒そう…さつさと。」

なんだか、たった今の一瞬でどっと疲れた。いまさらゲームの常識を持ってく

ると思わなかった。いままですつと常識を無視し続けていたくせに…宣言通りさつさとラビを倒し、近くの村を探していた。

最初の一匹以降も、いろんな種類の魔物とちょこちょこ戦っていた。そのため

経験値やお金も手に入れていたが、結構ダメージも貰っていたので、村で少し

休んだり、アイテムや装備を整えたかったからだ。

少しすると、小さな村が見えてきた。村の入り口の看板には、《モクマト村》

と書かれていた。

「しかし、いい位置にあつたな。」

「「ザック」確かに結構疲れてたしね。」

やはりゲームの中の世界といえど、長距離歩いたり、何度も戦闘すると疲れる

のか…なんか、妙にリアルだな…そういや、お金の単位もゴールドとかじゃな

くて円だし…

「とりあえず宿だな。」

「「ザック」宿はいいけど……お金…ある？」

どういう意味だ？普通、こういう序盤のほうの宿つてのは安いのが相場だ。

「大丈夫だろ？さっきまでの戦闘で結構、金も集まったし…」

「「ザック」だといいけど…」

宿に着いた。そこでカウンターの人に

「「ザック（プ）」一晩でいくらですか？」

と聞いたらとんでもない答えが返ってきた。

「「宿屋」お一人様、2,000円になります。」

「どんなところまでリアルなんだよ！！誰が、いつ、普通に観光気分で宿泊する」と言っただけ！馬鹿か！このゲームは馬鹿なのか！！」

あんまりなことが起きたので、ついに突っ込んでしまった。確かに安い。破格

の値段設定だ。だが、それは現実だから安いだけであって、ゲームの中じゃ馬鹿

鹿みたいに高い。もちろん、序盤でそんな大金持っているわけが無い。

「「ザック（プ）」そこをどうにかできませんか？」

駄目元で聞いてみるが

「「宿屋」すみませんが、こちらも商売ですので……」

当たり前か……とすると、回復が恐ろしく困難なことになる。どうするか……と悩

んでいた時、ふと後ろから

「「……」ハハハ……困ってるみたいだね。」

「「ザック（プ）」あ、はい。えっと……あなたは？」

振り返ると、そこには中年ぐらいの優しそうな男性が微笑みながら立っていた。

「「クラウド」おお、すまない。自己紹介がまだだったね。私はクラウド、君と

同じ勇者だ。」

またびっくりさせられた。まさか、もう1人勇者がいるとは思わなかった。

「「ザック」なんで勇者だって分かったんだ？」

ちよつと口の利き方が失礼だが、いい質問をしてくれた。何故、見ただけなの

にその人が勇者なのか分かるのかとても気になる。

「「クラウド」簡単なことさ。きみにプレイヤー表示があったからね。」

「「ザック」プレイヤー表示？」

「「クラウド」プレイヤーが操作しているキャラには頭上に、プレイヤーと書かれていますよ。」

そう言われ、クラウドさんの頭上を見ると、「プレイヤー」の表記が浮いていた。

そういうことが！気づかなかったが、どうやってかは知らないがこのゲームは

オンラインに繋がっているのか。そしてプレイヤーは皆、勇者のロードとなっ

ている訳か…てことは

「「ザック（プ）」あなたも宿に泊まれなくて困っているんですか？」

「「クラウド」ああ！忘れていたよ。ちょっと待ってておくれ。」

と言い。クラウドさんはカウンターの方に

「「クラウド」すまないが、彼も真正銘の勇者なんだ。勇者料金にしてやってく

れないか？」と切り出した。

「「宿屋」そうだったのですか！これは失礼いたしました。」

とこちらに謝ってきた。勇者料金なるものがあるのか…

「「宿屋」それでは、勇者料金で一人様、10円です。」

安っ！！勇者っていうだけでそんなに待遇がよくなるのか…

「「クラウド」ちなみに、どの店も、どの町や村のお店でも通用するから覚えてお

くといよ。」

と最後に付け足した。

「「ザック（プ）」すみません。いろいろとありがとうございます。」

「「クラウド」ここで会ったのも何かの縁。また会えるといいね。それじゃ。」

そういつてクラウドさんは、宿屋を出て行った。

その後姿は、まさに勇者そのものだった。

「「ザック」とりあえず休もうぜ。もうクタクタだよ。」

「ああ、そうだな。ゆっくり休めよ。」

そう言ったが、頭の中ではクラウドさんの後姿をもう一度思い出していた。

『俺もあんなふうになれたらな……』

そんなことを考えながら…

ロード&ナイト 第三章

〈ロード&ナイト〉

第3章 クフォカ王国へようこそ――

ゲーム画面が少しの間暗転し、そして、また宿屋の映像が映し出された。

「「ザック」おっはよー！」とザックの元気な声。

「「宿屋」おはようございます。ゆつくり休めましたか？」

「「ザック」もちろん！最高だったよ！」

「「宿屋」ありがとうございます。それではお気をつけて。」

こちらでは一瞬だったが、ゲームでは丸一日たったようだった。暗転する前と

外の明るさが違ったり、その宿屋の食堂にいた人たちが変わってたりと結構、

手が込んでいる。

「よお。元気そうだな。」

とまあ、普通に聞いてみたが、

「「ザック」元気いっぱい、今日も朝からガンバロー！」

と返ってきた。

いくらゲームのキャラとはいえ、寝起きでここまでテンションが高いとウザイ。

「わかったよ。とりあえず、武器屋と道具屋行くぞ。」

「「ザック」OK！レッツゴー！」

いい加減、イラッとする。もしこいつが修学旅行とかで同じ班だったら、間違
いなく殴る。

まあ、そのうち元のテンションに戻るだろう。とりあえず置いといて。その村

の、唯一の武器屋と道具屋によった。さっき教えてもらった通りに言うと、殆

どのアイテムや武器、防具が格安で手に入った。さすが勇者さまさまだ。しか

し、クラウドさんにもお礼を言わなきゃならない。クラウドさんのおかげで、

装備も充実してるし、体力も回復できたのだから…やっぱり、かっこいい…

その後、王国への正確な行きかたをおじいさんに教えてもらい、村から王国に

向けて再出発した。その道中でも魔物がちょこちょこ襲ってきたが、装備も充

実しているし、レベルも上がっていたので難なく進むことができた。しばらくすると、小高い丘を越えた向こうから、今までと比べると

とてつもなく大きい城と町が見えてきた。その姿はまるで山を一つ切り崩して建てたので

はないかと思うほどに大きく、一際目立つ城を中心に山裾のように町が伸びて

いた。実際に見たことは無いが、いわゆる城下町というものだろう。

「「ザック」すげえ！あれがクフオカ王国か！」
「なんだ、ザックは知ってるのかと思ってた。」

「「ザック」大人たちから話には聞いてたけど、ここまで大きいとは思わなかったよ。」

てことは、見たのは初めてなのか。どうりでこんなに目をキラキラさせている

のか…

「「ザック」なあ！早く行こうぜ！」

と、急かす。

ああ、そついやこいつの操作は俺がやってたんだつたな…俺が操作しないと何もできないのに、ちょこちょこ指図してくるし、こつちのことを（オープニン

グ飛ばしたくらいで）哀れんだ目で見てきたりする。

しばらく歩くと、大きな門があり、番兵がビシツとした姿勢で両脇に立っ

た。初めて歩く場所のため、ザツクは少し落ち着きが無かった。

番兵の前を通った時、

「「番兵A、B」ようこそ！クフォカ王国へ！」

ザツクはちよつとびっくりしていたが、番兵たちは気にせず、職務を全うして

いた。よかつたなザツク、不審者扱いされなくて…

町の中に入るとそのでかさをまじまじと実感させられた。そこらじゅうに立ち

並ぶお店や住宅、ここに住んでる人や、観光の人、もちろん勇者もちらほら目

に付くが、プレイヤーの表示のある勇者とそうでない勇者がいるところを見る

と、プレイヤー表示の無い勇者は、新米勇者へのアドバイス役だろう。

しばらく街中をぶらぶらしていたが、人だかりができていることに気づいた。

「なんだ？見世物でもやってるのかね。」

「「ザツク」行ってみようぜ！」と一言。キラキラと目を光らせながら。

田舎から出てきた子供じゃないんだから、何もそんな期待した目をしてなくても

いいんじゃない？…ってそついやこいつ、田舎出身で俺と同年だったな…

その人だかりの中心を確認しようと寄っていくが、人が多くて見えない。

「「ザック（プ）」すみません。ちょっとだけ見せてもらってもいいですか？」

「「勇者A」ああ、なんだお前も盗賊退治か？」

と、その場所を譲ってくれた勇者が聞いてきた。

盗賊退治？なんのことだ？と思いながらその中心を見てみると、恐らく王宮兵

士と思われるよろいに身を包んだ男が立っていた。そしてその男は「「兵士」国王陛下は今、盗賊退治の任を受けてくれる勇者を探しておられる。

見事盗賊を倒し、その盗賊の頭を捕らえたものには報奨金を払うと申しておら

れる。だれか退治に行くものはいないか。」と何度も言っている。

「「ザック」なあ、俺たちで退治しちゃおうぜ！」

「おいおい、冗談だろ？何でわざわざ厄介ことに首を突っ込まなくちゃいけない

いんだよ。そのうち誰かが行くだろ？」

と言うが、その時

「「勇者B」確か、このあたりで有名な盗賊団だろ？確か名前は…」

「「勇者C」黒豹盗賊団だよ。最近ついに船も盗んだらしいぞ。」

なっ！それは困る。船がなきゃこの大陸から出られない。くそっ！避けれない

のか…と思ったその時、

『こんなでかい町なのに、船が一隻しかないなんてことあるわけが無い。』

と思った。が

「「勇者B」中央大陸行きの船もその一隻しかないからな。船を返す代わりに何

を要求してくるか…」

脆くも俺の考えは崩れ去る。まあ、そくだよな。ゲームなのに無視できるわけ

ないか…

「「ザック」行こうぜ！早く！」

「分かった分かった。その前に準備を…」

「「ザック」兵士さーん！俺行きます！」

「人の話を聞け！てゆうか、勝手に喋ってんじゃない！まだ準備が…」

「「兵士」おお！そうかならば早速、国王に…」

そう言いかけた兵士の言葉を制止するように駆け寄り、剣を鞘ごと抜き、鞘で

殴った。

「「兵士」貴様！何をす…」

「「ザック（プ）」何をするじゃねえだろ。何、勝手に話進めてんだよ。あ？こつ

ちはまだ準備できてねえって言うてんだろ？なーにプレイヤーほつといてゲー

ムキャラだけで話進めてんだ？あ？コラ」

「「兵士」いや…そなたが…」

「「ザック（プ）」そなたがじゃねえよ！！こいつが勝手に言っただけだよ！大体

てめえもだザック！人に話し聞けって言うつといて、てめえは人の話聞かねえの

か？あ？」

「「兵士・ザック」いや…その…ごめんなさい。」

なんか…久しぶりにぶち切れた…俺もよく覚えていないが、小一時間ほど説教

をたれていたの、今度は俺が人だかりの中心になっていた。

「とりあえず分かったな？もう二度と俺の言ってること無視して会話進めるな

よ。」

「「兵士・ザック」はい……」

説教をしてふと我に返る。部屋に置いてある時計に目を向けると、もう9時になりかけていた。

「もうこんな時間か……」

そういえばおかしい。もう母親は帰ってきてる時間なのに、物音が聞こえない。

腹も減ってきていたので一旦、リビングを見に行こうと思い、アイカムを外そうとした時、ぎりぎりのところでザックが

「「ザック」お、おい。アイカムは外すなよ？」と心配そうな声を出した。

「大丈夫だよ。リビング見に行くだけだから。」

そういつてアイカムを外し、階段を下りてリビングへ……ところがすぐその異変

に気づく。リビングの電気がついていない。部屋の電気をつけると机の上に

メモと千円札が置いてあった。メモには

「和輝へ

お母さんちょっと昔の友人と食事に言ってくるわね。

なるだけ早く帰ってくるから、お弁当買って食べといてね。

ごめんね。

P.S

拓也の分も買っというてね。

お母

さんより

「

と書いてあった。

「そういうことが、仕方が無い。」

と呟いて机の上の千円札を取り、外出の準備をした。家に帰ってすぐゲームを

始めたので、まだ制服のままだった。急いで着替え、財布に千円札を入れ、出

かけようとしたが、その前にテレビの小うるさいのに事情を説明しとかないと

帰ってきた時に、いろいろ言われそうなので、

「悪い、ちよつと買い物行ってくるから待っててくれ。」

とだけ言って、足早に部屋を出た。最後にあいづが言ったことが気になるが、

多分、聞き間違いだろう。普通、「死ぬなよ……」なんて言わんだろ。少し不安にはなったが、そのまま自分がよく行くコンビニへダッシュで行き、

俺と弟の好きな弁当を買い、ゆっくり帰っていた。

いつもならこの時間でも人が多い通りなのに、今日は何故か人に会わなかった。

街灯の少ない住宅の裏道、ちょうど街灯の明かりが届かない明かりと明かりの

間にさしかかった時、《ソレ》は音もなく俺の前に現れた。

ロード&ナイト 第四章

（ロード&ナイト）

第4章 トカゲ男が現れた――

最初はソレがなんだか分からなかった。ただ闇の中に何かがある。それが分かる程度だったが、次第に目も慣れ、そこにいるものの正体がやっと分かってき

た。と同時に、恐怖で俺の全てが支配された。

そこには闇の中に薄く浮かぶシルエツト、ただの大きな男などですますことの

できないサイズ、優に2メートルは超えている。人ではありえないサイズだっ

たソレは、ゆっくりとこちらへ近づいてくる。いや、正確には分かっていない

がそんな気がした。もう、何も考えられない。俺は、反対の方向へ走り出そう

としたが、その大きな何かは、疾風のごときスピードで回り込んできた。と同

時に、左腕に痛みが走る。どうやら腕を引掻かれたようだ。もう、人として在

り得ない。そんなこと出来る筈が無い。在り得るとしたら、そこに立っている

のは…トカゲ男…

『ああ、俺、ゲームのやりすぎで頭がおかしくなったか、でなきやゲームと現

実が混同しだしたか…』

もうそんなことしか思い浮かばない。

巨体、鋭利な爪、人の瞳とは違う縦長の眼球、どんなに考え直しても当てはま

るものが一つしかない。もう、正常な考えは思い浮かばない。

『そうか…ゲームなのか…ゲーム画面か…ならポーズをかければいいんだ。』

そう思い立った瞬間、そいつは襲い掛かってきた。さすがに、次襲われたら死

ぬ！そう感じ取り、

『ええい！もうどうにでもなれ！』

そう思い、心の奥底に隠れていた勇気を叩き起こして、こう叫んだ。

「ポーズ！！」

その途端、さっきまで襲いかかろうとしてたそいつは、ピタリと動きを止めた。

生物的にはなく、ビデオを一時停止したように…

『まさかな…冗談のつもりだったのに…しかし、今なら逃げ出せる。』

と思ったが、足が動かない。足どころか手や首も動かない。

『そうか…そっぴゃポーズかけたら誰も動けないよな…』

ポーズをかけたおかげで少し冷静になった。しかし…どうするか…また振り

出しに戻ったわけだ。一旦ポーズをといて…いや駄目だ。もう襲いかかろうと

しているそいつの一撃がかわせる自信が無い。というより、さっきの一撃で左

腕にできた小さな引つ掻き傷が、精神的に堪えていた。

『どうする…助けを呼ぶか？』

ポーズをとくために、口だけは動く。というか動かなきゃ一生このままだ。し

かし、普通の人間がこの状況を見て、すぐに俺を助けようと思うだろうか…否、

恐怖でどうしようもできなくなる。俺もそうだったように。

『くそっ、どうする…どうする！どうする！！』

もう、一か八かポーズをとこうとしたその時、

「何やってんの？兄貴。」

これほどまでに弟の声が、嬉しく感じたことはないだろう。

「お、おお！拓也^{たくや}か！拓也なのか！よかった…」

あまりにホッとしたので泣きそうになった。だがそんな暇もない。

「拓也！俺の体引つ張ってそんまま家に帰れ！」

「は？え？何言ってるの？」

まあ、そんな反応が普通だろう。

「いいから！早く！」

必死の思いが伝わったのか、

「しゃーねーなー。兄貴のおふざけもここまで行くと真剣みがあるよ。」

いや、伝わってない。

そういつて後ろからホールドアップするように掴み、そのまま引きずって移動

しだしてくれた。いつも俺の冗談に付き合ってくれるようないい弟だったが、

このときはすぐにでも抱きつきたいぐらい弟が偉大で優しく見えた。一応言っておくが俺はホモじゃない。だが、そうしたくなる気持ち

は分かって

ほしい。ほんとに怖かったんだ…

『しかしよくこいつに驚かなかったな…』

そう思いながら少し小さくなったトカゲ男のシルエットを見つめていた。がし

ばらくするとその姿も見えなくなった。

『もう大丈夫そうだな…』

そう思い、小さな声で

「ポーズ…」

と呟いた。その途端に、体の自由が利くようになった。が、体が後ろに傾いていていたので、そのまま弟のほうに倒れこんでしまいそうになった。

「拓也……！助かった……！」結局泣いた。

「うわぁ！何だよ兄貴！」

「本当にお前が来てくれなかったらどうなってたことか……」

「え？何？金縛りにでもあつてたの？」

と拓也は笑いながら言う。

「しかし、お前意外と勇氣あつたんだな。」

と聞いてみた。

「もう、ホントだよ。あんなところでへんなギャグしてる兄貴引つ張って帰るな

んで、ほんとに勇氣がいるよ。」

「いやいやいや。まあ、それも勇氣がいるが、そういうことじゃなくてあのト

カゲ男のことだよ。」

「え？何？トカゲ男？」

「いや、さっき俺の目の前にいただろ？」

すると、弟は少し考え、閃いた顔をして

「あ！演劇の練習？だったらすごいよ！パントマイマーみたいだったよ！」

「いや、そういう意味じゃなくて……」

そこで気付く。もしかすると……

「拓也。本当に何もいなかったか？」

俺が、真面目に聞いているのに気が付いたのか、弟も冗談を言う顔ではなく、

真面目な顔で

「うん。何も居なかったよ。」

そう言った。間違はなくあれは俺にしか見えていなかったのだ。

『もしかすると…あれは自分の恐怖が生んだ、幻覚なのか？それとも…』

そんなことを考えながら歩いていると意外と早く家に帰り着いた。

「ただいまー。」

「誰も居ないよ。ほら、お前の分の弁当。」

といって弁当を渡す。

「兄貴、大丈夫？顔、青ざめてるよ。」

「ああ、大丈夫だよ…疲れただけ…」

そう言つて、足早に自分の部屋に戻る。部屋に戻つて、俺は真っ先にアイカムを取った。

「「ザック」おかえ…」

言葉を遮るように

「お前、俺が出るときなんていつてた？」

と聞く。もう一度、確認するためだ。あれが本物かどうか…そして、こいつが

そのことに関して知っていたのかどうか…それを確認するため…

「「ザック」死ぬなよつて…言っただけ…」

「そうか…」

間違いない…と言うことは…幻じゃなかった。

「ザック、セーブの仕方を教えくれ。」

「「ザック」メニュー画面に…」

メニュー画面を開き、すぐにセーブ。そして最後に

「さよならだ…ザック」

そう言った。

「「ザック」え？ちょっと待つて。それどういふ…」

ザックが言い切る前に、俺は電源ボタンを押した。そして心にこう誓った。

『もう…このゲームは…やらない…明日…電話して…送り返そう…』

電話しても、恐らくこちらがおかしいと思うだろう。むしろ、そう
いってほし
い。

「あなたが異常なのだ」

と。まだ信じられないし、信じたくもない。そういえば、このゲー
ム機が届い

て、初めてザックが話しかけてきた時もそんなことを考えていたな
…やっぱり

…夢なんかじゃ…もう、それ以上は考えなかった。腕の傷はそれほ
ど痛まなか

ったし、俺はそのまま布団に潜りこみ、泥のように眠った。そして、
最後に

『これは夢。明日、起きれば何も無い、いつもどりの日々が来る。

』

そう心の中で呟いて、眠りについた。明日になれば…

翌日、重い瞼を開いた。きちんと寝たはずなのに、体がだる
い。

無理もないか。精神的に疲れてたからな。結局、朝になったという
のにそこに

ゲーム機はあるし、俺も普段着のまま眠っていた。人生、そう都合
よく行くも

のでは無い。いまは午前7時…もう少し寝てよう…と、思ったが

「和輝、朝ごはんできたわよ。」

と母の声。

仕方が無い。起きよう。階段を下りてリビングへ、そこで母が、

「おはよう！昨日はごめんね。」

「うん…おはよう…」

えらく元気だな…母さん…そういや、旧友と食事行ってたんだっとな。

「どうしたの？元気ないわね。あ、もしかして昨日、遅くまでゲームしてたで

しょ！もうそろそろ勉強しなさいよ。」

残念ながらその逆。昨日はすぐ寝たし、ゲームは…もう思い出したくない。

「ほら！早く食べちゃいなさい。」

と俺を急かす。

リビングに入ると、

「おはよう。」

と、父さんの声。

「おはよう、兄貴。」

続いて拓也の声。

「おはよう。」

父さんはもう食べ終わり、新聞を広げていた。

拓也はまだ食事の途中。

俺も自分の指定席に座り、朝食を食べ始めた。

「和輝。どうしたんだ、その腕の傷。」

と、父さんが俺の腕をまじまじと見ながら見ながら言う。

「ああ、これ？ちよつとこけただけだよ。」

父さんを心配させたくなかったし、引っ搔かれたはずなのにその傷跡は、ほ

んとにこけて擦り剥いたような小ささになっていた。

「そうか…気をつけろよ。もういい年なんだし…」

「分かってるよ。」

その答えを聞くと、父は新聞紙をたたみ、出かける準備を始めた。
「行ってくるよ。」

「気をつけて行って下さいね。」

父さんを母さんが見送る間に

「ごちそうさま！」

と弟が食べ終わって自分の部屋に駆けていった。

1人になったのでニュースでも見ながらご飯を食べていたが、あるニュースを見

た途端、俺の動きが止まった。

「では、通津いてのニュースです。今朝、午前5時ごろ、H県、S市で会社員の、

出雲 修二さん、36歳が遺体となって発見されました。発見した男性は「惨殺

された人がいる」と言っていました。しかし、検察の結果では「刃物などに

よる鋭い切り傷ではなく、なにか強い力で引き裂かれたような痕がある」と、

猛獣などによる攻撃の可能性があるとの見解を強めていました。近隣住民の皆

さんは、不安が隠せない様子でした。それでは、次の…」

力で人間の体を引き裂くなんてことは、熊とかそんなんでも出来る筈が無い。

しかし、俺には一つだけ心当たりがある。そんなことをできる力を持った生物

を…奴が…トカゲ男が殺した…信じたくないが、同じ市内である以上、あり

得る。顔が青ざめたのが自分でも分かる。

「自分の…せいだ…俺があいつから…「逃げた」から…」

もう、取り返しがつかない。この出雲さんには悪いが、もう二度と起動しない。

死にたくない、死にたくないんだよ！俺だって！敵討ちできるような相手じゃ

ない。もう、忘れよう。学校から帰ったら…すぐにでも連絡して送り返そう。

『もうこれは《ゲーム》じゃない…そんなモンじゃない。』

「行ってくる…」

「気をつけてね」

と母さんの一言が聞こえる。

でも、俺にはもう、振り返る気力も残ってなかった。ただ…静かに学校に向か

った…でも…これで終わりじゃなかった。いや…むしろ《今始まった》のかも

しれなかった。

ロード&ナイト 第五章

（ロード&ナイト）

第5章 セーブした場所から再開しますか？

いつもの通学路、いつもの光景、全てがいつもと同じ…そう思っていた。

「ガサガサッ！！」

後ろの茂みが音を立てる。そこから現れたのは…猫。何処にでもいるような、

ただの野良猫。

『何をビクビクしてるんだ…もう終わったのに…』

そう思いながらも、心のどこかでは落ち着けない自分もいた。

「こらあ！きちつと挨拶せんかあ！」

といつも通りうちの担任は校門に立って厳しい指導をしている。

ここも何一つ変わらない。何一つ…

「よお和輝！おはよー！」

しかし、俺は声をかけられたのにも気付かなかった。恥ずかしい話、本気で

考え込んでいた。

教室はいたって普通、いつものようにクラスメイトがワイワイ騒いでいる。

何も変わらない…しかし、何故こんなことになったのか…全く見当がつか

ない。そもそも何故、トカゲ男が現れたのか。そして何故、自分しか見え

ていないものが他の人を襲ったのか。そんなことを考え込んでいたら、

「…澤…藍澤…藍澤！」

そこでハツと気づき、前を見ると、いつものように担任が暑苦しい顔で出迎

えてくれたが、その顔は怒ってはいなかった。

「藍澤、お前具合が悪いのか？ 顔色が悪いぞ。」

かなり心配しているようだ。

「あ、いえ、大丈夫です。ただ考え事してただけなんで…」

なんだかんだいって、担任は俺のことを心配してくれてるのは分かった。

だからこそ心配させたくなかった。

「そうか…でも、気分が悪いと思ったらすぐに言っただぞ。」

「はい。」

すぐに授業は再開したが、背中をつつかれていることに気付いて振り返った。

すると、後ろの席の真志が心配そうに聞いてきた。

「和輝、お前ホントに大丈夫なのか？ 朝からそんな調子だろ？」

「そんなことないって。ちょっと考え事してただけだよ。」

「いいや、おかしいね。朝、俺がお前に声かけたの気づいてないだろ。」

「へ？ まじで？」

「やっぱりな。何の悩みだよ。」

「実は…彼女でも作ろうかと…」

「彼女おお！？ お前…そんなことで…」

そう言い、がつくりと俯く真志。悪いな真志、お前にも話せないんだ…

「内緒にしといてくれ。」

「じゃあねえなあ。そんなわり、俺にも紹介しろよ。」

「紹介料貰っけどな。」

「この野郎！ 友達なんかじゃねえ！」

そんな冗談を話し、いつも通りの他愛ない会話に戻した。放課後、さっさと荷物をまとめていると、真志が

「おい和輝、担任が呼んでるぞ。」

と、声をかけてきた。

「マジか、めんどいな。」

恐らく、見当はつく。職員室に行く

「藍澤、お前、誰かに脅されてるのか？」

「え？ いや… 全く…」

「本当か？」

「はい…」

「そうか… 悪いなわざわざ来てもらって。気をつけて帰れよ。」

まさか、そう解釈するとは思わなかった。しかし、いまさらながら本当に自

分のことを、というか生徒のことを大事に思っているのがよく分かった。

『よし、さつさと帰って悩みの種を返そう…』

そう思つてカバンを手に取ろうとしたら、一番、見たくないモノが目

の前で《エンカウント》した。目の前の空間が歪み、暗い、深い穴が急に

開いたか

と思うと、何か緑のものを吐き出してすぐに閉じた。そこにいたものは…

スライム。普通なら安心するんだろうな… だが、俺にはそんな余裕は無かつ

た。カバンを急いで引つ張り上げ、一目散に走つて帰った。

想像していた中で一番最悪のパターン。

『電源を切ってきたのにアレが出たということは… もう…』

必死に走つて帰った。何も考えずに。いや、何も考えないために… 気がつけば自分の家。すぐに受話器を取り、電話をかけた。このゲ

ームの送

り主、パワー＆ブレインに。

「お電話ありがとうございます。こちら株式会社パワー＆ブレイン

お客様相

談窓口です。本日はどういったご用件でしょうか。」

「えっと「ロード&ナイト」というゲームが届いたんですけど、それを返品

したいと思って…」

「お名前をよろしいですか？」

「藍澤和輝です。」

「少々お待ちください。」

そういつてキーボードを叩く音が少しの間、聞こえ

「申し訳ありませんが、そのような商品は取り扱っておりません。」

「いや、あの、ネット販売だけの商品なんでもしかすると…」

「もう一度、商品のお名前をいいですか？」

「ロード&ナイトです。」

そんなはずはない。確かに昨日、俺の家に届いたのだから…

「申し訳ありませんが、やはり当社ではそのような商品は…」

「そうですか…ありがとうございます…」

そういつて電話を切った。ありえない…ありえない！！そんなことは無い

ずなのに！！急いで階段を駆け上がり、自分の部屋に置いてあるダンボール

の送り先の名前を見る。しかし、そこには送り先の名前が書かれていなかった

た。元々書かれていなかったかのように、消した跡すらない空白があった。

もう、逃げる術は無かった。いや、元々無かったのかもしれない。ここに、このゲームが届いた時点で…

『もう、おしまいかな…どうしようも出来ない…』

ゲームの中の存在のはずの魔物が目の前に現れ、確かに一度、俺も襲われた。

そして、1人死んでいる。ニュースにもなっているから確かだ。そ

して、ゲー

ムが起動していなくても魔物がエンカウントした。ということは、何時、何

処で襲われてもおかしくはないということ。絶望しかない。

しかし、そこであることを思い出す。説明書に書かれていた一文。そして、

ザックの一言。

「アイカムを外すな。」

そこで、気づく。アイカムをとったからこうなったのかもしれない。なら、

もし、アイカムを外さなければ何かしろの対抗手段があるということとなのか

もしれない。そこでもう一つ思い出す。

「死ぬなよ。」

あいつは確かにそう言った。ということは…

「まだ、ゲームオーバーじゃなかったな。」

そう呟いた。ひとつだけ活路があった。

「ゲームクリアまでは絶対に外すな。」という説明文。なら、ゲームをクリアしちまえばいい。簡単なことだ。ゲームをクリアすれば終わ

るのが分かってる。そして箱に入った説明書に目がいく。

『もう、面倒だっていつてらんないな…』

説明書を手に取り、最初のページからきちんと目を通していく。もしかする

と、何かもつと具体的な対抗策が書かれているかもしれない。それに、今は

文字通り、命懸けだ。救いの手は見逃さない。

『絶対に生き残って、クリアする！』

そう心に誓って、説明書を読み進めた。

もう、何時間がたっただろうか…いつの間にかすっかり日が落ちて、

下から

は母さんが料理をしているのか、いろんな音とにおいがしていた。

「和輝ー、ご飯できたわよー。」

と母さんの声。時計を見ると、もう9時を回っていた。

『説明書も読み終わったし、先に飯食うか…』

どうやら自分待ちだったようで、みんなもう座って待っていた。

「いただきます。」

「どうぞ召し上がれ。」

夕飯を食べながら考えていた。もし、あのゲームを捨ててしまったら、壊れ

てしまったらどうなるのか…それで全てが終わればいいが、下手すると一生

あの魔物たちを相手しながら生きていかなければいけない。あま

りにもリ
スクが高いからやる気は無いが、もしかすると、そうなった場合、
いつの間

にか直つてたり、部屋においてあったりしそうだ。実際、ゲームで
はないが、

送り先の名前が消えてたからな…

「和輝、お前何か悩んでるのか？」

父さんの鋭い勘がはたらく。

「いや、何も。ただ考え事してただけだから。」

「あら、珍しいわね。和輝が考え事なんて。」

「ひどいな母さん。こう見えても色々考えてるんだから。」

二人にも言えない。心配させたくない。しかし、いつかは言わない
といけな

い時が来るだろう。

「ごちそうさま。」

そういつて一足先に食卓を離れた。そして、これからが勝負だ。
部屋に戻り、アイカムを装着してもう一度、電源ボタンを押した。

すると

「電源が切られました。以前のセーブポイントから始めますか？」

そう表示された。

「もちろんだ。」

そういつて頭でOKと描いたら、そのままゲームが始まった。

真っ先に目に飛び込んできたのは、寝袋で寝ているザックの姿。

『ね、寝袋？』

「おい、ザック起きろよ。」

そう言くと、ザックが寝ぼけ眼で起きてきた。

「ザック」ふぁー。おはよう。」

初めて見た。ゲームキャラが素で寝ぼけているところ。意外とかわいい。

「ザック、悪かった。一方的に終わらせて。」

一応、謝らないと、と思ったが

「ザック」うーん、とりあえず気にしてないからいいよ。」

案外、さっぱりしている。もうちょっと根に持つタイプだと思ってただけ

どな。とりあえず…

「ザック、聞いておきたいことがある。」

「ザック」何？」

「アイカムをつけてたら、俺は死なないで済むのか？」

実は、そのことに関しては一切、説明書には書かれていなかった。

「ザック」もちろん！俺が保障するよ。」

よし、そうと分かればもう、周りの目は気にしない。

「ザック、絶対に魔王を倒してゲームクリアするぞ。」

「ザック」もちろんだ！そのために旅をしてるんだから。」

こいつはいいやつだ。どんなにひどい扱いを受けても俺のことを信
頼してく

れてる。ただ気づいてないだけかもしれないけど…

「それじゃ、改めて。ゲーム…」

「「ザック」スタートだ。」

ロード&ナイト 第六章

（ロード&ナイト）

第6章 再会

とは言ったものの…さすがに今日一日だけで色々ありすぎて、ゲームの内容

なんか覚えていない。確か、どっかの王国に着いて…やっぱり忘れてる。

「なあ、ザック。」

「「ザック」何？」

「俺らって今から何処に行けばいいんだ？」

凄まじく呆れた顔をしている。仕方ないだろ…こっちだって色々必死だった

んだから…

「「ザック」え？なに？また忘れたの？」

「色々あつたんだよ！。」

「「ザック」しょうがねえなあ。説明するからちゃんと聞けよ。」

なんか…上から目線なのが腹立つ…

「「ザック」今居るのがクフォカ王国、そして今は「シン・ハウユ大陸」に行き

たい。しかし、黒豹盗賊団がたつた一隻の定期船を奪ってるから大陸に渡る

術が無い状態。その為、今自分たちが国王の命を受けて盗賊団のアジトを叩

きに行く。という状態。分かった？」

そういえばそうだった。そして俺がこいつに小一時間説教をしたのも今回の

事が原因である。しかし…

「なあ、ザック。その黒豹盗賊団のアジト、知ってるのか？」

「「ザック」知ってるわけ無いだろ。俺だって、初めてこの町に来たんだから

さ。」

まあ…そうだろうな…主人公がアジト知ってたらどんなゲームだよって突っ

込まないといけなくなる。大体こういうものは、この町に住んでる人に聞いて

て回るのが定石だ。

「仕方ない。ザック、町の人に聞いて回るぞ。」

「「ザック」は？いいよそんな面倒いこと。」

どこの世界に聞き込みが面倒いなんて言う主人公がいるよ！ってここに居る

けど…いやいやそういうことじゃなくて…

「ザック。お前、敵の居場所も分からないのにどうやってのりこむつもりだよ。」

「

「「ザック」そのへんの洞窟探してりゃ見つかるでしょ。」

絶対に主人公が口にしちゃいけない言葉じゃねえか…

「おい！お前人にオーブニング飛ばすなどか言っというてそれはないだろ！」

「「ザック」それはそれ。これはこれ。大体、そんな都合よく情報持ってる人

間なんて居ないでしょ。」

「そういう問題じゃねえよ。いいから聞いて回るぞ。」

「「ザック」それならお前1人で行けよ。」

何の関わりも無い盗賊退治に名乗りを上げたり、闇雲にアジトを探そうって

言ったり、こいつは本当に主人公なのか？もう、時々分からなくなる。

とりあえず、やつのことでザックが重い腰を上げてくれた。今から町の人

に聞いて回るんだが…

「ザック」すみません。知ってますか？」

「住人」えっ！いったい何を…」

「ザック」あ、そうですか。ありがとうございます…」

「ちよつと待て。」

「ザック」ん？なに？」

「ん？なに？じゃねえよ！！てめえ全つつ然人の話聞いてないだろ！！あの

な！聞き込みつてのは…」

あまりにも酷すぎる。聞き込みのきの字も無いようなことをしでかしてくれ

たせいで、また小一時間、説教してしまった。

「いいか？次やったら許さねえからな？」

「ザック」はい…すみませんでした…」

ようやく本格的に聞き込み出した。

「ザック」すみません。盗賊のアジトの場所を知りませんか？」

珍しく敬語で喋っている。相当説教が堪えたか…しかし、

「住人」いや、知らないねえ。」

「剣士」悪いが、私が知りたいぐらいだ。」

「兵士」そんなもの知ってたらとくに攻め込んでいますよ。」

「住人」残念ながら力にはなれないよ。」

……………

「ザック」ねえ。見当たらないんだけど…」

「いや…あの…すまない…」

やばい…まさか見つからないとは…

「ザック」どうする？結局情報が無いよ？」

「いや、あるはずだ…後、見てない場所は…」

「ザック」もう、王様に言っただけだ…」

「それだ！」

「「ザック」え？」

すっかり忘れてた。そういえば、国王にはまだ会っていなかった。国王なら

ここら一帯の情報を持っているだろう。そうと決まったら早速謁見しに行こう。

「よし、王宮に行くぞ。」

「「ザック」いやいやいや。いまさら無理でしたゝなんて言ったら殺されるぞ

…俺たち…」

「？もしかして勘違いしてないか？俺らは今から謁見しに行くんだよ。」

「「ザック」謁見？」

「王様に会いに行くことだよ。それで直接居場所を聞いたほうが早い。」

「「ザック」なるほど！ってなんでもっと早く気づかなかったんだよ！おかけ

で歩き回って疲れただけじゃないか！」

やっぱり…疲れるのか…悪いことをしたな…というか無駄にゲーム内の人間

がリアルだ。

「悪い悪い。さあ、早く行こう。」

「「ザック」人事だと思って…」

ブツブツ言いながら王宮にたどり着く。が、

「「ザック」国王に会わせてもらいたいんだけど…」

ここでまたザックの悪い癖だ。

「「兵士」申し訳ないが、今は国王に謁見することは出来ない。帰っていただこう。」

やっぱり断られた。人と話す時は敬語を使わせるようにしないとな…

「ザック、敬語で理由を聞くんだ。」

「「ザック」あんたが聞いたほうが早い気がするけど…」

「お前が出来なきや意味がないだろ。」

「「ザック」仕方ないな。」

渋々と言うが、根は真面目なやつだ。

「「ザック」謁見できない理由でもあるんでしょうか。」

「「兵士」実はここだけの話。国王が病に伏せているのだ。しばらくした

ら治りそうだが、今すぐというわけにはいきそうにない。」

「「ザック」そうですか…ありがとうございました。」

まさかそんな理由だったとはな…しかもこれじゃ…

「「ザック」どうする？また振り出しだよ。」

「仕方ない。町の広場に戻ろう。時間もたったし、今なら詳しい人が居るか

もしれない。」

「「ザック」それしかないかな…」

「ザック、なんかやけに素直になっ たな…」

「「ザック」これでもちゃんと反省はしてるんだからな。」

意外といい奴だったりする。なんか憎めないキャラだな…

広場まで戻ってくると、広場の中央にまた人だかりが出来ていた。

『今度はなんだ？』そう思いながら近づいていくと…

「「住人」怖いわねえ。」

「「住人」ここらもそろそろ魔王軍の勢力が伸びてき始めたな…」

「「ザック」なんのはなし…じゃなかった。すみませんどうしたんですか？」

「「戦士」なんでも、このすぐ近くの平原で旅人が頻繁に魔物に襲われている

ようだ。そろそろ町の守備を強化しないと…」

「「勇者」中には、ロードのついた勇者もいるようだ。」

「「ザック」ロードのついた勇者？」

「「勇者」ちょうど、君みたいな勇者のことだね。確か、名前はクラウドだったかな？」

「そんなまさか！クラウドさんに限ってそんなことあるはずが無い！」

「「勇者」確か間違いないですよ。大体、ここに来た勇者は把握してたんで…」

「助ける方法はあるんですか？」

「「勇者」ないこともないよ。確か、蘇生呪文か聖者の聖杯があれば…」

「ありがとうございますっ！」

そういうなり、ザックを道具屋に向かわせた。1人プレイのため、蘇生アイ

テムは購入していなかったからだ。すぐに聖者の聖杯を購入し、町を出た。

「「ザック」おい！落ち着けて！闇雲に探し回っても見つからないぞ！」

「うるさい！そんなこと分かってる！」

俺が必死になつて理由はただ一つ。クラウドさんへの思い入れ？違う。た

だ助きたい？それも違う。ひとつだけ、ホントにひとつだけ気になること、

そして確かめたいことがあった。もし、自分の予想が当たってたら…

「「ザック」いた！あそこ！」

ザックが指差す方向を見ると、一人の勇者が倒れていた。その上にはプレイ

ヤーの表記は浮かんでいない。急いで駆け寄ると、そこに倒れていたのは間

違いなく、クラウドさんだった。急いで聖者の聖杯を取りでしてク

クラウドさ

んに使うと、あっという間に蘇生した。プレイヤー表記も戻っている。てこ

とはやはり…

「クラウド」ううゝん。あれ？ぼくは確か、魔物にやられて…」

「クラウドさん。いや、出雲さん。出雲修二さんですね？」

「プレイヤー」あれ？どうしてわたしの名前を？」

「やっぱり！ニュースであなたの名前を知りました。」

「ザック」え？え？どういうこと？」

「おおまかに話すとクラウドさんのロード、出雲さんは現実の世界で魔物に

襲われて死んだんだ。」

「「出雲」そうだったのか…ありがとう。助かったよ。」

「ザック」そんなことが…でも、何で生き返れたんだ？普通に考えて無理な

んだけどな…」

言われてみれば確かにおかしい。何故、死んだはずの《人間が》生き返った

んだ？

「「出雲」とにかく助けてもらったんだし、お礼がしたいよ。」

「あれ？そういえば今、出雲さんは何処にいるんですか？」

「「出雲」自宅だよ。」

あれ？確か、外で死んでたんじゃ…

「「ザック」今、盗賊団のアジトを目指してるんだけど…」

「「クラウド」そうか、ならそれを手伝おう。」

「「出雲」そうだね。それがよさそうだ。」

なんか話がまとまってきてるな…しょうがない。今は考えても仕方がない。

そうして、賑やかな盗賊退治が始まった。

ロード&ナイト 第七章

くロード&ナイトく

第七章 魔物の群れが現れた！

クラウドさんが、一時的にパーティーに入ってくれるのは嬉しいが……急いで

出てきたので、結局、アジトがある場所は分かっていない。

「すみません。一度、町に帰ってもいいですか？」

「クラウド」何か用事でもあるんですか？」

出雲さんのキャラ、どっかのバカと違って、とても丁寧な言葉遣いだ……

「ザック」エックシユン！……風邪引いたかな……

「それが実は、お恥ずかしいことにアジトの場所が分からないので……」

「クラウド」それなら……」

「出雲」私達は知ってますよ。」

「ザック」マジで！やったね！」

「どうして場所が分かるんですか？」

「クラウド」実は、僕たちは黒豹盗賊団を退治しに向かう途中だったんです

が、そこでやられてしまったんで……」

なるほど……ということは、俺たちが来る前までは情報提供者がいたのか……

「出雲」場所はここからさらに北東、そこにあるって聞きましたよ。」

「それじゃ、道案内お願いします。」

そこで進みだそうとした時、

「ザック」そっいや、一つ気になることがあるんだけど……」

「何？」

「「ザック」なんであんたは初対面のはずのクラウドのロードの名前が分かってたの？」

「「出雲」ああ、それは私も気になってたことだ。」

「実は…これといって確証はなかったんだ…」

「「ザック」ならなんで？なおさら理由がわかんないんだけど…」

「ただ…たださ…」

理由…それは、俺にとって知りたくない事実…でも、逃げないと決めたから

には、必ずクリアすると決めたからには…

「俺は…現実の世界でアイカムを外して外に出たとき、アレに…トカゲ男に

出会ったんだ…もちろん、敵うはずのない敵だったからすぐ逃げたけど、そ

の後、ニュースで出雲さんの死を知って…俺があの時、逃げ出さずに立ち向

かっていれば、出雲さんという関係のない人を巻き込まずに済んだんじゃない

いかって思ったから…だからクラウドさんが出雲さんであって欲しい。そう

思っただけだったんだ…すみません…出雲さん…」

「「ザック」そうだったんだ…ゴメン！変なこと聞いて。」

「いや、むしろありがとう。覚悟が出来ずにいたんだから、今度こそしっか

り覚悟が出来るよ。」

「「出雲」つまり…君が逃がしたトカゲ男が私を襲ったかもしれないというこ

とかな？」

「確証はないですけどね…」

「「出雲」まあ、よかったじゃないですか。つまり、君のおかげで今、こうし

て生きていられてるんですから。」

「ありがとうございます。」

「「出雲」お礼を言わなきゃいけないのはむしろこっちのほうがですよ。ありがとう。」

とう。」

「それじゃあ、早速アジトに向かいましょう。」

「「ザック」なんでそうなるんだよ!」

「長話し過ぎたからだよ。」

「「出雲」確かにそうだね。よし!早く盗賊を退治してしまおう。」

「「ザック」なんか…引つかかるな!」

そのまま、アジトがあるという場所までまっすぐ歩き出した。歩きながら出

雲さんが

「「出雲」そういえば、魔法は使えるかい?」

と聞いてきた。

「自分たちはまだ覚えてないですね。多分、レベル的にももうすぐ覚えると

は思っんですけどね。」

「「出雲」そうか…ということは、君たちはソルジャータイプのナイトのような

だね。」

「「ザック」ソルジャータイプ?何それ。」

「「出雲」ソルジャータイプのナイトは、先に技をたくさん覚えるんだ。ちな

みに、私達はマジシャンタイプのナイトなんだ。」

なるほど…だから技ばっかり覚えてたのか…てっきりこいつが筋肉バカなの
かと思ってた。

「「出雲」魔法をまだ覚えてないなら、先にレベルを上げたほうがいいかもしれないね。」

「そういえば、なんで魔法を覚えてたほうがいいんですか？」

「「出雲」実は、その盗賊団がアジトにしている場所は洞窟だね。その洞窟に

は、物理攻撃が効きにくい魔物が出るんだ。」

「そんな魔物が…だから覚えてたほうがいいんですね。」

「「ザック」着いちちゃったよ？」

気が付けば目の前には、大きな絶壁。そしてその根元に大きく口を開けたよ

うなおどろおどろしい雰囲気、洞窟がぼっかりと開いていた。しかし…なん

だ？この感覚…なんか嫌な予感がする…

「「出雲」着いてしまったのか…しょうがない、チームワークで切り抜けましょう。」

「そうですね…できるだけサポートします。」

「「ザック」ちゃっちゃか行こうぜ！なあ、クラウド。」

「お前、そろそろいい加減にしろよ！敬語使え！敬語！」

「「出雲」お気になさらずに和輝君も敬語じゃなくていいですよ。話にくい

でしょうし。」

あ、名前表示されてるんだ…そういえばなんで出雲さんの表記はプレイヤー

じゃないんだ？まあ、気にすることでもないけど…

「それじゃ、お言葉に甘えて…魔法を覚えるまでは、雑魚担当いきま…いくよ。」

「「出雲」別に無理はしなくていいからね。」

「どうせなら出雲さんもそんな風に喋らないほうがいい気が…」

「「出雲」私の場合は癖でしてね。この喋り方が慣れてるんですよ。」

「「クラウド」いつまで話してるんですか？」

あ、クラウドさんのこと、すっかり忘れてた。

「よし！さつさと終わらせよう！」

「「ザック・クラウド」おう！」

洞窟とはいったが、かなり明るい。あちらこちらに盗賊が置いたと思われる

松明がきちんと照明の役割を果たしていた。しばらく進むと、いつものよう

に次元が裂け、魔物が飛び出してきた。が、さすがにレベルが上がってきた

からか、パーティーを組んだからか、その裂け目から出てきたのは一体では

なく、群れで出てきた。そういえば、再開して初めてのバトルだ。

「「ザック」あの真ん中にいる奴、見たことない！多分あれが…」

「物理攻撃が効かない奴か…そいつはクラウドにまかせるぞ！」

「「クラウド」了解！いきましようロード！」

「「出雲」もちろん！周りはまかせましたよ！」

仲間がいる安心感。まさかこれほどのものとは…ふっふっふ…腕が鳴るぜ！

「ザック！いつけえ！回転斬りい！！」

「「ザック」うおおお！！」

そいうとザックは敵のど真ん中に突っ込み、剣を思いっきりブン回した。

それなりにレベルを上げながら進んでいたのもあって、周りにいた半魚人の

ような奴らをいっぺんに吹き飛ばした。

「「出雲」今です。クラウド！」

「クラウド」はああ…瞬け雷光！《サンダー》！！」

するとクラウドの手が一瞬、凄まじい光を放ち、真ん中に残っていた貝のよ

うな敵をその光が貫いた。まだ、耐えてはいるものの、もう虫の息なのが目

に見えていた。

【シエルの攻撃！】

「ザック！ここは…」

「ザック」分かってる！」

そういうとクラウドの前に立ち、剣を構えた。その直後シエルが突っ込んで

きた。よし！予想通り！

「ザック」カウンター！」

シエルの特攻を剣の腹で受け止め、そのまま跳ね返しながら切りかかった。

が、予想以上に硬かったようであまりダメージを受けなかった。

「ザック」くそ！めちゃくちゃ硬え！」

「クラウド」僕にまかせて！」

すると、また手を前にかざし

「クラウド」くらえ！《サンダー》！！」

するとその光はまっすぐ飛んで行き、シエルを再び貫いた。今度こそ倒した

ようで、その魔物たちは煙のように消え去った。

「よし倒した！幸先いいぞ！」

「「出雲」タイミングもばっちり！いいコンビになれそうだね。」
確かに！これはかなり心強い仲間が出来た。

「ザック」よし！この調子でガンガン進もう！」

そういつてさらに洞窟の奥、黒豹盗賊団のアジトを目指して進みだした。

ロード&ナイト 第八章

（ロード&ナイト）

第8章 キャプテンミランダ！

洞窟というだけあって、奥に進むにつれてかなり複雑になっている。そして

どこからか水の音が聞こえる。

「出雲さん、この洞窟って海に繋がってるんですか？」

「「出雲」よく分からないけど、そうかもしれないね。」

水が滴り落ちる音ではなく、何回も押し寄せては引く、そんな感じの音だ。

あ、だから半魚人とか貝の魔物とかだったのかな？そうすると納得できる。

その後も、魔物の群れを蹴散らしながらしばらく進んでいくと、他の場所よ

りも確実に明るい空間に出た。

「ここが…もしかすると…」

「「出雲」うん、恐らくアジトだね。一旦、隠れて体勢を…」

「「ザック」勇者ザック参上！さあ盗んだ船を返してもらおうか！」

バカが真っ先に、考えもなしに敵陣に突っ込んでくれた。こんのバカ！何考

えてんだ！少なくとも戦いながら来たんだから、体勢を立て直す時間が必要

だというのに！

「バカザック！剣構えろ！連続突き！」

「「バカザック」OK！って名前が！バカは余計だよ！連続突き！」

その掛け声とともに、目の前にいた盗賊たちを一斉に突いた。

「「盗賊」うわぁ！くそっ…何だこいつ…早くキャプテンに…」

そこまで言って盗賊は倒れた。とりあえずよかった…これ以上悪い事態が起きなくて…

「盗賊」！何者だお前ら！」

ああもう、分かりましたよ…俺がフラグ立てたんだろ…戦うよ…

結局、そんなことが続いて20人ほど倒したところでやっと人が来なくなった。

「ザック、二度と勝手に出て行くなよ。分かったな？」

「バカザック」なんだよ…上手くいったのに…」

「上手くいったじゃないだろ！このバカ！」

小一時間ほど言い合いが続いた。が

「クラウド」ああもう、落ち着いて二人とも…」

とクラウドさんにたしなめられた。

「とにかく、ポーションとエーテル飲んでHP、MPを全回復しとけ。」

「バカザック」了解。」

「クラウド」こっちも準備OKです。」

「出雲」よし、行こう。」

そう言って飛び出してみれば、

「「????」あんたらかい？私の子分を可愛がってくれたのは。」

ぐるっと見渡す限り盗賊、盗賊、盗賊……まあ…そりやそうなるよ

な…あん

な大声で話してりやな…

「「????」私の名はミランダ。キャプテンミランダだよ！覚えときな！」

「ザック」キャプテンミランダ！早く船を返せ！」

「ミランダ」いいわよ。ただし、^{サシ}一対一の勝負で勝つたらね。こっちは私が行く。あんたらもどっちかがリーダーなんだろ？だったらそいつと

私が戦うだけさ。そして勝ったほうの要求に絶対応えること。それ

がわたし

の…いや、戦うものとしての道理だ。さあ、さっさと一人出てきな
！」

「どうするか…」

二人、いや正確には四人で作戦会議をした。

その結果、出雲さんとクラウドさんが、ここは魔法が使えるよりも
物理攻撃

力が高いほうがいいだろうということでザックに任せた。俺はあん
まり気が

進まなかったけどな…でも、ミランダと名乗ったその盗賊は確かに、
身軽そ

うな装備、手にはダガーとまさに絵に描いたような盗賊だ。そうい
や…なん

でキャプテンなんだ？まあ…別に気にすることじゃないけど…

「ザック」俺が行く！…でいいんだよね？」

「ミランダ」はっ！威勢がいいね。そうでなくちゃな！かかって
きな！」

かなりの自信、秘策があるのかそろとも元々強いのか…しかし、こ
こは先手

必勝！

「三段斬り！」

中段を振りぬき、そのまま切り上げ、両手で剣を握り、振り下ろし
た。さす

がにかなり使い込んだ技の一つだからザックの動きもキレがある。

「ミランダ」やるねえ…じゃあこっちの番だよ！」

そう言うのと両手を胸の前でクロスさせ、

「ミランダ」燃え盛れ炎！《ファイヤー》！」

その途端、ミランダの前に火の玉が現れ、それをザックに向かって
打ち出し

てきた。命中！ザックじゃかなりのダメージをもらってしまってい

る。

今のは間違いなく魔法！まさか魔法で戦うのか！？やばい！それは全く予想

してなかった！…

「ザック」くそっ！魔法おもつきし使ってきてんじゃん！魔法が使えりやな

「…」

「使えないもんはしゃあない！ザック！連続突き！」

力では完全に押しているが、同じ量のダメージをもらってしまっている。や

はり魔法防御の無さが響いている。

「「ミランダ」押し流せ水流！《ウォーター》！」

「回転斬りい！」

そこまで大差が無かったものの、僅かずつ押されだした。

『くそっ！なんとかポーションで回復させているが、もう回復量の間合っ

ていない。どうすれば…』

「「出雲」ザック君を信じるんだ！そして、彼のことを心の底から助けたいと

願うんだ！」

「「クラウド」魔法は心の力。信じる力が魔法になるはず！」

そうか…そうだったな…

『ザック…お前ははつきり言っただけでムカつくやつだ…でも、優しいやつだっ

たのも分かってる。だから…こんなところで負けられないよな…』

「ザック！絶対に勝つぞ！」

その途端、ザックの体が仄かに光り…

「「ザック」なんだろ…この心の底から湧き上がる力は…」

まさか！…いや、でも間違いはない。ザックから光が溢れると同時に、
コマン

ドの項目に【魔法】が増えていた。

「来た！ザック！魔法だ！」

「「ザック」深緑の力よ、癒しの光よ…《ヒール》！」

その途端、ザックを美しい光が覆い、みるみるうちにザックの傷を癒していた。

った。

「回復魔法…すごいじゃないか！ザック！」

「「ザック」あんたのおかげだよ…ロード…」

と少し照れくさそうに言っている。

「「ミランダ」へえ…やるねえ！そうでなくっちゃ面白くないよ！氷塊の力！」

《アイス》！」

今度は拳大の氷塊を出現させ、それをザックめがけて放った。

「もう一つの魔法を使うぞ！」

まさか一気に二つも魔法を覚えるとは思わなかった。がここはあえてさすが

勇者だと言っておこう。ザック…すげえよお前…

「「ザック」分かった。光の力よ、全てを拒絶せよ…《リフレクト》！」

「「ミランダ」何をしたかは知らないけど、補助魔法ばかりじゃ勝てないよ！」

大地の破片！《ロック》！」

今度は拳大の石を数発こちらに飛ばしてきた。しかし、その石は全て光に遮

られ、ミランダにはじき返された。

「よし！これで魔法は怖くない！畳み込め！両手斬り！」

ザックは剣を両手で握り直し、おもいきりミランダに切りかかった。

長い攻防の末…

「「ザック」とどめだ！三段斬りい！」

全てミランダに命中、やつとの思いでミランダを倒すことができた。
「『ミランダ』あつはっは！負けた負けた！私もまだまだだね…」
なんか…軽いノリだが…勝った…勝った！

「『ザック』さあ…約束だ！船を返せ！」

「『ミランダ』怒鳴らなくても返すよ。盗賊は義理堅いんだ。受けた恩は必ず

返すし、一度した約束は必ず守る。いままでずっと守ってきた暗黙のルール

だ。」

へえ…やっぱそういうところはしっかりしてるのか…

「『ミランダ』付いてきな！船はあっちにとめてある。」

しばらくミランダの後について歩いていくと、広い空間に出た。目の前には

大きな船、そして船は洞窟の中だが、しっかりと海に浮いていた。

「やっぱりこの洞窟は海に繋がってたのか…」

「『ミランダ』そくだよ…いつかここからあの広い海に出るつもりだったんだ

けどねえ…」

と少し寂しげな表情を浮かべていた。

「『ザック』もしかして、ミランダが最初にキャプテンって名乗ったのは船に

乗りたかったから？」

「『ミランダ』ああ、そうさ。本当は世界中の海を又に駆けた船長になりたか

ったのさ…ほら！みんな！さっさと出航の準備だよ！」

「『ザック』なら王様に定期船の船長にして欲しいって言えば？」

「『ミランダ』え？な、ななにを言っただい！私は盗賊だよ！そんな簡単

に…」

「みんな早く船から離れろ！」

「ザック」どうしたんだよ！急にそんな……」

嫌な予感、この洞窟に入る時に感じたあの感覚がした。

「いいから早く離れろ！陸地に戻れ！」

「ミランダ」おまえら！聞いたろ！さっさと船から離れな！」

「子分」わ…分かりやした…」

そういつてみんなが船から下りたが、一向に変化が現れない。

「子分」何も起きやしねえじゃねえか…さっさと出航…」

そんなけたたましい呻き声とも叫び声とも取れない鳴き声を発しながら俺が

ずっと感じていた嫌な予感は目の前に現れた。

ロード&ナイト 第九章

くロード&ナイトく

第9章 クラーケンが現れた！

突如目の前に現れたソレは海から差し込んでいた月明かりを覆い隠すほどの

大きさだった。

「なんだあれは！」

「「子分」ク、ク、クラーケンだ！クラーケンが出たー！」

クラーケンと呼ばれたソレはイカともタコとも見て取れない奇怪な姿をして

いた。その巨体さのせいで大きく船が揺れている。まずい！このままじゃ船が！

「「クラウド」瞬け雷光！《サンダー》！」

クラーケンを雷が襲った。そのおかげで注意がこちらに向き、船が洞窟の壁

に叩きつけられる心配が無くなった。よかった…船が無くなったら大陸に移

れなくなるとこだった…が、こちらに対して触手で攻撃してきた。さすがに

サイズがサイズ。まともに食らえば致命傷は避けられない！

「「クラウド」なんとか倒すしかないですね…」

「「ザック」さっさと倒さないと船が危ねえ！」

「「ミランダ」私もいっしょに戦うよ。」

そういつてミランダが横に並んだ。

「いいのか？もうあんたには関係無いんだぞ？」

「「ミランダ」昨日の敵はなんとやらってね。それにまだ船は返し

には行つて

ないからね。言つただろ？盗賊は義理堅いんだ。」

そうとなると、とても心強い。三人いればなんとかなるかもしれない。

「ミランダ」おまえら！早く火薬を持つてきな！ありつただけだ！」

「子分」了解でさあ姉御！さあ急げ！全部持つてこい！」

みんなも協力してくれてる…やっぱ、悪い人達じゃないな…よし！こつちも

火薬が届くまで耐えないと！

「ザックは援護！ミランダさんとクラウドさんはなるだけそいつを暴れさせ

ないようにお願いします！」

初めてとは思えないほど息の合ったコンビネーション、幾度となく繰り返さ

れる触手の連続攻撃、ザックのいいタイミングでの回復、そして誰一人とし

てクラーケンという脅威を目の前にして怯まなかった。いや、恐怖以上の信

頼があつたのかもな…そして

「子分」姉御！準備OKです！」

そんな声が上から響いてきた。よく見ると上の突き出した岩場の上に大きな

樽が置いてあつた。

「ミランダ」よくやったねあんた達！クラウドだったっけ？あんた、ファイ

ヤーは使えるかい？」

「クラウド」はい！」

「ミランダ」よし！それじゃ3、2、1でファイヤーを唱えな！いいかい？

おまえたちも準備はいいかい？」

「「子分」いつでも大丈夫でさあ！姉御！」

しかし、クラーケンだって黙って待っていてくれるほど優しくは無い。ここは

ザックに任せよう。今、自由に動けるのはザックだけだ。それに…樽を上

用意した…さらに炎属性の魔法…もしかすると…あの樽を？…その後、すぐ

に掛け声が始まり、

「「ミランダ」3・2…1！今だよ！《ファイヤー》！」

「「クラウド」煌け火炎！《ファイヤー》！」

ザックを素早く引かせ、安全な位置まで行くとほぼ同時に、樽が押し出され、

丁度クラーケンの目の前に落ちていく。そこに丁度ファイヤーが飛んでいき、

見事命中！凄まじい轟音と爆風がクラーケンの目の前で巻き起こった。

「「クラーケン」ヴオォォォォォォ…」

そんな雄叫びとともに海中へ姿を消していった。

「「一同」やったあああ！！！」

「「ミランダ」よし！さっさと出航するよ！」

「「子分」アイアイサー！」

全員が船に乗り込み、ついに定期船は洞窟を出た。そこに広がるのは美しい

星空、静かな海、そして、賑やかな船の中だった。そのままクフオカ王国へ

戻り、港に停泊させた。そのまま船を取り戻したことを王様に報告しに行こ

うとした時、ミランダは船に残っていた。

「お前はそこでそうしてていいのか？」

「「ミランダ」いいよ。もう負けたんだ、せめて最後まで船に長

くいさせて

くれてもいいだろ……」

そう言つて遠くの海を眺めていた……とても……寂しげな表情で……

『彼女をこのままにする訳にはいかないな……』

そうは思つたが……彼女は盗賊の頭……やっぱり……無理なんだろうか……
そうこうしている間に、謁見の間に通され、王様をついに拝むことができた。

「『国王』勇者ザック、そして勇者クラウドよ。この度はそなたたちの働きに

よつてこの国の危機は免れた。そなたたちには大いに感謝している。

」

「『クラウド』もつたいなきお言葉。」

そこでもまだミランダの刑のことを考えていた。あいつは悪い奴ではない。

だからなんとかしようと色々考えた結果、あることを閃いた。そして国王に

ミランダを定期船の船長にしてくれないか提案した。もちろん国王は断つた。

そこまでは計算内さ……だが、こちらにも考えはある。

「しかし、今回の定期船奪還は彼女の協力があつたため実現しました。」

国王はそのことを聞くとかなり驚いた表情をしていた。よし！もう一押しだ！

「それに今、魔王軍の勢力が強力になってきています。今回もクーケンと

いう強力な魔物が出ました。そのためこのままなら定期船の運航に支障が出

る恐れがあります。それなりに戦える人が船長でないといつ沈むことか……」

そんなことを言いながら俺は心の中でほくそ笑んでいた。なぜなら

言い返す

ことができないはずだからだ。最近魔物が増えているのは事実、そして定期

船がミランダたちに奪われたことも事実、そして今回のクラーケン。これが

一番のこの申し出を断れない理由だ。証拠は無くても証言という事実がある。

案の定、国王は困った表情。最後に付け加えるか…

「彼女は…ミランダは本当は船長になりたかったんです。だから彼女を船長

にすればもう、悪さはしないと思いますよ。」

もう、ぐうの音も出なくなっていた。そんじゃ…ついでに…

その後、謁見の間から出てきた。そのまますぐに船に戻り

「おい！ミランダ！お前さんの刑が決まったぞ！」

「「ミランダ」なんだい？ま、別に何でもいいけど…」

「これから死ぬまで定期船の船長だ！長い刑期だな！」

と、あえて皮肉って言った。もちろん満面の笑みを浮かべていた。

そこでミ

ランダの船長就任の知らせを聞いていた子分たちが、自分たちで身を引こう

としていたが引き止めた。船は一人じゃ動かないからな…クルーが必要だ…

美しい月明かりをバックに、一際定期船が美しく見えた。その上にもっと美

しい仲間たちを乗せて…

その後、

「「クラウド」今回はお互いにご苦労様。またどこか出会えるといいね。」

その言葉を最後にクフォカ王国でクラウドさんたちと別れた。今度…は…もっ

と強くなつて出会いたいもんだ。

「「ザック」あー終わった！みんな嬉しそうだったな！それで…この後どうす

んだ？」

ふと時計を見ると、もうだいぶ夜も更けていた。明日も学校だしな…

「悪いな。一旦、セーブして寝るわ。続きはまた明日、学校から帰つてから

だ。」

「「ザック」そうか。分かった。今度は絶対にアイカムは外すなよ。」

「分かつてるよ。お休み。」

そう言つてセーブをし、電源を切った。もうアイカムは外さない。必ず生き

残つてみせる！つて…なんでアイカムつけてたら安全なんだろう…

ま、知り

たくもないが…そんなことを考えながら布団へ向かい、大きな欠伸をして眠

りについた。今度は…俺の大冒険が始まるなんてな…思いもしなかった。

ロード&ナイト 第十章

くロード&ナイトく

第10章 視線が集まる！

「和輝くご飯よ。」

そんな母の声で起こされた。しかし、昨日とは打って変わってとても寝覚め

のいい朝だ。さつさと一階に下りて、リビングに飛び込んだが…やはり…こ

のアイカムが気になるようだ…完全に一点を凝視している…

「和輝…それ…なに？」

まあ…当たり前前の質問だ。流行りのアクセサリとでも言っでごまかす手もあ

ったが、これは…流石に無理があるか…正直に言おう。もちろん、常人の考

えられる範囲で。

「あ、これ？携帯の会話をこれで出来るかテストしてるんだ。当分の間外せ

ないからそこんところしく。」

ほぼ同じ説明を父さんと卓也にも話した。まあ、卓也は薄々感ずいているよ

うだが…あえて触れないでいてくれた。

朝食をすぐ食べ終わり、学校に行く準備をするついでに、テレビの電源とゲ

ーム機の電源を念のためチェックした。よし！ちゃんと電源も落ちてる。そ

れを確認して学校へと向かった。昨日と何一つ変わらない通学路。変わった

のは自分の心持ちだけだ。昨日に比べて本当に気が楽だ。しかし…それを差

し引いても有り余るほどのものがある。それが何か？言わなくても分かる。

学校に近づくとびにどんどん強くなる視線、視線、視線…

さすがに…そこまで凝視されると…かなり堪える…校門にはいつも通り担任

が立っている。まあ、生徒指導だから…説明しようとしてたらやっぱりこっ

ちに気付いた。

「藍澤…何だそれ？」

「あ！これっすか？これはあれですよ！前、説明してた…」

気付け！担任！これはみんなの前で言えるような代物じゃない！後で説明す

るから！そんな念を送った。

「あ、ああ…そうだったな…あれか。気をつけるよ。」

と適当に話を合わせてくれたやっぱり俺のことをよく分かってくれてる。そ

の後、付け加えるように俺の背中に向かって

「あ、そうだ藍澤。後で渡さなきゃいかんものがあるから、後で職員室に来

てくれ。」

と言ってきた。まあ、要するに後で事情を聞くって事か…

教室に入っても依然続く痛いほどの視線。というかホントに痛い…

そんな目

で見るな！って言いたくなる…しょうがない…死にたくないし…力パンを机

の横に置き、そのまま職員室へ向かった。が、真志に止められる。

「おい和輝！お前それなんだよ！なにつけて来てんの！」

かなり取り乱している…とりあえず落ち着いてもら…

「和輝！あんた何考えてるの！ここ学校よ！その変なもん取りなさいよ！」

続けざまに理沙が突っ掛かってきた。あ、そういやまだ俺の友達を紹介してなかったな…

最初に俺に話しかけてきたやつが灰山真志。成績優秀、運動抜群、性格も優

しく、ルックスも最高という完璧超人だ。

「誰が完璧超人だ。言つとくがお前に勉強でしつかり勝ったことはないからな。」

人の紹介に対してつつこむなよ…本人曰く、俺が一度も勉強で本気を出した

ことがないのに、点数にさほど差がないのが理由らしい。

次に、自分に突っ掛かってきた方が秋山理沙。普段は明るく優しい、清楚な

女生徒だが、俺の前ん時だけ何故かいつもこんな感じ…なんでだよ…

「そりゃ幼馴染だからに決まってるでしょ！なんであんなにそんなよそよそ

しく接さなきゃいけないのよ！面倒くさいのよ！」

お前も説明につつこむなよ…まあ、そんな感じの奴らだ。あと一人いるが…

とりあえず、ここから逃げ出そう。そう思い、不意を突いてダッシュで教室

を出た。そのまま職員室に行くと

「おお！来たか藍澤。さっきは聞かなかったが、それは何だ？」

この人には…正直に話しておこう。全てを…

家にゲームが届いたこと、ゲームのキャラが喋ったこと、敵が現実でエンカ

ウトしたこと、そして…このアイカムと出雲さんの死亡事件の真

相：全て

話し終わると

「俄かには信じ難いが…ここで嘘を言う必要も無い…そうか…それで昨日は

沈んでいたのか。」

かなり真剣に悩み、そしてもう一つ質問してきた。

「藍澤。その事件というのは本当に昨日あったのか？」

何故それを聞いてきたのかは分からなかったが、一応説明し直した。
「昨日の朝のニュースで放送されていました。俺がそのトカゲ男から逃げた

のが一昨日の夜。両方ともよく覚えています。」

その言葉を聴いた途端、また考え込みだした。

「悪いが私は朝のニュースは毎日欠かさず見ている。しかし、昨日はそんな

ニュースは見えていない。」

ニュースを見ていない。というよりも、そんなことは知らない。といった顔

だ。そこで気付く。

『もしかすると…出雲さんを生き返らせたから？』

もしそうだとすると…みんなにも聞いてみるか…そう思い、担任に最後に一

礼して教室に戻った。真つ先に真志と理沙が俺の元にやってきたが、聞かれ

る前にこちらが質問した。

「お前ら、昨日の朝のニュース見たか？」

あまりにもいきなりの質問で少し戸惑っているが、二人揃って見たと答えた。

そこで昨日、出雲さんの事件を聞いて見たが、やはり二人とも知らなかった。

という事はつまり、昨日あった出雲さんの死亡した事実ごと無かつ

たことに

してしまったようだ。なんかもう…ゲームどこじゃないが、それ以外ありえ

ない。勝手に納得した俺に食って掛かろうとした二人だったが、それを遮る

ようにもう一人飛び込んできた。

「和輝！池沼から聞いたぞ！お前大変な目に遭ってんだってな。」

そいつの名前は剣崎猛。さっき紹介し忘れた最後の一人。筋肉馬鹿。「俺の説明そんだけかよ！もっと色々あるだろ！」

分かったからなんで皆、説明につっこめるんだ！あ、そうそう猛が言ってい

る池沼とは俺の担任のこと。猛だけ隣のクラスだからな…勉強は全く出来な

いが、小、中、高と野球をやり続けている根っからのスポーツマン。もちろん

ん運動神経は抜群、確か4番でピッチャーという恐ろしい奴だ。性格はとに

かく明るく、元気がよく、ガサツ。しかし涙脆く、困っている奴を見るとほ

っとけないという優しい一面もある。まあ、よりにもよって一番面倒な奴に

事を伝えやがったな…担任の野郎…

「いつでも助けになるからな？絶対一人で考え込むなよ？絶対だからな！」

「分かった分かった…とりあえず教室に戻れよ。ホームルーム始まんぞ。」

猛は渋々帰っていったが…こっち二人にはなんて説明するか…

「和輝。放課後ゲーセン行こうぜ。多分、ここじゃ話せないことだら？」

流石真志！と言いたいところだが、出来れば説明したくない。巻き込

みたくな

いつてのが本心だが、ここで断りや問いただされるだろうしな…

「分かったよ。放課後付き合っよ。」

そう言ってひとまず、二人には納得してもらった。

授業が始まったが、担任があらかじめ先生達に言っただけなのか、アイカム

に関しては誰もつまなかつた。

そして放課後。四人とも集まり、久しぶりにゲームセンターに遊びに行った。

そういえば…四人で集まるなんてことも久しぶりだ。みんな受験勉強で忙し

く、基本的には学校が終わると皆、即行で家に帰っていたから…俺ぐらい

か…ゲームしてるの…

久しぶりにいろんな事を皆と喋りながら歩いている。それでもかなり嬉

しかった。ここまで俺のことを心配してくれてるんだから…

ゲームセンターに着いたが…さっきの言葉を取り消したいぐらい全員、普通

に楽しんでいる…なんだかなあ…

理沙と猛は格闘ゲームのコーナーに、実は理沙は格ゲーの世界では名の知れ

たプレイヤーだったりする。地元じゃ「リーサ」の名前を知らない格ゲー

ーマーはいないほど強かったりする。

真志はクイズゲーム。ちなみに俺も強制参加。そんなことをして時間を潰し

ていたが、ゲームの区切りがついたところで真志が俺にこう言ってきた。

「和輝、全部話せ。包み隠さずな。」

そんなこと言われても話せるわけが無い。適当に言っでごまかそうとしたが、

見抜かれた。そして

「俺はお前のことを親友だと思ってる。だから助けになりたいんだ。」

「悪いが、知れば危険な目に遭うかもしれない。だからこれ以上は言えないな。」

「ならなおさらだ。そんなことで離れるほどの関係じゃないはずだろ？」

そんな問答が続き、そして俺が諦めた。というかその通りだ。結局、親友に

隠してどうなる？余計心配させるだけだ。そして全て話した。まあ、驚きは

隠せなかったみたいだけだな。当たり前だ。こんな話をまともに聞ける奴の

ほうがよっぽどおかしい。

「そうか…それじゃそのゲーム機つてやつを見せてもらおうかな。」

真志曰く、自分が見たことの無いものだったら、なんとかその情報を探して

見る。だからそう言った面で協力してくれるそうだ。二人には秘密で。

そして格ゲーに夢中になってる二人を無理やり連れて俺のうちにいくことになった。

ま、これが全ての事の発端になるんだけどな…

ロード&ナイト 第十一章

「ロード&ナイト」

第11章 新たにパーティーメンバーを加えますか？

「やっぱり大きいな、和輝の家。」

と真志が呟く。そういえば久しぶりだったな…みんなが家に来るの…

「和輝の部屋ってどこだったっけ？」

と理沙が聞いてきた。

「階段を上って、左に曲がった突き当りの部屋。先に部屋で待っていてくれ。」

そういつてリビングに入っていった。

「何やってんだ？和輝も来いよ！」

と猛が、って綺麗にみんな一言ずつ喋ってんなあ…

「久しぶりに来ただろ？飲み物と菓子ぐらい出すよ。」

「さっすが！気が利くう！」

猛がいい反応をしてくれる。

「それじゃ、先に上がらせてもらうぞ。」

「いいけど、ゲームには触るなよ。」

その言葉を聞くと、皆すぐに上っていった。

『そういえば…久しぶりだな…こうやって家にみんなが来るのも…ゲーセン』

で遊んだのも…みんな受験勉強で忙しくて、最近じゃ会話も殆どしてなかった

たからな…』

もし、卒業した後バラバラになったら…いや、卒業した後はみなバラバラの

道に進むだろう。もしそうだったとしても、またみんなでこうやって集まる

機会があるのか、どうでもいい話で盛り上がりたり出来るのか、俺のことを

覚えていてくれるだろうか…そんなことを考えながら、適当に人数分のコッ

プを取り、菓子を適当にお盆に乗せ、炭酸飲料を手に取り二階の自分の部屋

に向かった。なんだか楽しそうな話し声が聞こえる。

『久しぶりだから、皆楽しそうだな…たまには誘わないとな…』
そう思いながら扉を開けると

「ねえ！見てよ！私にそっくりじゃない？可愛い〜。」

と理沙が言っている。

「自分で可愛いって言う奴があるかよ。」

と猛、

「みんな良い感じに似たキャラクターで良かったな。」

と真志、そうか…キャラクターを作って遊んでたのか…よかったよ
かった…

つて！良くねえ！！！！

「お前ら人の話し聞いてたあ？ゲーム触るなって言っただろ！」

扉を開けるなりそう言い放ったが、全員極めて何が？という顔をしている。

あゝもう！最悪だ…最悪の展開だ…よりもよって全員巻き込んで
しまった。

「ていうかなんで起動したんだよ！なんでみんなで遊べてるんだよ
！」

一気に質問したが、真志が

「テレビも本体も元々電源が入ってたぞ。それにアイカムも三つダ
ンボール

の中に入ってたし…」

うん、もうそういうのには慣れたよ…勝手に電源入るわ、一人用だ
ったはず

のゲームにアイカムがあと三個付属してるわ、何故かキャラ製作画面が増え

てるわ！もういいよ！飽きたよ！このトンデモゲーム！

「俺はみんなに迷惑かけなくなかったから真志にだけ話したのに…
なんで止

めてくれないんだよ…」

そう頭を抱えながら言っていると

「だったらなおさら起動してよかったな。」

と言いやがった。

「お前どれだけ人が悩んで…」

そこで言葉を遮るように

「俺らはそんな薄っぺらな関係じゃなかったはずだ。はっきり言って隠して

一人で解決しようとするほうが迷惑だ。だからみんなにも危険性があるこ

とを言ったら快く引き受けたぞ！みんなそんなくらいお前のことを心配してる

んだよ！和輝！」

あまりにも堂々としている、というか…俺がみんなのこときちんと分かって

なかったな…

「悪かった…そうだったな…お前ら昔から…」

人が困ってたら全身全霊を懸けて助けてた。俺もそうだった、そうやってみ

んな仲良くやってきてたのにな…

「なあ和輝、これどうやって操作するんだ？」

と猛が聞いてきた。

「これはアイカムをつけて脳波で操作するんだ。簡単に出来るからやって見せるよ。」

そんなことを言いながら、ゲームをみんなで遊んでいた。昔みたい
に…

終わらないけどな。

しかし！パーティーメンバーが増えたことにはかなり安心している
が、恐ら

く今やつと作ったばかりのキャラだ。レベルが1だろう。そうなっ
てくると

新大陸に行くのは少し危ない。レベル差が激しいせいで恐ろしく厳
しい戦い

になってしまっただろう。

「「ザック」大丈夫だよー。みんなレベル合わせたから。」

早速、ザックが話しかけてきた。

「おお！すげえ！ホントに喋んのか！」

と猛が驚いている。そっぴやみんなのキャラはどうなってるんだろ
う。と思

ったが、予想以上に分かりやすかった。

「「グレイ」よろしくお願いしますね、みなさん。」

この丁寧な挨拶してる奴が真志だ。見た目からすると魔道士^{マジシャン}。

黒衣に杖、そしてご大層な本を持っている。見るからに魔道士だ。

「「リーサ」どうもよろしくお願いします。」

次が、女性キャラという時点で理沙だ。見た目からすると祈禱師（
プリース

ト）。全体的に白を基調とし、手には何も持たないが、ロザリオの
ネックレス

スをつけていた。

「「エッジ」おうおう！よろしく頼むぜえ相棒！」

分かりやすい。こいつが猛だ。見るからに武道家^{モンク}だ。

身動きのとりやすそうな服装、そしてこれといって何も装備してい
ない。も

う思い当たるものが武道家しかない。

「なんで俺が武道家かなー。普通、俺がなるなら騎士とか暗殺者（ナイト）アサシン）とかだろ。」

どの口が言っている！とつつこみたいが、そんなことを言えばこいつは…

「あんたにお似合いじゃない。筋肉馬鹿で拳一筋なんて。」「理沙のやつが言ってくれやがった。」

「なんだと！お前のほうがお似合いだろ！この男女！」

「なによ！格ゲーで勝てないぐらいで！」

きれいに言い合いを始める二人…ってああもう！

「落ち着けよ二人とも！理沙は変なこと言っな！そして猛も突っ掛かるな！」

まだ腑に落ちないようなので

「猛、いいかモンクってのはな見た目は確かに筋肉馬鹿だ。でも要するに武

器に頼らなくても戦える武道の達人なんだよ。すごいと思わないか？」

そんなことを言ってみると

「確かに！よし！モンク極めるぜえ！」

と完全に意気込んでくれた。単細胞は扱いやすい。

「「ザック」パーティー組んだんなら隊列を決めたほうが良いぞ。」

とザックが言ってきた。確かにそうだ。こういうRPGで大事なものは隊列。誰を

前衛に出し、後衛からサポートしてもらうか、きちんと考えないと後々きつ

くなる。とりあえず…

「どんな隊列の型があるんだ？」

と聞いてみる。

「「ザック」えーと…一文字、一点突破、守備一徹、臨機応変、先手必勝、細

工流々…こんなもんかな。」

えらく漢字が並んでるな…とりあえずここはどんな状況にでも対応できたほ

うがいい。臨機応変の型がひし形で最も使いやすそうだ。が、近距離戦闘組

が二人だからなあ…ここは一文字か？いや、そうすると全員横並び、遠距離

戦闘組がダメージを受けやすくなる。一点突破が一番良いな。縦並びの型な

ら皆、一番真価を発揮できるだろう。

「ザック、一点突破でお願いする。」

「「ザック」OK！順番は？」

「エッジが一番前、二番目がお前、三番目がグレイ、そして最後がリーサ。」

そう言うともみんなが指定された場所に並んで確認を取ってきた。間違いなさ

そうだな。

「なんで俺のキャラが一番前なんだよ！」

猛、ただの不満だらけなんだ…

「お前のキャラ、モンクだろ？どうやって一番前以外から攻撃するんだよ。」

もちろん攻撃力は下がるが、二番目ぐらいでもいい。

「あ、そうか！」

ホントに単純で扱いやすい。一応言っておくが親友だ。いいように扱ったり

はしてない。絶対にしていない。

「それじゃ目指すはシン・ハウユ大陸！大航海の始まりだ！」

そう言っただけで定期船に乗り込んだ。勇者は定期船がタダらしい。ホントに勇者

ってのは得だなあ…船が進みだしてしばらくした頃、

「『ミランダ』おお！恩人が乗ってるじゃないか！どうだい？この船は。」

そこにいたのはミランダ。っていうか船長が船内フラフラするなよ……とつつ

こんだが、操舵はクルーに任せてるから安心との事だった。ミランダとも出

会い、楽しく話をしていたが、船外から大声が聞こえた。

「『クルー』姉御ー！！海が荒れてきました！」

「『ミランダ』その呼び方はやめな！それに海が荒れたぐらいでなにビビッて

んだい！」

しかし、そのクルーの様子がおかしい。

「『クルー』それが空が急に暗くなっただですよ。いくらなんでもおかしいで

す！」

急に暗くなった？まさか……

「『ミランダ』分かった。クルーには乗員を全員船内に避難させるように言い

なさい。」

そう言っただけミランダは甲板へ上がっていったが、嫌な予感がする……

もしかす

るとあの時みたい……

「『ミランダ』なんだいありやあ！？」

そんな声が聞こえた。つまり何か得体の知れないものがあつたということだ。

すぐに全員甲板に上ったがそこに待っていたものは、俺の予想を遥かに超えていた。

ロード&ナイト 第十二章

（ロード&ナイト）

第12章 水のアルラグナ！

甲板に出て最初に見えた景色は、さっきまでの快晴が嘘のような大嵐。そし

て遠くに見える竜巻。さらにいつぞやのクラーケンまで…どうやってこんな

なにいっぺんに集まるんだよ！

「「????」アッハハハハハハ！あんたらかい？私の可愛いクラーケンをこん

な姿にしたのは。」

そんな声が聞こえ、ふと横を見るといつの間にかそこには薄く透き通ったよ

うな女性が立っていた。

「「ミランダ」なにもんだい？あんたは！」

そんな質問に一つ高笑いをし、緩やかな口調で答えた。

「「アルラグナ」私の名前かい？私は魔王軍四天王が一人、水のアルラグナ！

クラーケンをこんな姿にしたんだ、タダで済むと思わないことね。」

そのアルラグナと名乗った女性は、確かに魔王軍四天王と言った。薄く透き

通り、全体的に水色がかった姿、だが袖のような部分が常に揺れている。確

実に人間ではないのは分かっているが、魔物と言うには少し人間っぽ過ぎる。

が、一瞬で得体の知れないものだということを知らしめてくれた。アルラグ

ナがクラーケンに近づき、そつと触れただけで傷だらけだったクラーケンが

元通りになってしまった。

「「アルラグナ」さあ、こんな船真つ二つにしておしまい！全て海の藻屑となるが良いわ！」

くそっ！どうする！…このままじゃ…しかしその時、

「「ミランダ」主砲、放てっ！！」

そんな声と共に一気に爆音が木霊し出した。ミランダの掛け声で一気に大砲を撃っていたのだ。

「「ミランダ」この船をなめんじやないよ！あたしが船長である限り、この船

には傷一つ付けさせないよ！面舵一杯！一旦距離を取るよ！船員は大砲が使

えない間は銃で応戦しな！」

流石はミランダ。もう船長が板についてる。

「「ミランダ」ザック！あんたもなにポーっとしてるんだい！自分の仕事をしな！」

そうだったな…こつちのも相手しないといけないのがいたな…

「「アルラグナ」キィィ！！小癪な！人間風情が！」

相当頭にきているようだ。

「「ザック」覚悟しな！その人間風情にやられるんだからよ！」

剣を真つ直ぐアルラグナに構えてそんな台詞を言うザック。こつちもなかなか

か勇者が板についてきたな…

「いくぞ！三段斬り！」

手始めは様子見、とりあえず物理は効くのか？そう思っていたら意外とダメ

ージを与えられた。よし！この調子で…

「ねえ、どうやって攻撃とかすればいいの？」

と理沙が聞いてきた。あ、そういや説明はちゃんとしてなかったな…

「えっと…自分のキャラが動ける番が来たら、コマンドの中から…」
「ちやっちやと説明したが、皆ゲーマー。簡単に理解してくれた。」

「要するに私はサポーターね！任せて！」

そう言い、防御の姿勢を取ってターンを過ごした。

「次は俺だな…よし！魔法の…多分水棲だから電気が効くだろ…サ
ンダーっ

と…」

みんな慣れてるなあ…

「「グレイ」裁きの雷！《サンダー》！」

見事的中、アルラグナに大ダメージを与えている。

「よし！俺様の番だ！いけえ！正拳！」

これも見事命中、みんなホントに順応早いなあ…

「「アルラグナ」逆巻け激流！《スパイラル》！」

そう言うとなんと海の水が甲板に上がってき、巨大な渦になってこ
ちらに攻

撃してきた。くそっ！威力からすると恐らく中級魔法！…ならば！

「「ザック」光の力よ、全てを拒絶せよ…《リフレクト》！」

すると自分を守るように光の壁が出来上がった。が一度で作れる光
の壁は一

個までのようだ。

「よし！今度はアイスを唱えるんだ！」

真志はさっきからの確に水棲生物を弄っている。何の恨みが…

「「グレイ」零度の氷塊！《アイ》…」

そこでクラーケンが触手をこちらに叩きつけ詠唱を遮る。流石にミ
ランダた

ちが応戦してくれているといっても限界がある。結局、前回だって
全力で戦

って撃退することは出来たものの、倒すには至っていない。それを乗組員と

ミランダだけでどうにかしようとしているのだから…

「ミランダ！無理をするな！そっちの相手もするから援護を頼む！」

「ミランダ」すまないねえ…相手は任せたよ。」

そう言っただけの操作と大砲の指示に回った。後はこっちの仕事だが…

「「アルラグナ」なめられたものね…私の本気を見せてあげるわ！」

そう言っただけアルラグナは魔力を溜め、それをクラーケンに向かって放った。

その途端、まぶしい光に包まれ、一瞬見ることが出来なくなった。

「「アルラグナ」またせたわね。これが私の本気よ！」

そんな声が聞こえ、そちらに目をやると、なんとアルラグナとクラーケンが

ひとつの体になっていた。

「「アルラグナ」海の藻屑となりなさい！」

そう言っただけ触手でなぎ払うように攻撃してきた。流石にダメージが大きすぎ

る！くそっ！即行でケリをつけないと先に船がやられる！

「二連斬り！」

颯爽と駆け出し斬りかかるが、剣撃が全て受け流されるように滑り殆どダメ

ージを与えられなかった。どういうことだ？全く効かないなんて…

「俺に任せな！要するに防御を無視すりゃ良いんだろ？いけえエッ

ジ！牙撃

い！」

猛が指示を出すと、エッジの拳がまるで獣の牙のようなオーラを纏い、鋭い

一撃をアルラグナに打ち込んだ。がそれも受け流され効果なし…

「「グレイ」さっきのお返しだ…零度の氷塊！《アイス》！」

そう言っただけ拳ほどの氷塊を出現させ、アルラグナに飛ばすが、凍り

つくもの

の、すぐにその氷が剥がれ落ちてしまふ。氷さえも効かないなんて…

「「アルラグナ」フッフ…無駄よ…そんな攻撃は通用しないわ…」

くそっ！どうなってんだ？何故全ての攻撃が通用しないんだ？

「「アルラグナ」逆巻け激流！《スパイラル》！」

しかし、その魔法も無駄だ！リフレクトの効果がある限り、魔法は受け付け

ない！がその効果が裏目に出てしまふ。なんと跳ね返した水流がアルラグナ

に当たると、やっとのことで与えた僅かな傷が治っていく。

「「アルラグナ」アハハハハ！ありがたいねえわざわざ回復までしてくれる

なんて。でも私はそんなに甘くはないわよ！」

そう言ってもう一度触手で攻撃してきた。流石に二度は辛い。早く回復した

い所だが…またリフレクトが足を引っ張っている。どうにかしないとな…そ

んなことを考えていたら。

「「エッジ」じゃ俺がその盾、消してやるよ。粉碎拳！」

そう言っていきなりザックに殴りかかった。まあ、リフレクトは消えたよ…

ザックは瀕死だけど…

「「リーサ」迷える子羊を癒す力よ…《ヒール》！」

すかさず回復してくれた。ありがた…

「「アルラグナ」^{スパイラル}！」

ちよっとは空気読め！くそっ！俺も回復に徹しないと間に合わないな…

「「ミランダ」何やってんだい！主砲、は…」

「「アルラグナ」させないよ！津波！」

そっいつて津波を大砲にぶつけた。これじゃ当分の間大砲が使えるそ

うにない。

「『ミランダ』よくもやってくれたね！お返しだよ！」

そう言つて銃でアルラグナを撃った。ギリギリのところでかわされたが、何

故かいままで全く焦っていなかったアルラグナが急に発砲され焦っていた。

なんでさっきまで特にダメージを受けていないはずの攻撃であればど焦つて

いるんだ？…！まさか…！

「真志！ 그레이 にファイヤを唱えさせるんだ！」

「ファイヤ？ 相手は水属性だから効かないと思うぞ。」

「いいから！ はやく！」

そう言つと真志が渋々ファイヤを唱えさせてくれた。真つ直ぐアルラグナに

飛んで行き、命中。同時にアルラグナが激しく燃え上がりだした。

「『アルラグナ』 キャアア！ 熱い！ 何故、弱点が分かった！」

そう、俺は途中であることに気付いた。打撃はともかく、斬撃や氷が効かな

いのはおかしいと思つた。そして鉄砲に対してあそこまでの焦りよう。つま

り当たれば大ダメージを受けるからだ。そこでもしかすると今、アルラグナ

を覆っている光沢は水ではなく、油ではないのかと思ひ攻撃した。

まさに読

み通りの結果になった。アルラグナは一旦、海中に潜り火を消しているよう

だ。チャンスは今しかないな…そう思い、甲板ギリギリに立ち、そして頭の

上で剣を構えた、たった一度のチャンスに備えて…

「『ミランダ』なにをしてるんだい！ そんなところにいると落ちるよ

！」

ミランダが心配しているのが分かるが、これに賭けるしかない！するとアル

ラグナが浮上してくるのが見えた。

「ザック」今だ！両手斬りいい！！」

そう言って剣を振り下ろしながら船から飛び降りた。剣はちょうどアルラグ

ナの脳天を捉えていた。そこから下まで真っ二つにしながら落ちていく。

「「アルラグナ」ギャアアアアア！！」

そしてそのままアルラグナと共に海中へ…やばい！忘れてた！ザックが着て

るの鎧だ！溺れそうになりながらも必死に海上を目指すザック。しかしアル

ラグナが目の前に立ち塞がる。が、さっきと様子が違う。

「「アルラグナ」ここなら大丈夫そうね…若き勇者よ、息はできますよ。」

どういうことかアルラグナは穏やかな表情でザックを包み込み、足場を作っ

てくれた。

「「アルラグナ」あなたの力を見せてもらいました。あなたなら魔王を倒すこ

とができるかもしれませんね…」

状況が理解できない…どうなってんだ？

ロード&ナイト 第十三章

（ロード&ナイト）

第13章 パーティーと一時離脱しますか？

「「アルラグナ」受け取りなさい。若き勇者、いえザック。水の力を…」

そう言うアルラグナの体が輝き、小さな青色の光がザックに向かって飛び

で行き、ザックにぶつかるとその光はザックの中に吸い込まれるように消えていった。

「「アルラグナ」今すぐ使いこなせるとは思いませんが、いずれ必要になり、

この力を使う時が来るでしょう。」

「「ザック」待って！あなたは一体！？」

何者なのか聞こうとしたが、

「「アルラグナ」時が来れば分かります。行きなさい。」

そう言っただけザックを水柱の上に乗せ、船の上に乗せるとそのまま後ろに倒れ

こむように海に消えていった…そこに残ったのは倒れこむときにくる波だ

け…空もいつしか晴れ渡り、何事も無かったかのように日の光が射していた。

「「リーサ」ザック！大丈夫！？」

続けてみな声が聞こえた。

「「ザック」ああ、大丈夫だ。」

しかし…アルラグナの最後の変容ぶり…何かありそうだ…しかも魔王を倒せ

…か…考えれば考えるほど分らない。

「『ミランダ』とりあえず、一件落着だね。さ！気を取り直してシン・ユウキ

大陸を目指すよ！」

そう言つてまた大陸を目指して船が進み始めた。その後、何事も無く無事シ

ン・ユウキ大陸の港町、ヤチマグ王国に着いた。新大陸初の王国に胸躍らせ

ていたが、どうもそんな空気ではなかった。恐ろしいほどに国全体が廢れて

いるというか、活気がないというか…国民の顔にも余裕が無く、国中の空気

が淀んでいるかのようにだった。

「『エッジ』なんか…みんな元気がないな…」

悪いがエッジ、今俺が言つた。

「『ザック』とにかく、この状態は異常だ。国王に直接会つて聞いてみよう。」

そう思い、王宮に向かったが…王宮とは思えないほど酷い有り様だった。

「『国王』おお！来てくれたか旅の勇者よ…何卒私の話を聞いてくれぬか。」

そう言つてこの国の惨状を話し始めた。なんでもこの国は今、近くに住んで

いたアーマリーザードという魔物によって食料を奪われ、家を壊され、さら

には王宮兵士では齒が立たない状況だと教えてくれた。

「『国王』すまない。先を急ぐ身であることは重々承知しているが、この国の

ため力を貸してはくれぬか？」

「ザック」もちろんです！」

返事するまでもないけどな。困っている人を放っておいて魔王を倒しに行く

なんて勇者としてあるまじき姿だ。

「国王」おお！なんとも頼もしい…それでは宿屋と武器屋、防具屋、道具屋

に無料で支援するように言っておく。十分準備を整えてから向かってくれた

まえ。」

良い事をすれば必ず見返りがある。まさにそんな状況だ。よし！さつさと支

度をして討伐に向かおう！

「和輝。ちよつと待った。」

と真志が止めに入った。

「どうしたんだ？」

「流石にこれ以上は時間がまずい。俺たちは帰らせてもらっぞ。」
そう言われて時計を見ると、もう結構時間が経っていた。時間の流れは無情

だ…皆がアイカムを外して帰ろうとしたので、急いで止めた。

「待て待て！アイカムは絶対に外すなよ！言ったと思うがアイカムつけてな

いと死んじまうぞ！」

「え？あれマジで言ってたのか…そうか…仕方ないな。」

そう言つて真志がアイカムを取った。

「今日和輝に言っただけなのに…私もこれつけて学校行くなんて…」

「マジ！貰っていいの！やったね！これかっこいいな！」

そう言つて二人ともアイカムをもって帰ってくれた。一人だけノリが違う気

がするが…まあ、多分外さないでいてくれるだろう。見送る時にも再三言っ

たし…よし！続きをするか！そう思つて部屋に戻ると

「「ザック」みんなのロードは帰ったのか？それなら俺一人では行動できないぞ。」

そんなシステムなのか…面倒だな…まあそついや常にアイカムつけてるから

ありえそうではあつたけど…どうするかねえ…

「「ザック」一応、仲間と離れて単独行動できるけど、ロードのいない勇者や

そのパーティーはその間、無防備だから安全を確保してやれよ。」

そういうことか…どうにかして確認を取っておきたいな…

「「ザック」アイカムはロード同士でも会話できるぞ。会話したい人を指定し

て話せばいいから。」

ホントに便利だなあコレ…そんじゃ早速…

「真志。聞こえてるか？」

一応、確認を取る。と

「ああ、聞こえてるぞ。どうした？ていうかこんな機能もあるのか…」

おお！真志の声だ！すごいなコレ。

「えつとな。今、みんな移動してるだろ？その間に進めたいんだけど、別行

動になるらしいんだ。だからとりあえず宿にでも置いてから移動していいか

な…ってそう思つただけだ。」

「そういうことか。分かった。二人には俺から言つとくよ。じゃ、また明日、

学校で。」

そう言つて通信を切つた。ひとまず、このみんなのキャラを宿に動かさない

とな…とりあえず誘導して宿屋に入った。ついでなので体力の回復も行った。

「「ザック」よし！だいぶ船旅の疲れも取れたことだし！さっさと終わらせよ

う！」

やつぱり疲れるのか…まあいいや。もう慣れっこだ。

「待て、その前に折角装備を整えられるんだ。きっちり準備して行こう。」

とは言ったものの、やはり国中が疲弊しているため、あまりいいものは無か

った、が折角のご好意だ、ありがたく使わせてもらおう。そして支度も終わ

り、そのアーマリーザードのアジトに向かうことにした。パーティを組ん

だというのにまた一人でダンジョン攻略か…そう思いながら町を出た。

新大陸始まって始めてのフィールド、気を引き締めないと魔物のレベルも上

がってるはずだからやられてしまうかもな…それだけは避けないと…そう思

っているとは早速、敵のお出ました。しかも相手はトカゲ男。フフツ…いつぞ

やのリベンジマッチといかせてもらおうか！

「勝負だ！トカゲ男！」

そう意気込んだが、

「「ザック」いやいや…アーマリーザードだよ。」

的確に訂正される…ちよつと恥ずかしい。

「知るか！どつちでもいいんだよ！」

「「ザック」よくないよ！名前間違われて、その名前で呼び続けられたら嫌だ

ろ！」

確かにそうだが…何故そこまでトカゲ…アーマーリザードを庇う…

「ア、アーマーリザード…勝負…」

「「ザック」先に謝れよ！」

久しぶりにザックが冷たい…泣きそうだ…

「ごめんなさい…」

とりあえず謝ったが、はっきり言ってアーマーリザードのほうも突然のこと

で困惑している。まあ…当たり前だ…とにかく、仕切りなおして…

「ザック！三段斬り！」

素早く駆け込み、三連撃を与えた。手応えあり！一気に畳み掛けるぞ！と思

っていたが、あっけなくアーマーリザードは倒れてしまった。あれ？どうい

うことだ？

「「ザック」ロード…俺らも強くなってんだよ…？そりゃあしょっぱなからあ

んな強力な技使えば…」

うん…そうだったね…この大陸に入る前に結構、強敵と戦ったからな…なん

だかしょっぱいリベンジ戦になってしまったが、勝ちも勝ちだ。ザックは知

らんが俺にとっては宿命のライバルだったからな…

その後、しばらくすると人が倒れているのが見えた。ここはまた蘇生用アイ

テムの出番だ！そう思い、近づいて早速アイテムを使おうとするが、反応が

ない。あれ？どういうことだ？

「「ザック」この人、ロードが死んだから死んだみたいだね。これじゃ蘇生で

きないよ。」

今…何て言った…？

心臓の鼓動が自分で聞き取れるほど大きな音になったことに気付く。
「待て待て…出雲さんは…クラウドさんはロードが死んでたんだぞ！
！どうい

うことだよ！」

「「ザック」そうだったの？てつきりクラウドさんが死んでたから
蘇生させた

のかと思つてた。」

まさか…そんな…それじゃあ…もし俺が死んだら…みんなが死んだら…

「ホントに蘇生できないのか？出雲さんは生き返ったぞ！」

そう言うのと逆に驚かれた。

「「ザック」多分、バグとかだとは思うけど…まずありえないよ。」

出雲さんの蘇生でかなり安心して…もし死んでもゲームをやっている誰

かが助けてくれる。そう思っていたからだ…しかしそんな甘い考えも簡単に

消し去ってくれた…本当にクリアするまでゲームオーバーになることができ

ない。それを考えるとより一層気を引き締めなければならない。改めてそう

考え直し、その場を離れた。蘇生できない以上、連れ回せば自分の動きを制

限する。まさに自然界の厳しさをそこに体現したような状態だ…俺にできる

ことは唯、冥福を祈るのみだった…

「ザック…本当にアイカムをつけてたら大丈夫なんだな？」
そう聞くと

「「ザック」大丈夫！必ず死なせないよ！」

そう自信満々に言ってきた…たえそれが心配させないための嘘だっ

たとしても、今の俺にとっては十分安心できる言葉だった…

そのまましばらく歩き続け、ようやく目的の岩肌が見えてきた。国王から聞

いた通り、ぽつかりと洞窟が開いていた。しかし、アジトとはよく言ったも

んだ。中からこちらに気付いたアーマリーザードが二匹現れた。よし…

「さっさと終わらせるぜ！ザック！」

「「ザック」当たり前だ！ぜりゃああああ！！」

そう言って勇ましくアーマリーザードに切りかかった。さあ…ゲームスター

トだ！

ロード&ナイト 第十四章

「ロード&ナイト」

第14章 武人の心！勇者の意地！

またしても洞窟な訳だが、前回よりも荒々しい。流石に魔物が作つたアジト

だからな…松明は一応置いてはあるが、乱雑でかなり暗くなっている場所も

ある程だ。よくこんなので見えるな…！

「「ザック」かなりの数だな…」

ザックもすぐ気付き物影に隠れたが、本当にかんりの数がいる…流石に今出

て行けば、弱いとはいえ、数で攻めきられる。それに見た限りでは剣を持つ

たもの、ボウガンを持ったものなどさまざまいたので、恐らく下っ端だけ

やないのが予想できた。ギャーギャー騒いでいるようにしか聞こえないが、

それで皆が動いているところを見ると、恐らく指示を出しているのだろう。

しばらく待っているとだいぶ数が減った。どうやら戦力を散らしたようだ。

チャンスは今だが、流石にまだ早い。ヘタをすれば全員戻ってきてしまう。

ここは時が来るのを待つしかないか…

「「ザック」ロード！あいつ！」

ザックが小声で、指をさしながら言った先には、完全に他のアーマ―リザー

ドとは姿や装備が違う一体がいた。そうか…あれが親玉か…よし！
今しかない！

「「ザック」ぜりゃあああ！！」

素早く突っ込むが、流石にそこは魔物の反射神経。すぐにこちらに
気付き、

戦闘態勢をとった。しかしそのまま斬りかかる。速攻で終わらせな
ければど

んどんこちらが不利になるからだ。

「「???」「フン…人間にしてはなかなかやるな…」」

なんとそのアーマリーザードが喋りだした。剣から力を抜いたつも
りはない

が、はじき返されてしまう。綺麗に着地し、相手に向け剣を構えた
まま

「「ザック」喋れるのか！？お前は一体何者だ！何故、人間を襲う
！」

そう聞くと

「「ショウグンリザード」我が名はショウグンリザード！何を言い
出すかと思

えば…やっていることは貴様らと同じ！生きるために奪っただけだ
！」

剣をこちらに向けてそう言ってきた。

「「ザック」違う！みなのお安全を守るためだ、お前たちのように略
奪をしたり

なんかしていない！」

「「ショウグンリザード」笑わせる！！貴様らが我らの土地を奪っ
たというの

に何も奪っていないというか！！」

凄まじい剣幕で叫ぶ。そうか…その怒りは分からんでもないが…

「「ザック」それは俺はなんとも言えないが…だからといって俺も

引くわけに

はいかない！」

そう言ってもう一度斬りかかるが

「シヨウグンリザード」それはこちらとて同じ！」

そう言ってもう一度剣を受けられ、弾き返される。力はあちらの方が上か…

「ザック」だったらやることは一つ…」

「シヨウグンリザード」どちらが己の信念を貫くか！」

下段から素早く振り抜くがあちらもきれいに受け止める。

「二人」斬り合って確かめるのみ！」

ギャリン！と剣同士が擦れあい、火花が散る。まさに漢と漢の意地の張り合

いだ…負けるわけにはいかない！お互い引くことを知らないため長い長い斬

り合いへと発展する。しかし、時間が経てば経つほど体力の差が現れてくる。

こちらは既に肩で息をしているが、シヨウグンリザードはいまだ呼吸すら乱

れていない。

「シヨウグンリザード」どうした？さっきまでの威勢は！貴様の信念はその

程度か！」

くそっ！もうここは大技に賭けるしかない！アルラグナ戦直後に覚えた技だ。

確実に大技のはず！…

「四聖剣！水！」

そういうとザックが力を溜めだした。ザックの下に魔方阵が現れ、水の飛沫

が上がる。そしてその飛沫が剣に集まり…それが全て散ってしまった。

「「ザック」な！？何で…」

かなり動揺している。それもそのはず。技が発動する前に失敗したのなんて

初めてだからだ。

「落ち着け！もう一回だ！」

しかし、結果は同じ。再度剣に飛沫が集まりきる前に四散してしまった。

「「ショウグンリザード」無駄なことを何度もするのが貴様の本気か！拍子抜けだな…」

そう言って剣を鞘にしまった。

「「ザック」待て！まだ勝負は終わってないぞ！」

「「ショウグンリザード」勝負は目に見えている。貴様では私には勝てん。ヤ

チマグ王国を攻撃するのだけはもうやめてやろう。」

そう言ってこちらに背を向けた。その途端、周りを取り囲んでいたアーマー

リザードたちも引いていった。

敗北ではないが…それに近いものだ。相手に自分の实力を見限られたのだから

ら実質、負けたのと大差無い。なんともいえない感情を抱きながら洞窟を後

にした。とりあえず、もう攻撃はしないと云ったんだ…その報告だけでもす

るか…そう思い、トボトボとヤチマグ王国を目指して歩いていたが、ある程

度進んだ時、目の前で誰かが魔物と交戦していた。

「「クラウド」燃え上がれ業火！《フレイム》！」

あれは…！クラウドさん！彼が唱えた魔法によって彼を中心に炎の渦ができ、

それを両手を構えて集め、巨大な火球を作り上げ敵に向かって放った。命中

はしたが、敵も相当強いのか倒すには至っていなかった。そのまま敵の亀み

たいなのが反撃してきた。

「「ザック」カウンター！」

そう言っただけの攻撃のラインに割り込み、攻撃を受け止めながら反撃した。

「「クラウド」おお！久しぶりだね！」

言うほど時間も経ってないと思うが…ていうかこの人、もうこんなところまで

来てるってホントに社会人なのか？

「「ザック」まさかこっちでも合えるなんて思ってたぜ！」

そう言っただけを滅多斬りにするお前が怖い…

「「クラウド」そうですね！《スパーク》！」

そう言っただけ以前より巨大な雷を放った…こいつら…非道さに磨きがかかって

ないか？そして戦闘終了後…

「「出雲」ハハハハハ…実はあの後、このアイカムをつけたままじや仕事に行

けないなーと思っただけを取ったんだ。」

なるほど…確かにそうだ。

「出雲さん…聞いてもらってもいいですか？」

「「出雲」なんだい？話してごらん。」

俺はさっきのショウグンリザードのことがまだ突っ掛かってた。この人なら

相談しやすいと思い、全て話した。

「「出雲」ふ〜ん…魔物にも色々いるんだね。そのショウグンリザードもただ

負けられないから戦っただけだろうし、聞く限りではかなりの武人

のようだ

ね。だからザック君を攻撃しないで返したんじゃないかな。」

意外と他人に淡々と言われると堪える。しかし事実だ。要するに俺が弱かつ

た、そして発動すらしなかった技に全てを賭けたことが気に食わなかったの

だろう。それだけなら殺してもいいだろうが、あいつもあいつなりに俺に強

くなつて欲しかったのかもしれない…

「「出雲」いいのかい？こんなところで油を売つて。勝ちたいんだろ？その

好敵手に。」

確かにそうだ…負けたわけじゃない。見逃されたんだ。もう一度、真つ向か

ら勝負を挑まないとな…

「ありがとうございました。とりあえず今日は宿で休んで、もう一度挑んで

きます！」

「「出雲」その意気だ。彼もそれを望んでるだろうしね。」

そしてお礼を言い、出雲さんと別れ、宿にやってきた。

「ザック。まどろっこしいことはナシだ。全力で己の持つ力をぶつけよう！」

「「ザック」あたりまえだ！次は絶対勝つ！」

そう言つてザックは床に就いた。しかし翌朝…

「「国民」大変だー！！リザードマンが攻め込んできた！早く逃げろ！」

そんな慌ただしい声によつて起こされた。そんなまさか！…確かに約束して

いた。それにあいつが約束を破るような奴には見えない。この目で確かめる

しかないか…そう思い、宿を飛び出して、攻め込んでくるリザードマンたち

を切り払いながら…リザードマン？トカゲ男じゃねえかよ！結局、トカゲ男

で間違いなかったじゃねえかよ！くそつ！ザック、後で覚えてるよ！

「ザック」ぜやああ…！みんなは早く安全な場所に避難して！」

流石にもうザックも勇者らしいな…言葉遣いはまだ治ってないけど…

「リザードマン」ギヤア！ギヤア！」

「ザック」うるせえ！雑魚共！引つ込んでろ！」

そう言つて次々に切り払つていくが…なかなか数が減らない。次々相手をし

ている途中、横から矢が飛んできた。危な！弓矢隊か…多分、今までの感じ

からして恐らく名前はアーチャーリザードだ。近寄つてすぐさま二でも攻撃

したいが、アーチャーリザードの物量攻撃がなかなか止まらないため、動こうに

も動けない。くそつ！こんな時に魔法が使えたら…

「ザック」そういう魔法使えるよ。グレイに教えてもらったし…」

そういうことはもっと早く言え！ていうかゲームなのに教えてもらつて魔法

とか覚えてんじやないよ！

「ザック」炎の力よ、燃え上がれ！《ファイヤ》！」

初の攻撃魔法は真つ直ぐに飛んで行き、見事に命中した。

「よし！この調子で蹴散らしながらあいつのとこまで行くぞ！」

そして何故、こんなことをしたのかを聞かなきゃならない。が

「シヨウグンリザード」何を一人の人間相手にてこずっている！さつさと倒

せ！」

あちらから出向いてくれたわけだが…おかしい…以前と雰囲気が違う

う…なん

というか…威圧というものは前からあったが、今のショウゲンリザードから

感じるものは…それとは全く別の、おぞましい気配だった。

ロード&ナイト 第十五章

「ロード&ナイト」

第15章 黒い気配……！

なんだ！？あの異様な雰囲気は！確実に以前会ったショウグンリザードなの

だが、まるで別人がいるようなそれほどまでの異質な気配を纏っている。そ

う……喻えるなら黒い……ドス黒いオーラを纏ったような雰囲気だ。

「「ショウグンリザード」ハッ！誰かと思えば、あの時の腰抜け勇者か！」

喋り方まで違う……どうということだ……？

「「ザック」お前は一体何者だ！」

「「ショウグンリザード」知れたことを……我が名はショウグンリザード！この

大陸の入り口であるこの王国を攻め落とすよう、魔王に命ぜられた者だ！」

どういうことだ？確かに前会った時は『生きるため』と言った。しかし、今

は確かに、魔王に命ぜられたと言った……なんなんだ？この変容振り

は……？

「「ショウグンリザード」邪魔をするというのならたとえ貴様とて切って捨て

る！覚悟しろ！」

あれ？今、一瞬だけ……その瞬間、凄まじいスピードで間合いをつめて斬りか

かってきた。危ない！気を抜いてたら一瞬でやられる……！

「ザック！あいつをさっきまでのショウグンリザードだと思うなよ

！絶対に

手を抜くな！」

「「ザック」分かってるよ！それに元々、手を抜いて勝てる相手とも思ってたな

い！最初から全力だ！」

そう言つて今度はこちらが間合いを詰め、渾身の三段斬りをお見舞いするが、

なんなくそれを受け止める。雰囲気は違えども、そこにいるのは間違ひなく

シヨウグンリザードだということを思い出させるような剣捌きだ。

「「シヨウグンリザード」やはり…貴様との一騎討ちは心が躍る…このような

形だが…それでも十分だ…」

鎧迫り合いになり、間合いが近づいた時に、不意にそう言い放った。やはり

見間違ひではなかった。一瞬、ほんの僅かではあったが先日と同じシヨウグ

ンリザードがそこに居た。

「「シヨウグンリザード」貴様らも何をモタモタしている！さつさと王国を崩

壊させろ！アーチャーリザードとブレードリザードは私の援護をしる！」

何！一騎討ちじゃないのか！くそっ！だったら間合いが大事だ…

「ザック！一旦離れる！周りの敵を先に倒せ！」

シヨウグンリザードも一旦距離を取り、弓矢隊の一斉射撃が来た。流石に避

けされる数じゃない。何発かは当たったが、まだ痛手ではない。先手を打た

ないとどんどん苦しくなってしまう。

「「ザック」回転斬りいい！！！」

次々切り払っていくが、それでも数が尽きない。さらに言う国中にただ暴

れまわるだけのリザードマンたちもいるほどだ。終わりが見えない。

「ザック」卑怯だぞ！あんたはそんなことするような人？じゃなかった！」

「シヨウグンリザード」なんと言われようが知ったことか。私の目的はこの

王国の陥落。貴様の相手ではない！」

流石に一对多じゃ勝ち目が無い…しかし！負けるわけにはいかない！

「ザック」あんたに真っ向から俺の本当の力を見せなきゃ意味が無いんだ！」

「シヨウグンリザード」私の知ったことではないわ！！さっさと終わらせん

か！この出来損ない共！」

俺のことをけなそうが何しようが構わん…でも！

「ザック」あんたはそんな簡単に仲間を捨て駒にするような人？じゃない！

前言ってただろ！私が戦うのは生きるためだって！一族のためだって！」

生きるためには言った。だがザック。一族のためなんて一度も言っていないぞ。

「シヨウグンリザード」よく聞けえ！若き勇者よ！貴様の前にいるシヨウグ

ンリザードは、もう貴様の望んでいた敵ではない！私は既に魔王の忠実なる

僕！私の意志は信念は、もうこのシヨウグンリザードには存在せぬ！」

そう遠くの丘から大声で言ってきた。どういことだかは分からないが、要

するにもう、今のシヨウグンリザードにはただ生きるために、ただ

強いもの

と真っ向から戦いがために見逃したあのシヨウグンリザードではないと自分

で言っているわけだ。それでも…！

「ザック」あんただって武人なんだろう！そうじゃないとあんなことは…俺を

過ちに気付かせ、もう一度真っ向から戦うチャンスを与えたりなんかしない

はずだ！いったいなにがあんたをそんな風にしたんだ！」

それでも未だ、弓矢隊の攻撃は止んだものの、ブレードリザードの猛攻が続

いていたため、一瞬たりとも気が抜けない。

「シヨウグンリザード」何度も言わすなあ！私の意志は魔王様の意思！魔王

様のためならば己の信念なんぞ、すぐにでも曲げて見せるわ！」

そういうことか！魔王の奴…昨日ザックが寝てる間に何かしやがったな！そ

うしなきや武人が簡単に自分の意志を曲げるものか！

「ザック」邪魔なんだよ！雑魚は引っ込んでやがれ！俺が用があるのはあい

っただけだ！武人の心を持った…揺ぎ無い信念を持った…頑固でただの負けず

嫌いで意地っ張りなだけのシヨウグンリザードなんだよ！散れええ！！回転

斬りいい！！」

「シヨウグンリザード」言っただけだ！諦めろ！もうそんな奴はいない！こ

こにいるのは魔王軍支配下の内の一人、土竜のシヨウグンリザードだ！貴様

の望んだ武人はもはや死んだ！」

「「ザック」死んでなんかいない！確かにあんたはそこにいる！そして少なく

とも俺に助けを求めてる！それだけは分かる！」

「「シヨウグンリザード」誰が人間風情の助けなど受けるかあ！貴様も早く野

たれ死ぬがいい！」

くそっ！くそおおお！！誰だお前は！誰だ！武人のプライドをそんな簡単

に踏みにじる奴はあ！！

「「シヨウグンリザード」相手はたかが一人だ！量で押し切れ！何人犠牲にな

ろうと構わん！これは魔王様のためだ！」

くそっ…駄目だ…流石に多すぎる…このままじゃ…あいつに会う前に負けち

まう…

「「???」押し流せ！激流！《アクア》！」

誰かがそう唱えると、ザックを避けるように水流が流れ、周りにいたりザー

ドマンたちをいとも簡単に押し流してくれた。

「「???」構ええ！撃てええ！！」

その号令とともに一斉に銃による射撃が行われる。

そうか…忘れてたな…こちらにも俺の友達以外に…

「「クラウド」周りの敵は任せてください。リーダー。」

「「ミランダ」なんだい？派手なパーティーするんなら呼んでおくれよ。」

仲間がいる！

「「シヨウグンリザード」チィー！！さつさと始末しろ！たかが数人増え多だ

けで…」

「「子分」姉御ー！大砲の準備が出来ました！いつでもいけます！」

「「ミランダ」こら！私のことはキャプテンって呼べって…いや…今はそっち

のほうがいいね。射撃体勢で待ってな！私の号令で一斉発射だよ！」
気が付けばミランダの後ろには軽く50人は超えるほどの人が、銃やら大砲

やらを構えて待っていた。

「「ザック」みんな！クラウド！」

「「クラウド」因縁の相手なんだ。きちんと決着をつけないと…もちろん横槍

は入れさせませんよ！」

「「ミランダ」言っただろ？賊ってのは義理堅いんだ。一生賭けてでもこの恩

は返させてもらうよ！」

いいことはやっぱしたほうが良いな…必ず返ってくる。どんな形でも、その

見返りってのはな！

「ありがとう！二人とも！クルーのみんな！一気に勝負を仕掛けるぞ！」

全力でシヨウグンリザードに向かって駆け出す。ある程度はクラウドさんが

倒してくれるが、倒し損なった敵もいたため、そいつらを斬り払いながら速

攻で間合いを詰めた。

「「シヨウグンリザード」流石だな…それでこそ勇者、勇ましき若き勇者だ！

我が全霊の剣で応えよう…来い！」

「「ザック」ぜりゃああああ！」

凄まじい剣撃の応酬。お互いに一步も引かない、譲れないという思いのみで

ぶつかり合う。そこにあるのは《負けたくない》…その思い、その

意地だけ

だった。しかし…

「「ショウグンリザード」いいのか？私なんかの相手をしていて…このままで

は国民がどうなることか…」

入れ替わり立ち代りで登場するこいつが、二人の決闘を邪魔してくる。

「「ザック」知ったことかよ！それにみんなが食い止めてる！後ろを気にする

必要なんかないんだよ！」

「「ショウグンリザード」フハハハハ！それが勇者の台詞か！弱き者を助け

ずして勇者を名乗るか！所詮は貴様も屑のような人間だと言つことだ！」

無視だ！こいつの言ってることはショウグンリザードが言ってることじゃない！

い！

「「ショウグンリザード」どうした！剣の動きが鈍いぞ！貴様はその程度の覚

悟で私に挑み直したのか！」

「「ザック」誰が！絶対に負けられない！あんたを倒さなきゃいけないんだ！」

そう言つて再度剣撃を加える。なんとかショウグンリザードの言葉で揺らぐ

心を抑えてくれる。しかし、やはり体力の差がまた現れた。一度剣を弾き、

間合いを取り直す。

「「ショウグンリザード」どうした？もう息が上がってるじゃないか。そろそ

ろ大技で決着をつけんと負けてしまふぞ？」

くそおおお！！うるせえ！その声でそんなこというんじゃない！

「「????」ザック…」

どこからともなく声が聞こえる…

「「????」ザック…よく…聞け…」

この声は…！シヨウグンリザード！どういうことだ？目の前であいつも話しているのに…

「「シヨウグンリザード」貴様の剣、しかと受け止めた。今度こそ迷いは無い

ようだな…」

当たり前だ！さっきから何度もあいつに揺さぶられてるが、あなたとクラウ

ドさんの言葉で俺は剣を握られるんだ…

「「シヨウグンリザード」私が自我を取り戻すことはもう無い…このままであ

れば私は…生きることが出来るかも知れん。だが…武士として…一族を率い

るものとして生きていくことは出来ない。そうなることだけは避けたい…こ

んなことを頼めるのはザック、貴様だけだ…どうか、どうか私を武士として

死なせてくれ…それが私の最後の望みだ…頼む…」

最後にそう、言い残してその声は聞こえなくなつた。

「「シヨウグンリザード」さあ！見せてみな！お前の大技を！最強の剣技を！」

完全に誘ってやがるな…いいだろう…見せてやるよ！

「「ザック」これが俺が使える最強の剣技だ！食らいな！」

そう言つて剣を後ろにしまつように構える。その途端、シヨウグンリザード

が一気に突っ込んできた。

「「ショウグンリザード」馬鹿が！その時を待ってたんだよ！死ねえ！」

そう言い、剣を振り上げた。

「「ザック」悪いな…お前の予想通りじゃないぜ…俺が応えた最強の剣技は…」

お前なんかの望む技じゃなく…ショウグンリザードの望んだ技だ！」

「五月雨斬りい！！！」

その瞬間、凄まじい剣撃の嵐を打ち込んだ。

「「ショウグンリザード」なに！四聖剣じゃないだと！？」

そのまま連撃を加え続け、最後に真っ直ぐにショウグンリザードの胸を深く

突いた。

ロード&ナイト 第十六章

～ロード&ナイト～

第16章 闇の波動！

「「ショウグンリザード」何故だああああ！！貴様は確かに最強の剣技とおお

お！！…魔王様ああああ！！申し訳ありませんううう…」

その捨て台詞と同時にショウグンリザードの体から黒い霧のような物が溢れ

出してきた。しかし、それは体から離れると同時にまるで空気にもなった

かのように、空の色に溶けていった。

「「ショウグンリザード」よくぞ私を武士として死なせてくれた…有り難う。

若き勇者よ…」

気が付けば、目の前にいるショウグンリザードはいつも通りの、威厳溢れる

姿に戻っていた。しかし…その胸には…突き刺したままの剣が…

「「ザック」ごめんよ…！でも！確かにあんたに見せたぞ…！俺の…最強の剣

技…だから…もう一度、もう一度真剣に戦いたいんだ！死なないでくれ！」

そう、涙ながらに語るザックだったが、ショウグンリザードは

「「ショウグンリザード」ハハハハハ！…すまないな。残念ながら私はこの程

度の傷では死なん。リザードマンの一族は、魔物というものはかなり丈夫な

のでな…」

そう言つて胸に刺さつた剣を引き抜いた。

「「ザック」なんだよ！死なないんなら変なこと言つて脅かすなよ！」

と虚勢を張っている。さっきまで泣いてたのはどのどいつやら…

「「ショウグンリザード」確かに私は生きている。武士として、一族を率いる

者として…だが、私は魔王の命を果たすことが出来なかったのだ。

その意味

は分かるな？…」

そう言つた途端、空が暗くなり…いや、暗くなつたなんて言葉では表現でき

ない。まるでこの世の終わりでも来たかのような、紫とも黒とも言えない色

に空一面が染まつた。

「「ザック」なんだ！？一体どうなつたんだ！？」

うるたえるザックを宥めるように

「「ショウグンリザード」魔王は、命令を下し、もし、その命令をした者が何

らかの理由でその命を達成できなくなつた時、その役立たずを始末する…つ

まり、私は魔王にとって不要な存在というわけだ。」

そんななんとも言えないような色の空から、どす黒い何かが真つ直ぐにこち

らへ向かつて落ちてくるのが見えた。

「なんだあれは…！」

「「ショウグンリザード」あれは、その命を果たすことが出来なかつた者への

制裁、といったところだろうか…さあ…早く私から離れるのだ、若き勇者よ、

ここでは巻き添えを喰う。」

そう言つてザツクの背を押して、離れさせようとしていた。

「ザツク」待つて！それじゃせっかく生き残れたのに…元に戻つたのに意味

が無いじゃないか…！」

「シヨウグンリザード」せめて、私を武士として生きさせてくれて有り難う。

だが、私の命はここで尽きるしかない。魔王の制裁は、我々魔物には避ける

ことが出来ないのだ。」

だんだん黒い閃光が近づき、辺りがさらに暗くなつたのが分かる。

「ザツク！早く離れるんだ！シヨウグンリザードのせめてもの氣遣いを汲み

取つてやれ！」

「ザツク」くそお！嫌だ！せっかく元に戻れたのに！」

まだ離れる氣が無いようだが、もうこれ以上近づいたら危ない。

「シヨウグンリザード」さっさと離れんか！！貴様は蛮勇ではないはずだ！

若き勇者よ、いや！ザツクよ！魔王を倒すのだ！貴様にしか出来ない！さらば

だ…！」

その言葉と共に、黒い閃光が降り注いだ。凄まじい衝撃と轟音、そして粉塵

が原因で二人の姿が見えない。まさか…二人とも直撃したか…！しばらく経

つと、煙が晴れてきた。そこには地面に倒れこんだ二人の姿…

「シヨウグンリザード」何故…助けた…命を危険に晒してまで…」
どうやら間一髪のところであつたようだった。まったく…

冷や冷や

させやがる…ま、俺もその場に居合わせたらそうしてただらうけどな。

「「ザック」よかつた…死んだと思った…ギリギリセーフってどこか…」

ザックがシヨウグンリザードに思いっきりタックルでもしたのだから。着弾

地点の凹んだ大地から離れた位置で、ザックがシヨウグンリザードの上に乗

ったまま、硬直していた。今になって怖くなったか…

「「シヨウグンリザード」今一度問う。ザックよ、何故、命を賭けてまで私を

助けた…」

「「ザック」へ？いや…なんでって言われても…考えるよりも先に、体が動い

たっていうか…助けなきゃって思ったっていうか…」

「「シヨウグンリザード」フ…フハハハハ！…やはりお前さんは面白い！

魔物である私を、助けなければならんと思ったか…やはり私が見込んだだけ

はあるようだな…ハハハハハ！…」

そう言つてとても楽しそうに笑った。

「「ザック」なんだよ！そんなに笑わないでもいいだろ！」

フフフ…悪いな、シヨウグンリザード。こいつは俺の映し鏡みたいな奴だ。

だから、こいつはそういう奴なんだ…後先考えず、ただ困ってる奴を助けた

かつただけだ。

「「シヨウグンリザード」ハハハ…すまない、すまない…しかし…そろそろど

いてもらってもいいだろうか？このままでは私は起きられんぞ。」そう言ったシヨウグンリザードの言葉にザックが反応した。

「「ザック」！そうだ！忘れてた！まだ飛んでくるかもしれないの

に！」

そう言っただけで起き上がり、空を見上げるが、そこにはいつも通りの空が広がっていた。

「シヨウグンリザード」心配することはない。魔王の制裁は魔物が動くこと

ができる。だからこんなことは予想していないのだ。まさか勇者が体を張っ

て魔物を助けたなどと夢にも思わない。

そういうことか…しかし、それで死を確認せずに断定するなんて、魔王もか

なり甘いな…まあ、動けないんだっただけな…

「ザック」ホント！良かった…あー…でも…どうしようか…」

そう言っただけで後ろを振り返る。ともう攻撃はしていなかったが、既に街はボロ

ボロだった。

「シヨウグンリザード」我々リザードマンが始めたことだ。さらに私は約束

まで破っている。非はこちらにある。直接国王に話そう。」

しかしなあ…そうは言っても…色々と言いたい事があったが、どう見ても聞

く気が無かったので、仕方なく国王の元へ案内した。

「国王」つまり…そなたがこのリザードマン達の長であり、今回の一件の首

謀者である…そういう事かね？」

国王に向かって、シヨウグンリザードは今回起きたことを事細かに説明した。

国王は、玉座から動かずに、しかし穏やかな表情でその話を聞いていた。

「えっ…ですね…要するに、彼が望んでやったことではないんです

よ。その

…なんだっけ？魔王の放った黒い波動だったっけ？それによって操られてそ

うするように仕向けられたんですよ。だから…その…彼に…シヨウグンリザ

ードさんに本気で街を破壊する意思は無かったというか、なんというか…」

必死にシヨウグンリザードの弁護をするが…どう聞いても苦し紛れだ。こん

な変な弁解を国王が聞く耳持つはずが無い。そう思っていると。国王はニコ

リと笑い、緩やかな口調でこう言った。

「国王」そうか…つまり、シヨウグンリザード。そなたが望んでいたことで

は無かった。それは真なのか？」

シヨウグンリザードの返事は…頼む！素直に、素直に答えてくれ！

「シヨウグンリザード」はい、確かに私が望んで行ったことではありません。

しかし…私がこの国を襲い、崩壊寸前まで追い込んだのも事実。一族の命は

救って欲しい。だが、全ての者を許すことは無い筈だ。故におこがましい事

ではあるが、どうか私の命を持って償う、みなは今後は触れないでいて欲し

い。後生だ。」

そう言つて膝をつき、深々と土下座をした。

「ザック」え！ええ…！いや…あ、あの…どうか…この…」

完全に動揺しているザック。そんなザックを横目に、国王は

「国王」ふむ。確かにそうだ。此度の襲撃によって、国は崩壊寸前、国民に

は揺ぎ無い恐怖が植え付けられただろう。ならばはじめはつけねばなるまい。

しかし、そこまで頼み込まれるとはな…どうしたものか…」

口に手を当て、物難しそうに考え事をしている。が、はつきり言つてこつち

は気が気じゃない。もし、国王が首を横に振ればそれで全てが終わる。俺も

ザックもただただ祈るのみだった。

「国王」そうじゃ！いいことを思いついた。ショウグンリザードよ、顔を上げてください。」

「ショウグンリザード」はい。」

そう言つて、正座のまま国王の方を見る。すると国王は、嵐のような険しい

表情をし、

「国王」そなたや、リザードマン達への怒りや悲しみ、憎しみを持った国民

が多い。もし、そんな中にそなた達が行けば、すぐに非難轟々となる。」

そこまで言い、今度は太陽にも似た笑顔で、

「国王」そんな中で、この国を再び、人が住めるようになるまで再建するこ

と。それが犯した過ちへのけじめだろう。よろしいかな？」

そう言つた。

「ショウグンリザード」しかし…それでは私の気が治まりません。」

そんなことを言うショウグンリザードに対し、極めて笑顔で

「国王」確かに、私がそなたの首を刎ねることは簡単だ。しかし、そんなこ

とをしてしまえば、再建にかかる時間が延びてしまう。だから、一

刻でも早

く、再建をして貰った方がこちらとしては得なのだ。分かるかね？」
そう言ってこちらに目配せをしている。ああ…なんて心の広い方なんだ…

「シヨウグンリザード」フ…もしかすると、私は人間というものを誤解して

いたのかもしれないな…分かりました。一族総出で、再建に当たらせていた

だきます。」

そう言ってもう一度、深々と頭を下げた。

「「国王」なに…我々とて、魔物というものを誤解していた。これからは共に

力を合わせるべきだ。そうは思わんかね？」

そう訊ねると、シヨウグンリザードは無言のまま小さく頷いた。

「「ザック」流石は国王だ！あんたすげえよ！」

と本人は国王に感謝しているのだろうが…

「ザック！いい加減にその言葉遣いどうかしろ！相手は国王だぞ！」

と叱った。すると国王がこちらを宥め、ザックに

「「国王」私は気にはしていないが、そういうことを気にする者もこの世には

たくさんいる。気をつけなければそのうち、牢獄送りにされるかも知れんぞ。

いいのかい？そうなってしまっても。」

と優しくザックに説教をした。いやもう、仏のような人だ…流石にザックも

身にしてみたようで、きちんと謝っていた。

「「シヨウグンリザード」では、これにて。私は皆と共に王国の復興に当たります。」

そう言って、王宮を出て行った。

「「ザック」あ、待ってよー！」

そう言って学習能力の無いザックが、シヨウグンリザードを追いかけた。

ロード&ナイト 第十七章

～ロード&ナイト～

第17章 未来への架け橋――

「国王」おお！勇者ザックよ、少し待ちなさい。」

そう言つてザックを引き止める国王。

「ザック」そなたにも感謝しておる。そなたのおかげでこの国は救われた。」

そう言つてザックに深々と頭を下げるが、

「ザック」いえ…はつきり言つて俺…自分は何もしていないので…クラウド

さんの、ショウグンリザードの、ミランダさんや定期船のクルーのおかげです。」

そう言つと国王は困つた顔をして

「国王」ふむ…そうか…ならば、そのクラウドとミランダとその仲間にお礼

を言わねばならんが…その者たちは今、どこにいるのかね？」

そう訊ねてきた。あ…そういえば…クラウドさんはあの後直後に、「クラウド」すまない。私のロードはあまり時間が無いそうだ。

先を急がせ

てもらふよ。それじゃ、また縁があつたら会おう。」

そう言つて別れ、ミランダは、

「ミランダ」すまないね。定期船を遅らせるわけにはいかないから、もう行

かせてもらふよ。でも、私に出来ることがあればなんでも手伝うからね！」

そう言つて定期船に戻つたのだった…二人ともいないな…

「「ザック」えーっと…その…二人ともすぐに戻って来ると思いますが、戻っ

てきた時にでも…」

その言葉を聞いて、国王は

「「国王」そうか…二人がいないのであれば、そなたが代表になるべきではな

いかな？」

そう言ってきた。本当にこの国王は頭が切れる。

「「ザック」いや…でも!…」

「ザック、素直に認めな。国王はお前を認めてんだよ。」

事実、ザックが今回、動かなければどうなっていたか分からないのだから…

「「国王」そうだ…せめて何かお礼がしたい。なんでも言うておくれ。」

そう申し出てくれた国王。そうか…だったら…

「「ザック」あの…それじゃあ…二つだけお願いしてもいいでしょうか?」

二人とも頼みたいことは決まっていた。

「「国王」二つか…面白い者達だ…申すがいい。」

そう言って贅沢にも二つの願い事を聞いてくれた。

「「ザック」えっとですね…」

「「国王」なるほど…一つ目は既に叶っている。では、早急に二つ目の願いを

叶えよう。」

そう言っただけで、願いを聞き入れてくれた。その後、お礼を言い、足早に王

宮を出てシヨウグンリザードのところに走っていった。

「「ザック」おーい!シヨウグンリザードー!」

呼ばれたことに気付いたのか、ザックのほうを振り返り、

「「シヨウグンリザード」ザックか…どうしたのだそんなに慌てて

…」

「ザック」シヨウグンリザード達が街を修復し終わったら、みんなここに住

んでいいって！国王から許可が下りたよ！」

そう、嬉しそうにシヨウグンリザードに喋りかけるザック。

「シヨウグンリザード」それは有り難いが…流石に我々もそこま

で世話にな

るわけには…」

少し困った表情をしてシヨウグンリザードは答えたが、ザックはどうしても

ここでみんなと暮らして欲しいと、駄々をこねる子供のように言っている。

すると…

「国王」親しき仲にも礼儀あり。ですぞザック殿。」

そう言いながら国王がやってきた。俺が言った時は言うこと全く聞かないく

せに…こいつは国王のときはしっかり言うことを聞きやがる…

「国王」それはそうと、シヨウグンリザード殿。どうかこの国に残ってはい

れぬだろうか。我々が魔物と人間の新しい架け橋になろうぞ。」

「シヨウグンリザード」そういうことですか…分かりました。それでは我々

も尽力を尽くさせてもらいます。」

その言葉を聞くととてもにやかな笑顔で頷き、王宮へと帰っている

たが、ザックがそれ呼び止め、

「ザック」すみません、二つ目の願いのほうは…」

そう聞くと、もう一度にニッコリと微笑み、

「国王」大丈夫じゃ、早急に当たらせておる。そなたは本当に優しき者だ。」

そう言々と今度こそ王宮へ帰っていった。その背中にザックはお辞儀をして

いた。

「「ショウグンリザード」国王に何を頼んでいたのだ？」

「「ザック」ああ…それは…」

町外れ…少し前までリザードマン達がアジトとして使っていた洞窟に行く途

中の道、そこにショウグンリザードを連れてやって来た。ザックがお願いし

た二つ目の頼み事とは…

「「ザック」この人です。この人の供養と埋葬をお願いしました。」

そう言つて、見せたほうにいたのは…以前置いていった名も無き勇者の遺体

だった。

「「ショウグンリザード」この者の供養を…ザック、そなたは自分の願いをせ

ずにこの者のために国王に頼んだのか…優しき心を持っているな…」
そう言つてザックのほうを見直した。

「「ザック」いいんです。自分の中でも心残りだったし、それに…
結局この人

に何もしてあげることが出来なかったので…別に欲しい物もなかったですし！

これが一番して欲しかったお願いなんで！」

ザックも少しずつ変わりつつある。ただの世間知らずの少年だったザックが、

今では周りのことも気遣える優しさも持っている…なんていうか…
子を見守

る親の感覚見たいなもんなのかな…嬉しいけど、ちょっと寂しい…

「「ショウグンリザード」ザック、我々リザードマン一族は互いを認め合った

時、親しき仲として相手を認める。私はザック、お前を友としたい。

「急にそんなことを振られたので、ザックは少し戸惑っていたが、内容を理解

するととても嬉しそうな顔をして

「「ザック」もちろん！よろしくお願いするよ！」

「「ブライ」私の一族での本当の名はブライ、我が名を示してザック、そなた

を真の友とする。」

そう言つてザックの胸に拳を当てて言った。ザックに同じようにしてくれと

言い、

「「ザック」俺の名前はザック、我が名を示してブライ、そなたを真の友とす

る。これでいいのかな？」

そう言つてブライの胸に拳を当てた。すると

「「ブライ」これからは互いに親友だ。私が出来ることならば全ての力を持つ

て手助けしよう。」

そう言つて気高き武人、ブライは残りの仕事があると言い、町に帰つていつ

た。その後、その遺体はきちんと埋葬されたそうだ。時間も結構いい時間に

なつてきたし、そろそろ止めて飯でも食うか…そついや…何か忘れてる気が

するけど…ま、いいか！ザックを宿に帰し、セーブをして下の階に降りた。

あれ？そついや物音が聞こえない。部屋も暗いし…あれ？なーんかこのパタ

ーン前にあつたな…リビングに行くと、部屋が暗い。電気を付け、

テーブル
を見ると、またしてもメモが…

「

和輝へ

おかえりなさい、和輝。実は今日は結婚記念日なので二人だけで外

食にいつてます。ゴメンネ 記念日ぐらい夫婦水入らずつてのもい

いわよね？お弁当代置いておくから弁当を買ってきてね。
それじゃ、後はよろしく！

母より

P.S

卓也の分も買っておいてね

「

まったく…そこまで期間空いてないのに、また夜の道を一人歩きか
…しょう
がない。行かなければ飯は無い。それに今回はもし万が一、いや億
が一出た
としてもアイカムがある。ザックの言葉を信用しよう。そう思って
外に出よ
うとしたとき、

「和輝！なんなのよコレ！ホントにびっくりしたわよ！」

と、急に通信が入った。理沙か…てことはエンカウントしたのか…
そう思っ

ていると

「和輝！コレ面白れえな！しかもこんな機能まで！便利だな。」
声の主は猛だな。こいつだけ状況を楽しんでるな…

「お前ら、あんまはしゃぎすぎるなよ。はたからみりゃただの馬鹿だ。」

さらに真志も加わる。

「あんまり無茶すんなよ。それとおもちゃじゃないから人に向かつて使うな

よ！」

「はいはい、分かってる。」

「大丈夫だよ。そこまで馬鹿じゃねえ。」

あれ？真志から返事が無いな…もう切ってたのか…でも…なーんか
おかしい

な…そんなことする奴じゃないのに…

「じゃ、また明日。学校で。」

そう言って通信を切り、家を出た。前回同様、行きは何事も無かった。

『このまま帰りも何も起きないでくれよ…』

そんなことを思いながら、弁当片手にうちを目指して帰り路についた。前と

同じならあの場所、街灯と街灯の、明かりの届かない場所から出てくるだろ

う…足早に通り過ぎると何事も無かった…

『よかった…よし！早く家に帰ろう！』

そう思った矢先、やっぱり登場した。なんだかなー…俺がフラグ立
てたから

か？仕方ない…さあ…いつぞやのリベンジマッチだ！

「あーもしもし？ロード？戦うならサポートするよー。」

あ、そういうシステムなのか…じゃあ、改めて…

「ゲームスタートだ！」

ロード&ナイト 第十八章

「ロード&ナイト」

第18章 再戦！リザードマン！

「ロード、とりあえず説明するから。」

説明って…相手は待ってくれそうにないんだけど…

「とりあえず、今何装備してる？」

「装備？いや、何も装備して無いけど…」

「出かけるなら剣ぐらい装備しとけよ！」

「いやいやいや！剣とか持ち歩けるか！銃刀法違反になるわ！と言いたかった

がこいつらの世界では普通だったな…

「じゃあ剣技は使えないか…まったく…」

持ち歩けないがこいつの反応は腹立つ…しかし、そんなことを考えてる間に

モリザードマンは容赦なく俺を攻撃してきた。ただの引つ掻きだが、ただの

人間が喰らえば恐ろしいことになる。紙一重で避けし続けるが、遂に背中が

壁にぶつかる。

『やばい…！！このままだと死ぬ…！！』

腕を構えて防御するが、恐らく意味は無いだろう。次の瞬間、腕が切り裂か

れた感覚が脳を直撃した。

「痛っ……くない…？」

腕を見ると、確かに攻撃を受けたはずなのに、腕はきちんとそこにくっつい

ていて、しかも血はおろか、傷一つついていない。どういうことだ？

「ロード、今攻撃受けたね。257ダメージもらったよ。」

ダメージ？ということは…

「もしかして今、俺の受けた攻撃って…」

「全部ダメージ計算されてるよ。アイカムをつけてる間は、受けた外的外傷

は全部ダメージに計算されるから。」

そういうことか…ついに俺がゲームになったか…なんだかもう、何
が起きて

も驚かないつもりだったが、流石にこれは驚いた。

「それじゃ、俺の残りHPは？」

「257喰らって…2580だな。」

意外と俺のHP高いな…とは言っても…一応、殴り返してみたがザ
ツクの情報

によると、15ダメージ。素手でそのダメージなら結構すごいもん
だが、相

手のHPは1400もあるらしいので蚊ほどのダメージ量だ。この
ままならHP

の減り方だけで見ると、圧倒的にこちらが不利だ。

『やっぱ逃げるしかないか？…』

そんなことを考えていたら

「そついや魔法使えるよ。」

そついうことはもつと早く言っ
て欲しい！！今までちまちまカウ
ンター
の要

領で殴ってた自分が馬鹿らしい…一旦、距離を置き

「赤き力よ…火の力よ！《ファイヤ》！」

そつ、唱えて火球を手からリザードマンめがけて放った。見事命中
！つてそ

ういや、ファイヤだけ言うつもりだったのに何故か最初の文まで勝
手に唱え

てしまった。なんでだ？

「最初の魔法詠唱は、必ず詠唱の台詞を言わないといけないから早めに全部

使つといたがいいよ。ちなみに今のダメージは354だったよ。」
そういうことか…というかまさか本当に魔法が使えるなんてな…夢
みたいだ

が、夢じゃないから困る。とりあえず後、2、3発唱えたら倒せる
か？そん

なことを考えながら、両手を構え

「青の力よ…水の力よ！《ウォータ》！&《ファイヤ》！」

そう言つて、両手から別々の魔法を放った。見事、両方命中。案外
魔法つて

のは簡単なもんだ。そんなことを思っていたら予想以上に接近して
いたりザ

ードマンから反撃をもらつてしまった。

『予想以上に気が抜けねえ…ザック達はいつもこんな極限状態で
戦つてん

のか…』

そう思うと、少しザックのことをすごいと思った。少しだけな。

「黄の力よ…雷の力よ！《サンダー》！」

今度は手から雷を飛ばして攻撃、よし！あと一息だ！

「とどめだ！白の力よ…氷の力よ！《アイス》！」

氷塊を手から放ち、見事リザードマンを倒した。

「よっしゃあ！見たか！リザードマンめ！」

そこに倒れているリザードマンに向かって高らかに言った。

「ロード…何かあったのか？」

不思議そうに聞いてくるザック。まあ、そうだろうな…普通、俺は
こんなこ

とは言わないからな…しかし…戦闘が終わって気付いたが、かなり
息が切れ

ている。結構きついもんなんだな…

「ロード、初勝利で浮かれてるとこ失礼だけど、早めに回復したが良い」

よ、残りHPがかなり危ないから。」

「もしかして…息が切れてるのって…そのせいなのか？」

「恐らくはね。俺は人間じゃないから分かんないけど。」

一応、容姿は人間だろ…まあ、いつちばん最初に自分がゲームキャラである

ことは認めてたけども…まあいいや、さっさと回復して帰ろう。

「兄貴、こんなとこでまゝた何してんの？」

デジャヴか？デジャヴなのか？そこで何でまたお前が登場する！

「拓也か…やつとりザードマンを…倒したんだよ…」

そう説明しながら倒れてるリザードマンを指差すが

「何？またやってんの？もう演技はいいよ。」

と冷たくあしらう。そこでちよつとイラッとした。

「お前…気付いてたんじゃねえのかよ！」

「何に？」

薄々気付いてくれてるもんだと思ってたんだけどな…信頼した俺が馬鹿だつ

たのか？いや…それが普通の反応か…俺がもうおかしいんだよな…

「このアイカムだよ…ゲームをプレイしてる間は…外せないんだ…

それと、

これのせいで色んな…魔物に襲われるようになったんだよ。」

そう説明するが、俄かには信じ難いのか、まだ疑り深い目で見ている。

「ロード、さっさと回復しなよ。どうなっても知らないよ。」

「ああ、分かってるって。ちよつと待て…すぐ回復するから。」

ザックもザックで空気を読まないし…

「誰と話してるの？もしかして一人芝居？」

信用する気の無い正常な弟。あ、そうか！回復魔法を使えばいいのか！

「見てな、実際に魔法を使ってやるから。」
そう言う

「いいよ！恥ずかしい！いい年こいて厨二病？」

と必死に俺を止めようとする。そんなことはお構い無しに

「緑の力よ…森の力よ！《ヒール》！」

そう言ったとたんに、自分を美しい緑の光が囲み、体を癒してくれたのが分

かった。流石に息切れも治ったな。

「え…嘘…今どうやったの？」

流石にそんな現象を目の当たりにして動揺が隠せないでいる拓也。

「だから魔法だって。ホントに使えちゃったりするの。」

と少し面倒臭いがもう一度説明した。

「さ…流石に冗談だと思ってたよ…まさか本当に使えるなんて…すごいや…」

結構びっくりした…」

久しぶりに拓也からほめられたせいで少し天狗になった俺は

「もっと誉めな、大体こんなもん使える人間なんていないんだから。」

と少し見栄を張った。

「NASAに行ったら？多分、大注目されるよ。」

と、半ば本気の目で俺に話しかけてきた

「二度と帰って来れなくなるよ。それにアイカムがなきゃ意味が無いしな。」

流石に人体解剖とかは御免なので正直にネタばらしした。その後は他愛の無い話をしながら家に帰り着いた。意外と激しく動き回ったにも関わらず、弁

当二名は無事生還していた。

「ほら、こっちお前の分。」

そう言っ

て拓也の好きな生姜焼き弁当を渡す。俺はカツ丼。崩れな

かったの

が不思議だ…ちゃっちゃと食事を済ませ、部屋に戻っていった。そしてテレ

ビを見ると、予想以上の速さで王国が復元されていた。リザードマン一族：

恐るべし…ほぼ全ての場所が元通りになっており、残りは城壁や石畳だけに

なっていた。そしてザックを見るとブライとなにか話していた。

「ザック。何の話をしてんだ？」

「「ザック」ああ、戻ってたんだ。おかえり。それでえっと…そうそう！今、

ブライが一族に伝わるっていう剣技を覚えてくれてたんだ。」

剣技…しかもリザードマン一族伝統の、か…そりゃ期待できそうだな…

「「ブライ」今ので全てだ。見事リザードマンに伝わる剣技、《地竜斬り》を

使ってみせよ。」

地竜斬り…やべっ…今までの中で、一番厨二臭くて強そうな技だ…

「「ザック」はあああああ！大地よ…我に力を！」

そう言っで力を溜めるザック。しかし、確かに俺には地面からの力がザック

に、剣に竜が天に昇るように滑り込んでいくのが見えた。そしてザックが剣

を腰の辺りで横に構え

「「ザック」地竜斬りい！！ぜやあああああ！！」

素早く剣を振り抜き、連続の刃を振るった後、剣を地面に刺し、

「「ザック」はああああ！！」

そう言っで剣を前に突き出すように引き抜くと、地面が盛り上がり、衝撃波

が地面を割って吹き出した。その衝撃波は、まるで地の奥底に眠っ

ていた竜

を呼び覚ましたかのように、竜の形をかたどり、天高く突き上げた。
「「ブライ」お見事。流石は私を倒した勇者だ。」

そう言っただザックの奥義習得を祝ってくれた。流石に伝統の技だけあつて、

かなり威力も高そうだ。

「「ザック」やったよ！一発で出来た！かけー！地竜斬りかぁ…
ホントにあ

りがとうブライ！これからもどんどん使わせてもらつよ！」

そう言っただお礼を言っているが…相当嬉しかったのか、気に入ったのか、満

面の笑みを浮かべている。しかし、そろそろ俺のほう時間がやばいな…

「ザック、悪いが実践使用はまた明日だ。俺は今日はもう寝させてもらつ…

…あ…！やばい…！」

「「ザック」どうしたんだ？」

完全に忘れていた！そういえばみんなを宿に置きっぱなしにして今まで行動

してたんだっただ！しかもリザードマンの襲撃もあつたし、大丈夫なのか…？

流石に慌ててザックを宿屋に向かわせた、みんな…無事でいてくれよ…！！

ロード&ナイト 第十九章

（ロード&ナイト）

第19章 陰り……

「「宿屋」いらっしやいま……」

「「ザック」みんな！無事か！？生きてるか！？」

店の主人の接客を聞くよりも早く、大声で呼びかけた。もちろん宿に泊まつ

てる人間も居たからかなり驚いていたが、慌てた様子のザックを見ると

「「宿屋」どうかなさいましたか？」

流石に声をかけるわな……

「「ザック」昨日、ここに俺の仲間を預けてたと思うんですけど、昨日の襲撃

の時は……グレイ達は……どこに × % ! ?」

落ち着け！！なんて言ってるのか俺でも分からん！！なんとか落ち着かせよ

うとするが……駄目だ……もういっぱいばいで周りが見えてない。

仕方ない

な……

「すみません。昨日ここにグレイ、エッジ、リーサというこいつのパーティー

の仲間を置いていったと思うんですけど、リザードマンの襲撃を受けた時

に彼らはどうなったか知りませんか？」

こらこら！店主の肩を揺するな！落ち着け！そんなことを思っていたらそれ

を見ていた他の客が、ザックを店主から引き剥がし、大人しくさせ

るために

ホールドアップしてくれた。助かる…すると店主は

「『店主』ハアハア…えっと…昨日のお客様でしたら昨日の夕方頃に各々店を

出て行きましたよ。なんでもザックには負けられないとか言いながら…」

そういうことか…連絡があつた時点でみんな自分のキャラを回収してたか…

良かった…けどこっちは良くねえ！！落ち着けザック！！

それから数十分後…

「『ザック』なんだ…そうだったのか…良かったあ…」

やつつつつつつと落ち着いたザックが冷静に話を聞いてくれて、皆の安否

が分かつて安堵していた。もう…いいよな…俺寝ても…

「それじゃ、ザック。今度こそセーブして寝るから。」

そう言つてセーブをし、ザックにおやすみと言うと普通に返事をしてくれた。

それじゃ、明日も早いしさつさと寝よう。そう思い、電源を切りベッドに潜

り込んだ。そういえば…各々動き出したってことは…あいつらの家にゲーム

が届いたってことか…本当にどうなってるんだろうな…このゲーム…今更考

えたところで何も変わりはないが、出所も不明、コントローラーの詳細も

不明、外箱や説明書、備品に至っては勝手に増えたり、書き直されたりして

るし…更には現実の世界に『ゲーム』をしている人間にしか見えない『敵がエ

ンカウントしたり、魔法やら剣技が使えるようになってしまったり

と、持つ

ているだけで自分の周りが滅茶苦茶になっていつてるのが分かる。
結局のと

こ、このゲームの目的は一体なんなんだろうな…今度、ザックに聞いてみる

か…というか、ゲームキャラが自分で考えてモノを喋るつてのもおかしなこ

とだが…あーもう…！考えたら考えただけ訳が分からなくなってい
く…さっ

さと寝よう…そしてさっさとクリアしてしまおう。

『そっついや…もし、俺がゲームをクリアしたら…ザックは……寝よう…』

もう…考えない方が良い…今の俺には結論を出すには早すぎる…どうせクリ

アすれば分かることだ…最後にそう思い、重たい瞼をゆっくり閉じた。

「和輝…ご飯できたわよ。起きなさい。」

いつも通り母親の声がする。いつものようにその声で起き、リビング
グヘ向か

う。やはりいつも通り父親と拓也は既に朝食を食べている。

「おはよう。そんでいただきます。」

そう言つて席に着き朝食を摂る。二人からは朝の挨拶の返事、母親
からは朝

食を摂ることに対する返事が聞こえた。今日は昨日の罪滅ぼしなの
か、えら

く家にしては豪華な朝食だ。日本の心白飯に、何故か魚の塩焼き、
俺はそこ

まで魚に詳しくないからこれが何の魚だかは分らんが、とりあえ
ず白身魚

であることぐらいは分かった。それとお浸し、煮物、卵焼き…など

など…家

でこんな畏まった和風の朝食が出ることは滅多に無いからすぐに分かった。

いつもは飯と味噌汁とポテトサラダ、あと運がよければ美味しそうなおかず

が出る。まあ、家の朝食のメニューなんて聞きたくもないか…しばらく飯を

食っていたら、いつも通り、というか家では朝食の時はニュースが定番なの

で嫌でもその速報を見なきゃならない。

「昨夜未明、〇県在住の…」

覚えているだろうか…恐らく名前は分からなかったが、昨日俺が埋葬してや

った勇者のロードであつただろう人間の惨殺死体が見つかったというものだ。

怖いもんだな…その事件がではなく、俺がその状況に慣れてしまったことに

対して、だ。いつも隣り合わせの死の恐怖。それはこの世を生きる生物なら

全てのものに対して言える言葉だ。だが、俺の中で何かがぶっ壊れたのか、

そのニュースを見てもなんともしないどころか、何故そんな雑魚にやられ

たのかという小馬鹿にした感情さえ湧いてしまった。さつさと終わらせない

とやばいかもな…俺が……

「ごちそうさま。」

そう言っただけなら一番最後に食べ終わる俺が最初に食べ終わった。理由

はさつきも言っただけで、残りのみんなはニュースに釘付けになっ

てる。俺

は慣れてるからそのまま飯を食い続けた結果だ。二階に戻り、学校の支度を

して一応、アイカムでザックに連絡を取る。きちんと返事が返ってきた。よ

し…！行くか…

「行ってきます。」

そう言っ出て出ようとしたら、

「気をつけてね…最近物騒だから…なにかあったら大声で助けを呼ぶのよ。」

「分かってる。気をつけるから…それじゃ行ってきます。」

やっぱり心配になったのだろう。だが、大声を出してもソイツから逃げるこ

とはできないからな…むしろ戦いにくくなる。気をつけるけどな。

流石に通学路では出ないのか、それとただ運が良いだけなのか、魔物とは

遭遇していない。学校の校門にはいつも通り担任の姿、だがこちらに気付く

なり駆け寄ってきて耳元で小声で

「和輝和輝和輝…！何でお前の友達までつけてるんだ…！危ない代物なんだ

ろ…！？」

と言ってきた。あ、そんな解釈なのか…

「えつとですね…色々あってつけなきゃいけなくなっただけですよ。」

口からでまかせ。本当はあいつらが勝手につけただけとは口が裂けても言え

ない。なんとか理解…いや、無理やり納得したな…そんな無理をするなよ…

そのまま校門を過ぎると、珍しいことに真志の奴が前にいた。まだこっちに

は気付いてないし…久しぶりに驚かしてみるか…フッフ…

「よー！真志！何してんだー？」

そう言っと思いつき真志の背中をとんと押した。真志は数歩歩いた後止

まりこちらに振り返ると同時に

「だれだ…この俺を突き飛ばしたのは…」

そんな台詞を吐いた。

「あ、な、なんだ…和輝か…お、驚かすなよ！心臓止まってもいいのか？」

次に喋った言葉はいつも通りの真志だった…とりあえず…

「あ、ああわりいわりい。いっつもやられてるからその仕返しに…みたいな

感じだったんだけどな。やりすぎたか？」

とりあえず話をあわせた。その後は他愛の無いいつも通りの話だけになった。

教室につくとまあよく注目を集めること。このアイカム、目立ちたい奴にく

れてやるうか？遅れて理沙、彼女も友達から質問攻めにあっている。猛は隣

のクラスのはずなのに、何故かうちのクラスに来ている。本人曰く、居場所

が無いそうな…しかし非情にも朝休みの終わりを告げるチャイム。

担任が入

ってきた。それから授業がいつも通り始まった、が…

どう考えても朝の真志の様子はおかしい…一瞬、たった一瞬だった

が、真志の姿が恐ろしく見えた。だが、その後、俺を見るなり元に戻った。一体なん

なんだ？あの変貌っぷりは…なにかあったのか？

だれだ…この《俺》を突き飛ばしたのは……

絶対にそんなことを言うはずの無いあいつがそんな言葉を迷いなく放った。

しかし、それ以降真志にそんな兆候は現れなかった…が…心配だな…声をか

けてみるか…そう思い、放課後真志の姿を探すが、もう帰ったのか見当たらない

なかった。おかしい…何かがおかしい…本当に帰ったのか…？

『やっぱり、学校をもう一回探し回ってみるか…まだいるかもしれないし…』

日はまだ傾いてないが…流石に疲れる…久しぶりにこんなに学校を歩き回つ

た…え？なんでアイカム使わなかった？連絡が取れないんだ…後は…探し

てないのは…屋上か…まあ、いる訳ない…

ドゴオオオオオン…そんな爆音がすぐ上から聞こえた。上？一箇所しかない

な…！階段を駆け上がり、生徒立ち入り禁止の扉を開け、そこに広がる光景

を見た瞬間、俺は絶句した。

屋上のだ真ん中から赤い炎と煙が立ち込めていた。しかもその炎の周りに煤

が付いて汚れていることを見ると、恐らく爆発でもしたのだろう。

「ひいひい！！化け物だ！逃げろ！！」

そう言つて煙の向こうからうちの学校では有名な不良が引け腰で走ってきた。

そいつを捕まえ、

「おい！ここで何があつたんだ！？」

そう聞いた。不良とはいってもこんな状況だ。素直に何があつたか言つてくれ

「あい、あいつが…いきなり炎を…わああ！！離せ！逃げさせてくれえ！！」

おいおい…ほとんど錯乱状態じゃないか…！！まさか…魔物…！？いやそんな筈は無い。アレは俺みたいなロード&ナイトプレイヤーにしか見えな

ないんだ。こいつはアイカムをつけてないし、それにそんなゲームをするような奴

にも見えない。じゃあ一体何だつてんだ！？

「おいおい…さっきまでの威勢はどうしたんだよ…あ？俺をボコボコにする

んじゃないかったのか？」

声…ということは人間…でもちよつと待て…おかしくないか？どうやったら

普通の人間がこんなことできるんだよ！？学校に爆発物でも持ってきたって

言うのか！？そりや不良も腰抜かすって…そんなことを思っている

とだんだん煙が晴れてきた…

「さつさとかかってこいよ…ただの人間風情が…」

その声の主は…見覚えがある…いや…そんなはずはない…なんでお前がここ

にいるんだよ…嘘だ…夢だ…！頼む…！醒めてくれ…そんなことを願っても

叶うはずも無い…そこにいる奴は俺もよく知ってる奴だ…でも…あえて俺は

聞いた…そうでないと信じるために…

「真…志……？」

ロード&ナイト 第二十章

「ロード&ナイト」

第20章 心の奥底！

「和輝か？邪魔だ。そこをどけ。」

「いやいやいや…おかしいつて。何か悪い夢を見てるだけだ…頬を抓れば…い

たい…分かつてる…夢じゃないことぐらい…

「どかねえ！真志！お前今何してるのか分かつてんのか！？」

不良を庇うように立ち塞がると、真志は

「分かつてるさ、今までの仕返しだ。力も無いくせに俺に楯突いた罰だ。」

ああもつ…何言ってるのか意味が分かんねえ…今にも泣きそうだ…

「何が罰だ！魔法をただの人間に使ってんじゃねえ！！」

「正義面してんじゃねえよ！！いくら和輝だろうが止めても無駄だ！！」

やる気が…だが…！！

「何でそんなことしなきゃなんないんだよ！！」

恐らく、無駄な質問だ。

「お前には一生かかっても絶対に分かんねえよ！！努力しなきゃ認められな

いのに、努力をすれば目の敵にされる奴の心なんて！！」

どういうことだ？…まさか…俺もお前を…苦しめてたのか…？

「炎の力よ燃え上げれ！《フレイム》！！」

速攻で魔法を打って来るか！！躊躇なんてもんは無いな！！

「光の力よ！聖なる力よ！《リフレクト》！」

火炎が飛んでくるすのでところで光の壁を作り上げた。そのまま火炎は光

に弾かれ、そのまま真志に向かって飛んでいった。やばい！

「真志！避ける！」

跳ね返しておいてなんだが当たってほしくない。しかし、リフレクトは必ず

魔法の詠唱者に跳ね返る呪文だ。嫌でも当たる。そのまま炎は真志を覆いつ

くすが、向こうもアイカムをつけているためダメージで計算されたようだ。

まあ、そこまで分かってないと弾き返さないけどな…そんなことより！

「大丈夫か！？」

「人に弾き返しておいてその言い草か…やっぱむかつくなお前…」
流石に痛手にはなっていないようだ…火に油を注いだ状態だな。

「魔法を人に向かって打つ奴がいるかよ！？それにお前なら安全だろうが！」

とはいえ…流石にこのままじゃまずい…何とか止めないとな…

「真志、俺もリフレクトを張ったし、ここから動く気も無い。もう止めてく

れないか？」

そんな言葉に対し、真志は

「なんだ、不良を助けて親友を蹴るか？結局正義面したいだけじゃねえか！」

聞く耳を持たないどころか、悪くなる一方だ…それでも…！

「もう勝負はついてる！これ以上は無駄だろ！？もう止める…！」

そう言うとき真志は、一つ大きな笑い声を上げ、

「アッハハハハ…勘違いしてないか？俺が何もしないとでも？」

何故か余裕の表情だ。あいつには魔法しかない、体力も俺があるからもし殴

りかかって来たとしても、どうにかできる自信がある。何故だ？

「怒れる大地よ全てを砕け！《ブレイク》…！」

そう唱えると、真志の周りに石が現れ、俺目掛けて飛んできた。

「いったたる！！魔法は無意味……」

その瞬間、弾かれる筈のその石の散弾は、リフレクトにぶつかり、リフレ

クトを碎き、一緒に消え去ってしまった。まさか！しまった……！

「相殺魔法……いや、魔法補助効果を消すための魔法つてのもあるんだぜ……そ

の舞い上がりきったおつむによく教えとくんだな！！裁きの雷撃よ降り注

げ！《スパーク》……！」

その途端、俺の真上から雷が真っ直ぐに俺へと落ちてきた。流石にダメージ

で計算されるといっても、痛みは伴う。全身をその雷撃の痛みが一瞬で駆け

抜けた。普通なら意識不明の重態に陥るであろう雷撃を喰らってもなお、意

識があるのは恐らくアイカムのおかげだ。

「ははははは！！これで魔法は弾けないぜ！！どうするんだ？正義のヒーロ

ーさんよ！！《ファイヤ》……！」

躊躇なく火球を飛ばしてきた。体を張ってその火球を止めたが……そうか……

お前は……止める気は無いか……だったら俺が助けてやらないとな……

「おい……なんか棒状の者持って来い。」

後ろで小さくなっている不良にそういうと、素っ頓狂な声を上げた。「ふえ！？棒？そんなもんでどうする気だよ！？」

「いいからさっさと持って来い！！」

そう大声で怒鳴ると

「は、はいいい……！！」

そう言って引けた腰のまま、階段を全力疾走で降りていった。

「なんだ？逃がしたのか？勇者さんよ…！」

まだそんな喋りかたしやがるか…！」

「違う、お前を倒すための物を取りに行かせただけだ。」

「おうおう優しいねえヒーローは…！逆巻く水よ押し流せ！《アクア》…！」

今度は鉄砲水を呼び出して俺に攻撃してきた。流石に体力がもたねえ！

「《リフレクト》…！」

「利くかよ…！《ブレイク》…！さらに《アイス》…！」

一瞬でリフレクトを崩し、さらに氷塊で攻撃してきた。魔法の腕はあちらの

方が上だ…

「《ヒール》…！」

「《フレイム》…！」

そんなやり取りが数分続き、やっと不良が帰ってきた。

「はあはあ…持って来たぞ…鉄パイプしか見当たらなかったけど…」

俺はそれをおもむろに奪い取り、

「遅い！さっさとここから離れる…！」

素早く真志に向き直し、その鉄パイプを剣のように構えた。

「なんだ？それでどうにかするつもりか？舐めやがって！」

そう言つて魔法を打とうとしたが、

「遅い！はあああ…！」

それよりも早く踏み込み、二太刀浴びせた。

「舐めてたのはお前のほうだったな…」

俺がそう言うのと同時に、真志は崩れ落ちた…

「忘れてたよ…お前が剣技使いだったってこと…さっさと殺れよ…」
空を見上げながら真志がそんなことを言っている。

「立て、そこでそこに真っ直ぐ立て。」

そう指示すると素直に従った。はあ…灸を据えないとな…

「さあ、お望みどおりだ…さっさと殺しな…！」

そんなことを言う真志の脳天に一発、鉄パイプで剣道張りの面をお見舞いし

た。

「あだだだだ！この野郎！頭かち割る気か！！」

流石に効いたのか悶えている。

「当ったり前だ！これでも分からないならホントにかち割ってやらあ！！」

そんなことを言った途端、真志は…泣き出した…う、それはそれで困る…と

りあえず…泣き止むまで待つか…

10分後

「なあ、和輝…何でこんなことになったと思うよ…」

そんなこと聞かれても困るが…

「こんな力、アイカム外しや無くなっちまうんだよ。だけど、真志はそれを

自分の力と思い込んだんだ。だからこんなことをやろうと思ったと思うし、

それに…俺は真志じゃないから全部は分からないけど…お前のことをきちん

とわかってやってなかった俺も悪かった。」

そう言って謝ると

「もしかすると、心の何処かでそう思ってたのかもな…俺、ホントはそんな

ことは言うつもりはなかったんだ…確かに和輝、お前ははっきり言

って腹の立つ奴だ。勉強してないくせに、しっかり点だけは取って…でも、分かって

た…それがお前の才能だって事も、そんな和輝が自分の才能をひけらかした

りしないことも…俺のほうこそ悪かった…」

なんだかんだ言っ…やっぱり真志はいい奴だな…俺のことも含め、
全てを

見直して自分が悪いなんていえる奴は、ほとんどいないと思う。

「仲直りだ、もう絶対に魔物との戦闘以外で使うなよ？」

そう言っ…

「だな、たまにお前相手に試し打ちさせてもらっけどな。」

そんなことを言いながら夕日の眩しい屋上で二人で笑い合っていた

…

ロード&ナイト 第二十一章

（ロード&ナイト）

第21章 ザックはレベルが上がった！

その後、あまり遅くならないうちに家に帰った。もう真志の顔は雨が上がった様に晴れていた。真志は元に戻ったが…もし、あれが普通の人だったら…

もし、止めてくれるような人がいなかったら…これは本当に恐ろしいものになりうる可能性を秘めているのか…気を付けないとな…

「ただいまー。」

とまあ、いつも通り誰もいない家に帰宅したことを告げる。

「あら、おかえり。」

返事が返ってくるとは予想していなかったため、かなり驚いたが、そこには

母親の姿があった。聞いたところによると、タイムセールがあったとかで、

いつもより早めに買い物に行っていたらしい。

「そんじゃ、自分の部屋に戻ってるから。」

そう言っただけその場を立ち去ろうとしたその時、

「和輝、あなた私に隠し事してない？」

心臓が跳ね上がったのが分かる。バレ…た…？ いやいや…バレるはずがない。

一度たりともそんな素振りを見せたことも無いし、言ったことも無い。なら

何故…親の勘…か…仕方ないな、隠し通せることでもないし、正直に話そ

う。

「母さん、えつと…今から言うことは全部本当のことだから…心して聞いてくれよ…」

母親は小さく頷き、俺の話に耳を傾けた。俺もこの《ロード&ナイト》が届

いてからのことを、全て包み隠さず話した。流石に信じれないような事ばかりだ。実際、俺も未だに信じれないこともあるぐらいだ。親は流石

に信じれ

るはずが無いと思っていたが、

「なるほどね。それじゃ、ちゃっちゃと終わらせなさい。」

まさかの返答だった。いやいや…失礼かもしれないが、まさか信用するとは

思っていなかった。

「母さん…今の話、本当に信用するの？」

あまりにもさらっと理解したため、一応聞いてみると

「自分の息子の言うことを信用できない親がどこの世界にいるのよ。分かつ

たらさつさとそのヘンチクリンなの取ちなさい。」

小さく頷き、俺は無言で自分の部屋に向かった。母親に背を向けてから俺は

ずっと、ずっと、涙をこらえて歩き、部屋に着いて号泣した。もちろん、

声を殺して。母親というものがこれほどまでに偉大に感じたのは、生まれて

初めてかもしれない。尊敬することはあっても、それ以上の感情は湧かない

はずだが、もうそんな感情の領域を振り切っていた。それから15分

やっと泣き終り、ようやくゲームをつけることができた。

「「ザック」よお！ロード！おはよう…ってあれ？泣いてんの？」

流石にさっきまで泣いていたから、目が腫れていたようだ。という
か前から

疑問に思っていたんだが、何故、こいつはテレビ画面から俺が見え
るんだ？

カメラでもアイカムについてるのか？ああもう！考えても仕方が無
い！

「うつさい！さつさと先に進むぞ！」

そう言い放つと、流石に泣いていたことは察してつつこまなくなっ
たが、

「「ザック」その前に、みんなに連絡しないとまた一人旅になるよ
？」

なんと面倒なシステムなんだ…！まあ当たり前か…みんなプレイヤ
ーなんだ

から。仕方ない。

「みんなー。ゲームできる常態かー？」

全員に確認を取る。

「和輝か、こっちは問題ないぞ。」

「私も大丈夫よ。」

「よっしゃあ！さつさとやろうぜ！」

一人だけ気合入ってんなあ…猛だけなーんか意気込みが違う気がす
るんだよ

な…まあいいや。

「ザック、みんな準備オツケーだ。」

そう言う

「「ザック」了解、こっちも準備できてるよ。」

そう言われ、画面を見ると、ザックの周りにいつの間にかみんなが
集まって

いた。よーし…それじゃ、

「ゲーム…」

「「ザック」スタートだ！」

最近、気が合うようになってきたな…俺も色々あったが、ザックも色々やつ

てるみたいだからな…互いに成長してるのか…

「「リーサ」あの…気のせいじゃなかったら、町中に魔物が溢れかえってるんですけど…」

リーサがそんなことを言い出した。確かに周りを見れば、そこらじゅうにリ

ザードマン達がいる。まあ俺らは知ってるからなんとも無いが、知らなければ

やそんな反応になるだろう。

「「ザック」えつとね…昨日の間にリザードマン達と仲良くなったんだ。それ

でみんなもここに住んでるってわけ。」

説明不足にも程がある。これじゃ伝わるものも伝わらない。また、結局俺が

説明か…そう思っていたら、

「「ブライ」おお！ザックか。精進しているか？」

ナイスタイミングだ！ブライ！この人？に直接説明してもらおう。

「「ブライ」…というわけだ。国王とザックには心から感謝している。」

ブライの説明のおかげで、皆納得したようだ。

「「ザック」ブライさん。ここから一番近くの王国ってどこにありますか？」

お、言葉が綺麗だ。雨でも降るかな…

「「ブライ」ここから一番近くの国なら…トトツリ砂漠の王国だな。」

砂漠…これはまた…

「「グレイ」砂漠越えをするなら準備をしたほうがいい…」

そういえば初めてグレイの声を聞いた。意外といい声だ。

「「エッジ」準備なんて必要無いぜ！砂漠の魔物なんてこの俺様が
ちよちよい

のちよいだ！」

何故か恐ろしく自信満々のエッジ。よく見るとリーサも…ということだ？

「実は、猛と協力して昨日のうちにかなりレベルを上げておいたの。」

おい！理沙！そんなことしてる場合じゃないだろ！勉強しろよ！あ
あ…俺も

か…やっぱり言わないでおこう…

「「エッジ」俺もリーサももう、レベル38だ！すげえだろ！」

うん…流石だよ…集中してやりすぎだよ…レベル上げなんてしてない俺が馬

鹿に見えるわ…

「「リーサ」グレイさんは何レベルになったんですか？」

「「グレイ」28だ…」

今更だが…こいつら平然とレベルを持ち出してきたな…人間味があるのに、

そういうとこだけゲーム内の人間だから困る。親近感を持って接していたら、

急にロボットな所を見せつけられてまるで、崖まで一緒に海を見に行つて、

そのまま後ろから突き落とす昼ドラのようだ…分かり難いつて？大丈夫だ…

俺もよくこの状況が分かん。

「「エッジ」だっせー！かっこつけてるくせに、全然レベル上がってねえのか
よ！」

それが仲間に対して言う言葉かよ！…！…！と言つか皆、元々集まった時のレベ

ルは18、だから十分上がってると思うんだが…ザックに至っては…
「「リーサ」あの、ザックさんは今何レベルですか？」

ほいきた。この町のいざこざやら、正確には倒してない敵ばかりやらで全

然レベルが上がっていない。

「「ザック」19だよ。」

流石にその言葉には皆、驚いていた。まあ、当たり前か…一晩で1レベルし

か上がってないからな…

「「グレイ」ならお言葉だが、技や魔法はどのくらい覚えたんだ？」
流石にムツとしたのか、少し強めの口調でエッジに聞き返していた。
すると

エッジはにやけた顔のまま

「「エッジ」5つだよ。しかも結構使える技ばかりだ！」
と胸を張って宣言していた。が

「「グレイ」俺は15だ、結局、やっていたのはレベル上げだけか…」

と鼻で笑いながら言っている。何気にあいつら良いコンビになりそうだな…

「「エッジ」なんでそんなに覚えてるんだよ！」

流石に天狗になった鼻を折られてびっくりしている。

「あー、和輝か？なんかこいつらが勝手に話したから俺が説明するよ。」

真志、ナイス！

「このゲーム、説明書読んで分かったけど、どうやら主人公達はそれぞれ戦

いや、出会い、会話などで経験を積むと、技を覚えるみたいなんだ。つまり

ただレベルを上げても技を覚えるけど、色々経験させてやったほうが技を覚えるみたいだ。」

あの説明書を読んだのか…ちなみに俺は前回、読んだと言ったが《読んだ》

だけだ、内容は重要そうなのしかよく覚えていない。死にたくないだけだか

らな…前も言ったが、説明書は…活字は…大っ嫌いだ!!

「「リーサ」そうなんですか…それじゃ、ザックさんはどのくらい技を覚えた

んですか？」

技…まず、グレイから基本四台魔法である、ファイヤ、アイス、サンダー、

ウォータを教えてもらった、その後、アルラグナ戦直後にザックが四聖剣

《水》を覚え、さらに自分で連続突きの強化版、五月雨斬りを覚えて、洞窟

挑戦後に出会ったクラウドさんから中級魔法のフレイム、フリーズ、スパー

ク、アクアと中位魔法のウィンド、ロック、シード、メタル、を教えてもら

った、その後、ミランダと別れる際に、陣形の後方支援と技のヒットアウ

エイを教えてもらった、ブライから地竜斬り、リザード流剣技《陽炎》を

教えてもらったらしく、さらに最後につきさつき、中位補助魔法のブレイク

とアシッドを教えてもらっていた…って多っ!!何個だ!?

「「ザック」えっと…全部で19こだね。」

ザック…自分で言ってる馬鹿らしくならないか?エッジは20レベ

ル上げて

5こなのに、お前は1レベルで19こだぞ？覚えすぎと言つか、濃厚な1レ

ベルを送るなよ…ホントこういうところは人間味がありすぎる…

「「リーサ」えつと…ザックさんのロードさん、エッジさんが気絶しました。」

最悪のタイミングで、最悪の台詞を聞いたな…仕方ない。エッジが起きたら

トトツリ王国を目指して出発だな。その前に、時間がもつたいないから買い

物を済ませとこう。

「集合場所はエッジで、各自、必要な物を買っておいてくれ、分担作業だ。」

そして、一旦解散した。エッジを置いて…

っぱこんな

とくに王国なんてあるわけが…」

そこまで言いかけたときに

「「リーサ」見てください！ありましたよ！」

あったのか…というかすごいタイミングだな…そのやつと見えた王国に向か

って歩き出した。数分後、やたらでかい城壁に包まれた巨大な王国にたどり着いた。

「「エッジ」でけー…一体何のためにこんなでかい城壁立てたんだ…？もしか

すると…戦争でもやってんのか？」

戦争って…発想が怖いよ…せめて魔物の襲撃とかそういう喻えにしてくれよ。

「「兵士」この城壁は砂嵐から建物を守るためですね。建物よりも高くないと

風に乗った砂が原因で建物の老朽化が早くなってしまうんです。」

なるほど…要するにこの城壁は砂漠の王国ならではってことか…

「「エッジ」なあ、さっさとこんな暑苦しいとこ出ようぜ？このままじゃ干物

になっちまう。」

さっきからお前、文句しか言っていないような気が…えらくメンタル面の弱い

モンクだな…

「「ザック」あの、すみません。この王国から一番近い王国は何処になります

か？」

「「兵士」ここから一番近くの国は…オカサオ王国ですね。しかし、今は向こ

う側には抜けられないんですよ。」

なんでだ？確かここは砂漠のど真ん中の国のはずだから、向こう側に抜ける

なんて簡単なことのはずなのに…

「ザツク」なら…なんでわざわざこんなところに王国を建てたんですか？ど

うせなら、砂漠から少し離れた位置に建てた方が…」

確かにその通りだが…少し失礼な気がする…

「????」それはこの王国が長い月日と共に砂漠に飲み込まれたからだ。」

誰だ？いきなり違う人物から話しかけられた。

「リーサ」えっと…てことは元々この国は砂漠に建っていたわけではないと

いうことですか？」

「????」そういうことだ。」

へえ…そんなことが…ってこいつは一体何者なんだ。えらくこの国のことに

詳しいから、この国の住人であることは分かるけど…

「????」そして、聞くところによるとこの砂漠を抜きたいと、そういうこ

とかな？」

抜けるのか…というよりは抜け方を知っている、と言ったほうがよさそう

だな…

「グレイ」その前に名前ぐらい名乗ったらどうだ…」

「ゼス」俺の名はゼスだ。俺はこの砂漠の抜け方を知っているが…」

ゼスと名乗ったその男性は、頭から足先までこの国独特と思われる黒っぽい

布でできた服を着ている。さしずめアラビア系と言った方が分かりやすいの

かな？そんな服装だが、顔は極力隠し、腰にはダガーらしきものを一本だけ

さしている。

「グレイ」知ってるが、どうしたんだ？その先は…」

「ゼス」そこには恐ろしい魔物が住んでいる。そこで交換条件だ。俺はそこ

まで案内する。そしてお前達はその魔物を倒す。どうだ？」

そういうことか…だったら

「ザック」引き受ける！要するに唯一の出口がそいつのせいで使えなくなってるんだろ？だったら見捨ててはいけないな！」

それぞれが自己紹介をし、改めてその場所と、この砂漠の成り立ちについて

教えてもらった。

「ゼス」この国は、元々平原に建っていた王国だった。が数年前から近くで

砂漠化が進み、今に至るわけだ。さらにこの砂漠は別名無限砂漠と呼ばれて

いる。」

「ザック」無限砂漠？」

「ゼス」この砂漠は不思議なことに、入ることは出来ても出てくるのが出来ない。

い。しかし、こんな蟻地獄のような砂漠でも、出る方法がある。」

「グレイ」それがその抜け道だということか…」

なるほど…そして…

「ザック」その唯一の出口をその魔物が陣取っていると…ならなおさらだな

…よし！準備をしてすぐそこに向かおう！」

その通りだな…！俺達がぐずぐずしてたら、先にも進めないし、この国で暮

らしてる人たちが困る期間が延びてしまう。まーだエッジがぶつぶつ言っ

いるが、無視して準備を整え出発した。流石にこの辺の土地に詳しい同行者

がいたため、目的の洞窟にはすぐに着いた。というか洞窟が多すぎやしない

か？まあ、今回は洞窟と言うよりは巨大な一枚岩同士の隙間と言う感じた。

「「エッジ」これまたでかいなー…しかし…こんな狭い隙間の奥にホントにそんな厄介な魔物が棲んでるのか？」

確かに…こんな狭いところに多くの冒険者を退けた魔物がいるとは到底思えない。

「「ゼス」入り口は狭いが、中は開けている場所が何箇所もある。その一番最

後の場所にいる魔物…ヴァルバロアが今回の目的の魔物だ。そしてその奥が

お前達の目的地である出口だ。」

ヴァルバロア…なんだかようやく強敵と言える魔物の名前を聞いた気がする

な…なかなかどうしてそんな名前の魔物が登場しなかったからな…

あ、決し

てブライのことを批判している訳ではない。どうも名前が人間じみてるから

…つい…

「「ザック」よし！速攻で終わらせるぞ！」

全員から威勢のいい返事が帰ってきた。それを合図に砂漠の溪谷に入っ

った。しばらく進むとゼスが言っていた通り、開けた場所に出た。

そういう

場所には魔物が溜まるようで…

【アントウリオが現れた！】

「「ザック」一気にかたずけるぞ！」

アントウリオ…見た目はアリジゴクってとこだな…だったら！

「遠距離から攻めるぞ！スパークだ！」

予想通り動きも早くなく、遠距離からの魔法連射で簡単に倒せた。

その後も同じ様な敵しか出なかったからサクツと奥まで来れた。渓谷内だか

ら出てこれる敵に制限がある。見たいな感じなのかね…？

そして…遂にヴァルバロアのところに辿り着いた。見た目は蛇と蠍を足して

2で割ったような姿だが、でかい、めちやくちゃでかい。ゆうに3メートル

は超えている。だが、怯んでいられないな！速攻で終わらせる！

ごめんよ…ホントに速攻で終わったよ…

「「ゼス」まさか…ここまで強いパーティーに出会うとは…」

一応、補足しておくが、ザックLV19、グレイLV28、エッジLV38、リー

サLV38だ。ザックがレベル的には一番弱いはずなのだが…一番活躍していい

た…このゲームにおけるレベルという概念は一体なんなんだ？

ちなみにゼスも戦闘に加わっていたが、LVは35、軽く見積もっても要する

にこのレベルが必要ってことなんだろう…多分…

まあいい！そんなことはおいとして…これで砂漠も抜けられたし、トトツリ

王国も救えた！一件落着かな？

「「ザック」それじゃ！ゼスもこれからがんばれよ！」

そういつて別れようとしたが、

「『ゼス』待つてくれ。せめて国王からお礼を言わせて欲しい。」

国王つて…流石にそんなにのんびりする時間は…って、あれ？今、言わせて

欲しいって…

「『ゼス』すまなかった。今まで黙っていたが、私がこの砂漠の王国の元国王、

ゼス・ブランフォーゼだ。心から礼を言う。有り難う。」

こ…国王だったのか…流石に国王には見えない。いくらなんでも若すぎる…

恐らく、ザック達と同じ年だ。その齡で国王とは…

「『ザック』そ…そうだったんですか…しかし…なぜこんな危険を冒してまで

我々に同行したんですか？」

確かにそうだ。若さ故かもしれないが、いくらなんでも危険極まりない行動だ。

「『ゼス』今まで通りでいい。同い年なんだ。それに…我々砂漠の民は、代々

アサシン

暗殺者の系譜だ。故に部外者に力を借りたがらない。俺はこのままではいけないと思う。アサシンの力は伝えていかなければならないし、い

つまでも一つのことにとだわり続けていても将来的には何も変わらない。伝

統を捨てずに、新たな知識や技能を取り込んでいくべきだと俺は思うんだ。

だからこそ、あえて俺は独断で動き、外の世界の人間の技量を見たかったの

だが…予想以上だったな…」

やはり同い年だったか…しかし、流石にそこは国王。ここまでたく

さんのこ

とを考えているとはな…しかし！残念ながらこいつらおっそろしい程に強い

だけだ。勘違いしないように！

「ザック」そうか…それじゃあ、どうせなら外の世界を見て回ったら？」

流星にその言葉は軽薄すぎる気が…

「ゼス」そうしたいところだが…生憎、俺も国王だ。国民をほったらかして

動き回るような軽薄な行動は行えない。いずれ国にも多くの旅人が来るだろ

うからそういう人たちから情報を得るよ。また会おう、ザック。」

そう言って右手を差し出してきた。お互いしっかりと握手をし、別れた。

革命を望む国王、ゼス。いずれまた会えるといいな…よし！こっちもさっさ

と世界を革命しちまおう！

「ザック」よし！オカサオ王国を目指して…再出発だ！」

「一同」おー！！」

しっかし…さっきからエッジがぶつぶつうるさいな…もっ…そうして、砂漠を後にした。

ロード&ナイト 第二十三章

（ロード&ナイト）

第23章 商いの国オカサオ！

トトツリ王国を離れてそれほど経っていなかったが、魔物などにもほとんど

出会わず、真っ直ぐオカサオ王国へ来ることが出来た。しかし、この国の第

一印象は…国と言うよりも大きな市場のような場所だ。所狭しと並ぶ店、店

、店…そのほとんどが食品や装飾品のような一般生活やおしゃれで使うよう

なものばかりだ。一応武器屋や道具屋もあるが、規模がそういう店と全然違

う。宿屋に至っては…目に付くところには見当たらない。もしかするとない

かもしれない…

「「ザック」なんだか…店ばかりだな…」

「「エッジ」武器屋とかの品揃えは別に悪いわけじゃないぞ。」

そんな会話をしていたら、突然町の中央辺りからファンファーレが聞こえて

きた。急いでそっちに向かうと。

「「???」レディースアードジェントルメン！！本日、この瞬間をもつ

て、『ニュー・シレッコ』がリニューアルオープンする。宝石が欲しいご婦

人も、おいしい食材が欲しいグルメたちも一度は立ち寄らないと損だ！それ

ではぐゅっくりショッピングをお楽しみください。」

そう壇上にいた男が言った途端、集まっていた人たちが流れになつて一気に

そのニュー・シレッコという建物に流れ込んでいった。あまりにもあつとい

う間の出来事だったので、ポカーンとその光景を眺めていたら

「「????」皆さんはショッピングをお楽しみにならないんですか？」

とその男が話しかけてきた。

「「ザック」えつと…私たちは魔王討伐に向かつてる途中なんで、消耗品とか

武器、あとは防具が買えたら助かります。それと…ここから一番近い国も…」

ザックがそう聞くなり

「「????」ああなんだ、勇者とその御一行か…装備ならその辺の店で適当に

整えな。魔王城に近い国はここからだと言ウトウキ王国だ。そんなにさつさと

出ていきな。」

恐ろしいほどの対応の変わり方だ。

「「ザック」別になにもそんな言い方しなくても！」

ザックが言い返そうとしたが

「「????」悪いが、この国はお前らのような勇者を喜ばせるような施設は存

在しない。この国は…オカサ才は商売の国だ。宝石から食材、武器や骨董品

まで何でも揃ってる。しかし、勇者を優遇できるような懐は持ち合わせてい

ないんでな。ここは貿易で栄えた国だ。分かったらとっとと出ていきな。」

言い方がきついが…そういうことか…全ての国が打倒魔王を掲げているわけ

ではないのか…

「「ザック」せめて名前だけでも教えてください。」

「「ブリッツ」俺はブリッツ。一応、この国の国王で全ての商売を取り仕切っ

てる男だ。じゃあな、勇者御一行様。」

そう言ってこちらに背を向けたまま手を振りながら去って行った。

「「エッジ」なんだ？あいつ。ホントに国王なのか？ガラ悪いな。」

エッジ…悪いが今のお前の目つきもガラが悪い。そんなに睨む必要も無い。

しかし、遠くから声が聞こえる…

「「国民」大変だー！！また盗賊が現れた！！」

それを聞くなりブリッツは振り返り、その男のほうに向かっていった。すれ

違いざまに、

「「ブリッツ」またか…まったく…やっぱり兵士の一人ぐらい雇うべきかね。」

そう呟いていた…ってことは…！

「「エッジ」まさか兵士が一人もないのか！？」

「「ブリッツ」そうだよ。十露盤は弾けるが、兵士を扱うのは慣れてないんだ

よ。お前ら！速攻で商品をかき集めろ！被害総額を最小限に抑えろんだ！南

商店街ゲートを封鎖して足止めしろ！それから…」

手馴れているのか、慌てている商人達に次々指示していく。

「「ザック」俺達がその盗賊、退治するぜ！」

そうだよな！勇者が困ってる人間を放っておくなんてしちゃいけない！

「「ブリッツ」結構だ。さっさと魔王討伐に向かいな。」

あまりにもばつさりと切り捨てられた。

「「エッジ」なんだってんだ…こっちが手助けするって言ったのに…」

「「リーサ」どうしますか？流石にこのまま放っておくわけには…」

「「ザック」当たり前だ！なんて言われようが盗賊を迎え撃つぞ。」

「「グレイ」裏目にでなきゃいいがな。」

一言余計だよ…ま、置いていて…迎撃準備だ！

少しの間、商人達が品物を運んでいたため騒がしかったが、完全に撤退しき

ると恐ろしいほどに静まり返っていた。

「「ザック」なあ…ロード…」

ザックが急に喋りかけてきた。

「ん？どうかしたのか？」

「「ザック」いや…なんかさ…ただでさえ人間と魔物が争ってて、みんな今日

を生きるのも必死なのに、なんで人間が人間を襲ってるんだろうつて、そ

う思ったただけだ。」

こいつはこいつなりにいろいろ考えてるみたいだな…

「ザック、魔物にもいろんな考えを持ってるやつがいるように、人間にもい

ろんな人間がいるってことだ。ザックみたいに他の人間に必死になれる人間

もいれば、自分さえ良ければいいって考えの人間もいるんだよ。」

「「ザック」だからって！…」

「「グレイ」静かに…やつらが来たぞ…」

物陰に隠れて様子をうかがっていたら、門を壊して入ってきているのが見え

た。どこからどうみても盗賊だな…よし…ここは…

「「エッジ」行くぞ！…」

「ちょっと待て…ギリギリまで引き付けるんだ…」

盗賊たちも既に手馴れているのか、立ち並ぶ店舗を無視して真っ直ぐ門の方

へ向かってきていた。そのため思っていたよりも早く間合いが詰まった。

「「ザック」今だ!!」

その掛け声と共に一気に盗賊たちをなぎ払いだした。

「「盗賊」うわぁ!?なんだこいつら!」

あまりに突然のことだったようで、盗賊たちはかなりパニック状態に陥って

いる。そんな盗賊達を一気になぎ払う。

「「盗賊」くそ…一旦撤退するぞ!帰って姉御に報告だ!」

そう言って一斉に引いていった。

「「盗賊」畜生!覚えてろよ!」

そう最後の一人がお決まりの捨て台詞を吐いて逃げていった。

「「商人」おお…盗賊達が引いていくぞ…」

「「商人」助かったのか?」

気が付かなかったが、いつの間にか商人達が顔を出しており、一部始終を見

ていたようだ。

「「ザック」皆さん、もう大丈夫です。盗賊は去っていきました。」

ザックがそういうと、商人たちの顔に喜びの色が見えた。一斉に駆け寄って

きて、ザックにお礼を言っていた。が、

「「ブリッツ」礼は言わねえからな。助けるなんて一度も言った覚えはないか

らな。」

そう言ってブリッツはどこかに行ってしまった。

「「グレイ」裏目に出たな。」

「「リーサ」いいんじゃないですか?私たちが勝手にやったことな

ので。」

確かにそうだな…しかし…気になるな…あの盗賊は、確かに姉御に報告する

と言っていた。ということは…また盗賊のボスは女性なのか…下手するとミ

ランダが戻ってるなんて可能性もあるな…

「「ザック」盗賊団のアジトに行こう。」

とザックがいきなり切り出してきた。

「「ザック」ロードも気になってたんでしょ？」

さすがにお前ならもう俺の考えてることは分かるか…

「「エッジ」でもどこにあるんだ？その盗賊団のアジトは。」

「「ブリッツ」白蛇盗賊団のアジトならすぐ近くの崖に出来た横穴だ。」

声のするほうを見るといつの間にかブリッツがそこにいた。

「「ザック」情報ありがとうございます。」

「「ブリッツ」てめえらのためじゃねえ。お前らが勝手に盗賊団を潰すって言

ってるから利用させてもらっただけだ。」

そう言っただけでどこかに消えてしまった。なんか新手のツンデレだな…

「「ザック」……それじゃ…さっさと終わらせようか。」

一致団結して盗賊団のアジトに向かった。

5分ほど歩いたところに、看板でも立ってそうなぐらい分かりやすいアジト

があった。さすがにこんななら全員で力を合わせりゃ潰せるんじゃないの

かねえ…

「「ザック」とりあえず見張りは終わりっつと。」

さらっと見張りを全員片付け、残すはいつも通りダンジョン攻略だけになっ

ていた。しかし、

「「ザック」予想以上に盗賊がいるな…以前より規模が大きい…」
ザックの言う以前というのはミランダの時の事だろう。その時の人数と比べ

ると雲泥の差だ。さすがにこの人数全てと相手していたら、その姉御と呼ば

れていた首領に辿り着く前にやられてしまう。

「「グレイ」帰るか？」

「「エッジ」誰が！…一人残らず倒してやらあ！」

「「リーサ」無理ですよ！…いくらエッジさんが強くても…」

「「ザック」必要最小限の力で出来るだけ敵に出会わずに進もう。」

そっぴゃあ…似たようなやり取りを前の洞窟でもやってたなあ…

「「エッジ」でてこおおい！！俺がまとめてぶつとばしてやらあ

！！」

そうそう…こんな感じで作戦がオジャンになったんだよ…ってバカアアア！

「「盗賊」誰だあいつは！？」

「「盗賊」構うな！ぶつ潰せ！！」

一斉にエッジに向かって駆けてくる盗賊たちを横から魔法を打ち込んで止め

た。ザックが冷静に対処できるようになったと思っただらこれかよ…

「「ザック」やるからには全力だ！全員潰す勢いで行くぞ！！」

「「????」その必要はないわ。お前達、引くんだ。」

どこかから声が聞こえる。しかしこの喋り方…恐らくボスだ…

「「エッジ」どこだ！どこにいる！」

「「????」喚かないでくれよ。ちゃんとあんたらの目の前にいるよ。」

そう言われ目の前を見ると、盗賊たちが左右にずれていく間から見覚えのあ
る顔が現れた。

「「ザック」ミランダ!? 何でまた盗賊に…」

ザックがそう聞くと、

「「????」ミランダ? なんであんたらが、わたしの妹の名前を知ってるん

だい?」

い、妹!? 確かに似てるっちゃ似てるが…少々似すぎな気が…

「「ザック」じゃ、じゃあ…あなたは?」

「「アマンダ」わたしはアマンダ。ミランダの双子の姉で、この白蛇盗賊団の

ボスを務めてる。」

どおりで…似ているわけだ…

「「ザック」はあゝ…そういうことか…姉妹揃ってなにしてるんだよ…アマン

ダ! 今すぐにこの盗賊団を解体するんだ!」

「「アマンダ」断る。と言っても聞きそうにないわね。だったら方法の一つ。

なんだか分かるわよね?」

この流れ…そうですね、またですか…ホントに同じ性格だなあ…

「「ザック」一対一か…受けて立とう!」

ロード&ナイト 第二十四章

（ロード&ナイト）

第24章 対決アマンダ！そして…

ミランダの時然り、見た目で判断するのは危なそうだ…ザック…油断するな

よ…っと言おうと思っていたのだが…ザックがなんだか怒っているように見

えたので、何も言わなかったが…どうしたんだ？

「アマンダ」威勢がいいね…そういうやつは私は嫌いじゃないよ！」

そう言つて剣を構えるアマンダ。流石にもう中盤だろうから手強いはずだ…

「アマンダ」私がただの盗賊の頭だと思つたら大間ぢ…」

そこまで言いかけていたのだが…ザックが一気にアマンダの懷に飛び込み、

斬りかかっていた。つておいしい！！それは不意打ちというものだ！！

「アマンダ」ちょ、ちょっと待ちなさいよ！！危ない危ない！！

とか何とかいいながらきつちり剣撃を全て避けているあたりが中盤だなあ…

「ザック」ぜりやあああ！五月雨斬りい！！」

技を出し切ると共に、アマンダは一度距離を置いた。

「アマンダ」流石にここまで来ただけはあるようだね…でもま…」

「ザック」！！」

聞く気無し！！なんかザックがいつもと全然様子が違うんだが…

「アマンダ」くっ…！距離を取った途端、魔法とはやるね…だつたらこつち

もいくよー!!《フレイム》!!」

「ザック」^{リフレクト}「!!」

反応が早い!!何がそこまでザックを駆り立ててるんだ?そしてアマンドの

放ったフレイムは見事弾き返され、アマンドに当たった。

「アマンド」いい反応ね…」

いや、早すぎる…俺は全く触ってないぞ…こいつが勝手に暴走してる…

「アマンド」だったら《リフレクト》!!これであんたはわたしに魔法を…」

「ザック」^{ブレイク}!!そして《スパーク》!!」

頼むから話を聞いてあげて!!というか、頼むから操作を俺に戻してくれよ

!!しかもブレイクもスパークも自分に唱えるのかよ!!そんなことを思っ

ていると、剣を上にかざし、落ちてきた落雷を剣で受け止めた…つてええ!

?

「ザック」あんたらは姉妹揃ってなにやってんだよ!!」

そう言っただけ雷を帯びた剣で一気に斬りかかった。というよりも…あんたが怒

ってた理由って…そこか…

その雷を帯びた剣は、斬るたびに周囲に落雷を落とし、一瞬でアマンドを追

い詰めた。そしてさらに

「ザック」ぜやあああ!!《雨唄【神鳴】》!!」

技名を叫びながら最後の一太刀を浴びせ、さらに落雷で追撃。もちろん再起

不能なレベルのダメージだろう、アマンドはさすがにその場から動けなくな

った。というか…こいつしれつと新技使いやがった…

まあ、そんなこんなで…

「「ザック」いいですか？アマンダさんの願望は一応オカサオ国王に伝えるん

で、もう二度と、二度と！こんなことはしないでくださいよ！」

今…二回言ったな…相当気にしてるのか…何故かは知らんが…

「「アマンダ」はいはい…わかったよ…」

返事自体はやる気が無かったが、子分達を全員解散させ、素直にザック達に

付いてきたところを見ると、ミランダ同様根はいい奴なんだろう。

まあ、姉

妹だしな…だが…一つだけ前回と違う点があった。それは…

「「ブリッツ」やなこった。お断りだ。」

そう、こいつである。

「「ザック」なにもそんないい方しなくても！」

ザックが反論するが

「「ブリッツ」言っとくがな、俺は一口も助けくれなんていった覚えはない

し、その…アマンダだったか？そいつの仕事を斡旋するなんて約束した覚え

もない！分かったか？」

かなり強い口調で言い返してきた。まあ、実際問題こっちが勝手にやったこ

とだし…

「「ザック」それでも助けたのは事実だ…ですよ！」
ザックも大分大人になったな…よく耐えた。

「「ブリッツ」まあいいだろう。百歩、いや千歩譲ってそのことに
関しては感

謝しよう。だが…なーぜ今まで商売の邪魔をしてた相手をよりにも
よってこ

の俺が助けにやあならんだ!!」

流石に相手は大人、ザックよりも現実を見た返答だな…

「ザック」アマンダさんだってもう二度としないと……」

まだ何とか言い返してるが…

「ブリッツ」ああいいいぜ？お前が三回まわってワン！って言った
らな。」

酷い条件だな…そしてザック！流石に剣は下ろせ!!

「ザック」い……い……い……いいいでしょう……」

なかなか耐えるな…今回は…そして見事やって見せたのだが…

「ブリッツ」ホントにやるとはな…」

「ザック」これで…」

「ブリッツ」死んでもやだあゝ」

酷つでえ大人だ…ザックウウ!! 剣は下ろしてくれええ!!

「ブリッツ」だいたいがそんな口約束を信用できるかよ。そんな
もうしない

なんて言葉を一々鵜呑みにしてたら、商売なんざ出来るかってんだ
よ!!」

ごもつともだが…流石にあれは酷いぞ…

「ザック」じゃあどうすれば!…」

ザックが必死に耐えながら聞き直すと

「ブリッツ」そんなにそいつが大事だってんなら交換条件だ。」

「ザック」交換条件？」

いったいどんな条件を吹っかけてくるやら…

「ブリッツ」この国の国民に、戦闘技術を指南できる人材を連れ
てきな、そ

したら、そいつの…船乗りだったか？その夢叶えてやるよ。」

予想していたよりも意外と普通の交換条件だったな…

「ザック」それなら！俺達が…」

「ブリッツ」馬鹿、誰がお前みたいなケツの青いガキに教わるか
ってんだ。

すっかりとした兵士なり、魔法使いなり、日雇い戦士なりを連れてくるんだ

な。じゃ、期待しないで待ってるぜ。」

ザックウウウ！！剣を下ろせええ！！みんななんとかしてザックを止める

おおお！！

やっとザックが落ち着いた…

「「ザック」ふっざけんな！！この腐れ国王！！お前何様のつもりなんだよ！

！！いい加減にしろよ！！」

いや、遂にブチ切れた。

「「ブリッツ」喚いてんじゃねえ！！糞ガキが！！いいか？お前さん達は勇者

御一行だろうがよ！そいつらがこんなところで油売るつもりか？それが人助け

ってんならどうぞ勝手にやりやあい！！だがな、いつまでそうして教えて

から魔王を倒しに行くつもりだ？爺いになってからか？それまでに世界が滅

ぼされないように願いながら、たかが小国一つのために体張りな。

お前が思

ってるほど世界は甘くないし、時間は待っちゃくれやしないんだよ

！！お前

が、お前らが本当に成し遂げなきゃいけないことは一人の人間や一つの国を

救うことじゃなくて、《世界を救う》ことなんだよ！！いいか！！分かった

ならさっさといつまでもここで戦闘の指南を出来る人材を連れてくるんだな

！！それが嫌なら勝手にしやがれ！！」

そこまで言い切ると、一切こちらに振り返らずに街中へ消えてしまった。流

石にザックにも今の言葉は堪えたようで…真剣に考え込んでいる…

「ザック」……………なあ…ロード…俺って…間違ってるのかな…？」

そいつは…難しい質問を…

「答えるとすれば…間違っていない。かな？」

「ザック」なら…！」

「だけど、ブリッツも言ってた通り、綺麗事だけで生きていけるほど世の中

は甘くはないってことさ…だからって信念を曲げる必要はない。俺の言いた

いこと、分かるよな…？」

「ザック」それでも…俺は助けたい！困ってる人を見捨ててまで魔王に急い

で挑みに行く意味は俺には無いと思う！」

さすがだな…ザック…それでこそ真の勇者だ…

「じゃあさっさと行動しないと、な？」

ザックは無言で頷き、仲間と一緒に考え出した…とは言ったものの…

「リーサ」ザックさん、あてはあるんですか？」

「ザック」それがないんだよね……どうするか…」

確かにそうだ。今まで会ってきた人達の中に、剣の腕が立つ一般の剣士はい

ない。

「エッジ」そっぴや、あのブライってやつは駄目なのか？」

エッジが閃いてくれたが…

「ザック」ブライは確かに俺に剣技を教えてくれた人だけど、それと同時に

一族を率いる長でもあるんだ。流石に長いこと離れるわけにはいかないから

な…ブライは無理だ。」

確かに…彼では条件が一致しない。

「「リーサ」 그레이さんは心当たりは…」

「「그레이」ないな。適当にそこら辺で見繕えばいいだろ。じゃなきゃ諦める

か、だ。」

「「ザック」仕方がない…探すしかないだろ…」

ザックがそう言い、歩き出そうとした先から…

「「???」ははははは…また困ってるみたいだね。」

聞き覚えのある声が聞こえてきた。というか、この喋り方は…

「「ザック」クラウドさん！砂漠は抜けられたんですね！」

「「クラウド」砂漠をひたすら歩き回ってたね…そしてやっと溪谷みたいな場

所にいた魔物を倒して抜けてきたんだよ。」

そっぴいや…先に出雲さんたちが出発してたな…ん？おかしくないか？先に

抜けてたにしろ、後から抜けたにしろ、何故魔物と戦っているんだ？

「出雲さん、戦った魔物ってどんな姿でした？」

「「出雲」ヴァルバロアという魔物だったね。蛇のような蠍のような…なんと

も言えない不思議な魔物だったのも覚えてるよ。」

おかしい…完全に矛盾している…嫌な予感がするな…

「「クラウド」ところで、今何を相談していたんですか？」

「「出雲」我々でどうにかできることなら協力させてもらっよ。」

渡りに船…いや、藁にも縋る思い、かな？兎にも角にも聞く価値はある。

「「クラウド」なるほど…そういうことですか…」

「「ザック」心当たりはありますか？」

「「クラウド」一つだけありますよ。」

おお！心待ちにしていた言葉だ！

「「ザック」それは！？」

「クラウド」砂の民ですよ。彼らは代々、アサシンの系譜だと言っていたじ

やないですか。」

「ザック」つまり…彼らに協力してもらつと…そういうことですね！」

確かに悪くない案だ。

「グレイ」そう上手くいくものでもないぞ。」

また余計な一言を…

「グレイ」先祖代々引き継いできた伝統に近いジヨブだ、そう簡単に教える

はずがない。」

なんだか…珍しく批判ではなくまともな意見を…

「クラウド」なるほど…でも、試さずに諦めるのはどうかと…」

「グレイ」悪いがそいつは期待できない。そういう一族続いてのものになる

と、みな閉鎖的になるものだ。」

「ザック」なんか詳しいな…」

「グレイ」そういうものだ、というだけだ。」

まあ、確かにそうだ。実際ゲームじゃなくても山奥の村などは閉鎖的だし、

伝統の技というものを簡単に教えたりはしないからな…

「グレイ」仮に教えてくれるとしても、向こうにとっては見返りが無い。動

こうと思うものは少ないだろう。」

見返りか…見返り、見返り？あ！

「ザック」それなら…！どうにかなるかもしれない…！」

「グレイ」どうということだ？」

「ザック」つまり……」

その後…

「ザック」こういうことなんだが…いけそうか？」

「「グレイ」確かにな…悪くはない…賭けてみてもいいだろうな…」
全員が賛成し、早速トツリに向かおうとしたその時、

「「????」待ちな!」

物陰から誰かが声をかけてきた。

「「ザック」誰だ!？」

素早く剣を抜くが…その必要は無かった。

「「ブリッツ」その話が本当なら俺を連れていきな。」

出てきたのはブリッツ、ていうかお前何時からそこにいた!!

「「ザック」どういう風の吹き回しだ!？」

何気にザックも根に持つほうなのか…

「「ブリッツ」なーに、ただ確実に俺の力が必要になるだろうって話だ。」

説明しないところを見ると…聞かない方がよさそうだな…

「「ザック」どういう意味だ!？」

ああ、そういうところはまだ子供なのね…ザック、察してやれよ。

「「ブリッツ」お子様に話すことはねえよ。どうするかだ、お前らだけで行っ

て追い返されるか、俺を連れて行くかだ。」

ザックは少しムツとした顔で

「「ザック」連れて行くのは構わないが、流石に護衛をしながらじゃ戦えないぞ?」

ぞ?」

と聞き返した。小さな抵抗を見せるなあ…

「「ブリッツ」確かに俺は戦闘に関してはからっきしだ。だが、こいつなら使えるぜ。」

そういつて見せたものは…銃?なのか?

銃身は丁度腕よりも少し長いくらい、ポンプする部分も、マガジンも見えな

い…これどんな銃なんだ?

「「ザック」それは?…」

「「ブリッツ」ここから少し南に下った場所にこの大陸とは海で隔たれた大きな島がある。俺は商人だからいろんなところから商品になりそうなものを集めて、

いるが、その中でその島に住む《プロネジア》という種族が作っている、機械といわれる代物だ。その中の武器として使うものがこの銃だ。どうやら

これは俺に合っているようなんでね。かなり使いこなせるぜ。」

へえーメカに強いのか…というよりやっぱりこの世界には機械が普通には存在しないのか…

「「ザック」そうか…なら話は別だ、戦えるんなら護衛はしないぜ。」

地味いゝにめんどくさい性格だなこいつ…

「「ブリッツ」そうかい、そんじゃお前らで好きに…」

「「ザック」戦えるんならあんたもただ護衛されるだけの客人じゃなくて、仲間だからな?」

あらま、何気に大人になってる…

「「ブリッツ」フツ…ガキンチョのくせに言ってくれるじゃねえかいいだろ

う、俺の背中には任せたらあな。」

「「クラウド」どうやら話はまとまったみたいだね。」

そこであなだがまとめるのね…

「「クラウド」今回は僕も同行させてもらつよ。」

なかなか賑やかになったな…6人が…

決まったのなら早く行つたほうがいいな。

「「ザック」それじゃ、改めてトトリ王国を目指して…」

「一同出発！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9284u/>

ロード&ナイト

2011年11月5日09時24分発行